

令和6年度
高知県立大学看護学部・
看護学研究科年報



はじめに

高知県立大学看護学部は、1952年に高知女子大学家政学部看護学科として我が国で初めて4年制大学で看護学教育をスタートして以来、実践—教育—研究の連環の中で「看護学とは何か」を探究し、将来に拓かれた看護学の構築にチャレンジし続けています。大学院は、1998年に看護学研究科（修士課程）としてスタートし、2014年に看護学専攻博士前期課程・博士後期課程、博士課程をもつ研究科へと発展し、激動する社会の中で看護のイノベーションにチャレンジしています。

本年報は、看護学部、看護学研究科の教育活動・研究活動・社会連携活動を中心にまとめたものです。看護学部は、創設当初からの“看護学を探究する教育”“看護実践を大切にする教育”“学生の個性を伸ばす教育”を大切に、次代の看護専門職者の教育に力を注いでいます。

2024年度も地域志向の教育・研究を大切に、コロナ禍で身につけたデジタル技術を駆使して、学生と教職員そして地域の方々と協働して活動してまいりました。これまで整備してきたシミュレーション演習設備や上級生による看護技術学習サポーターの本格運用に加えて、ナーシングスキルトレーニングルーム開設、修学カルテ導入に向けた準備など、学生の能動的学習を支援する環境としくみも整備されてきました。また、本学のアセスメントプランに基づき、卒業時のディプロマ・ポリシー評価、各学年の到達状況、卒業生からのカリキュラム評価、就職先の皆さまからの評価などの調査を実施しました。ご協力いただいた皆さまに心よりお礼申し上げます。この調査結果をもとに、看護学部では社会の動向も確認しながら学修者本位の教育・授業の実現を目指して自己点検・評価を継続し、教育の質の保証、教育方法の工夫に取り組んでいます。

学生たちは、日常の学習に加えて、立志社中などの課外活動、ボランティア活動に創意工夫して取り組んだり、海外の長期・短期研修や留学にチャレンジしたりと将来の可能性や視野を拓いています。大学院では、国際的に活躍している卒業生や修了生を講師とした学習会の企画や研究支援、オンラインでの教育の充実に取り組みしました。

教育研究活動の充実に向けて、教員が主体的に教育力・研究力を高められるようFD活動も充実しました。教員それぞれが学内の戦略的研究推進プロジェクト研究、そして競争的外部資金を獲得し、他大学の教員や実践家、大学院修了生との共同研究を実施し、研究成果発信そして実装に向けて継続的に取り組んでいます。

社会連携活動では、高知医療センターとの包括的連携事業や健康長寿研究センターの活動、高知県や県内の市町村との協働事業等、健康文化の創造を目指す活動や、専門職者を対象とした活動を実施しました。また、高知県看護協会との連携事業など、専門職者の方々と共に看護の質の向上に取り組んでいます。

2025年度も、本学の看護学教育の歴史と伝統を継承しつつ、18歳人口の激減する時代を生き抜く戦略をたて、さらに充実・発展してけるよう努力していきたいと考えています。

高知県立大学看護学部
学部長 大川宣容

目次

第1部

1. 看護学部・看護学研究科の教育	1
1) 看護学部の教育	1
2) 看護学研究科の教育	18
2. 学際的・国際的な学びを育てる教育環境	24
1) 学部学生の国際化への支援	24
2) 大学院への支援	28
3. 教員の国際的な活動	29
1) 協定校との交流活動	29
2) 民間団体との連携	29
4. 災害看護をリードする活動	31
1) 民間団体との連携	31
2) 学内災害プロジェクト	31
3) COACHES プロジェクト	32
5. がんプロフェッショナル養成プラン	33
6. 高校生のための看護学を学ぶ公開講座	37
7. 高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業：看護・社会福祉連携事業	39
1) 看護・社会福祉連携事業について	39
2) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ	41
3) 専門職者のキャリアサポート	42
4) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース Blso in 高知	43
8. 健康長寿研究センターにおける看護学部の活動	46
1) 看護学部の方針	46
2) 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動	46
3) 高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動	48
4) 高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動	51
5) 高知県の健康長寿および地域共生社会の調査・研究および社会実装に向けた活動	52
9. 高知県立大学「県民大学」学生プロジェクト「立志社中」の採択と活動	53
1) 健援隊の活動	53
2) いけいけサロン活動の活動	54
3) UOK 手話サークルの活動	55
10. 学生の課外活動	57
1) ボランティア活動への支援	57
2) 地域における活動	58
3) 高知県立大学災害看護学生チーム(SIT)	58
4) イケあい地域災害学生ボランティアセンター	59
11. 戦略的研究プロジェクト推進費による活動	60
テーマ2：地域課題の解決を目指す研究	60
12. 看護学部ニュースレターの発行	61
13. 高知県看護協会との連携—生涯学習の拠点としての役割	62
1) 看護協会役員および委員	62
2) 研修および講習会	62
14. 各領域の活動	66

＜がん看護学領域＞	66
＜慢性期看護学領域＞	69
＜急性期看護学領域＞	70
＜小児看護学領域＞	72
＜母性・助産看護学領域＞	75
＜老人看護学領域＞	77
＜精神看護学領域＞	78
＜家族看護学領域＞	81
＜在宅看護学領域＞	84
＜地域看護学領域＞	86
＜看護管理学領域＞	88
＜共創看護学領域＞	91
＜災害・国際看護学領域＞	93
＜専門基礎領域＞	95
15. 高知県立大学看護学会	97
1) 第 50 回高知女子大学看護学会の開催	97
2) 高知県立大学看護学会誌の発行について	98
3) 令和 6 年度 高知県立大学看護学会「公開講座」について	98
4) 奨学金の貸与	98
16. 卒業生・修了生への支援活動	99
1) 再就職や進学・就職・国家試験への支援	99
2) 卒業生に対するキャリア支援	99
3) CNS 認定等の支援	100
4) 看護学部同窓会活動	100
第 2 部	
池田 光徳（教授）	103
大川 宣容（教授）	105
畦地 博子（教授）	107
長戸 和子（教授）	109
久保田 聡美（教授）	111
藤田 佐和（教授）	113
池添 志乃（教授）	115
内田 雅子（教授）	117
瓜生 浩子（教授）	118
木下 真里（教授）	120
嶋岡 暢希（教授）	122
田井 雅子（教授）	124
高谷 恭子（教授）	125
竹崎 久美子（教授）	127
立木 隆広（教授）	128
中野 綾美（特任教授）	130
有田 直子（准教授）	132
内川 洋子（准教授）	133
小澤 若菜（准教授）	135

川上 理子（准教授）	137
田代 真理（准教授）	138
中井 寿雄（准教授）	140
畠山 卓也（准教授）	143
村川 由加理（准教授）	145
森下 幸子（准教授）	146
岩崎 順子（講師）	148
山中 福子（講師）	150
飯田 悠花（助教）	151
池内 香（助教）	152
加藤 昭尚（助教）	153
上村 明咲（助教）	154
源田 美香（助教）	155
塩見 理香（助教）	156
高橋 真紀子（助教）	157
竹中 英利子（助教）	158
田之頭 恵里（助教）	159
徳岡 麻由（助教）	160
中井 あい（助教）	161
西内 舞里（助教）	162
前田 愛友香（助教）	163
宮地 佐和子（助教）	164
森本 紗磨美（助教）	165
依岡 美里（助教）	166
森下 安子（教授）	167
井上 加奈子（特任助教）	168
上岡 千夏（助教）	169
横川 奈知（特任助手）	170

第1部

Life のそばで生きていく

Life それは命、 Life それは生活、 Life それは人生

1. 看護学部・看護学研究科の教育

1) 看護学部の教育

(1) 新カリキュラム

看護学部では、今後の高等教育の将来像や看護職者に求められる能力等を見据えてカリキュラムや教育内容・方法の見直しを行い、令和4年度入学生より新たなカリキュラムの運用を開始し、令和6年度で3年目を迎えた。新カリキュラムでは、ディプロマ・ポリシーに定められた学修目標をより達成するための授業科目の設定、医学的知識と看護の統合および臨床判断の強化、主体的な学修を可能とするために授業科目の内容の精選・整理および時間数の絞り込み、今後の社会および看護に求められる人材に必要な能力を修得できる授業科目の設定、効果的な学修を促進するための開講時期の見直しなどを行った。新カリキュラムへの円滑な移行、およびカリキュラム改正を通じた教育の改善を推進するために、看護学部で今年度行った主な取り組みについて述べる。

① 新カリキュラムへの円滑な移行のための取り組み

今回のカリキュラム改正では、必修科目の一部で単位数や時間数の変更などを行っている。新カリキュラムへの移行に伴い、留学などから復学した学生や再履修が必要な学生に不利益が生じないよう、可能な範囲で読替え科目を設定するとともに、科目担当教員、学年担当教員とも調整を図り、必要な学生には個別に履修計画の立案と履修指導を行い対応している。新カリキュラム完成年度となる次年度は4年間の積み上げを意識した教育の実現と円滑な移行ができるよう、引き続き学部全体での情報共有や検討を行う。

② 看護援助学科目の再編と展開方法の変更

新カリキュラムでは、主体的な学修を可能とするために授業科目の内容の精選・整理および時間数の絞り込みを行い、看護援助学科目については科目間で学習する援助技術の重複をなくして、再編している。この再編においては、学習進度に合わせて、厚生労働省の「看護基礎教育検討会報告書（令和元年10月15日）」に示されている看護師教育の技術項目と卒業時の到達度を基に本学で決定した各看護技術の学習内容と方法に沿って、基礎看護学領域の教員を中心に看護技術チェックリストの項目と運用の見直しを検討し、看護学部FDで情報共有を行った。現在は紙媒体のチェックリストであり学内で教員が管理・保管し、学外への持ち出しをしていない。今後は臨地実習でも学生と教員が共にチェックリストを確認し看護技術の修得状況を共有することで、タイムリーな指導ができるよう、次年度から導入の新教務システムと連動する修学カルテにチェックリストを移行する方向でデモ版の作成依頼、運用上の課題の検討を行った。

③ 実習科目の変更への対応

新カリキュラムの科目の再編により、旧カリキュラムの「総合看護実習（3単位135時間）」を廃止し、統合的な看護実践能力の強化を目的とする「総合看護実習Ⅰ（2単位60時間）」と、家族全体をひとつのシステムとして捉え、家族全体を対象とした看護を展開する方法を学ぶ「家族看護実習（1単位30時間）」を新設し、シラバスの整備、実習施設や家族会などとの調整を進めた。新設科目の「総合看護実習Ⅱ（1単位30時間）」については、今後の社会を見据えて様々な対象の健康課題の解決に向け情報やデータを探索・活用し、看護学および保健学の視点から解決方法を考察することを学ぶことを目的とし、シラバスの整備ならびに実習施設との調整を行った。授業内容の精選・整理により、「看護実践能力開発実習（2単位90時間）」は「看護実践能力開発実習Ⅱ（2単位60時間）」として時間数変更ならびに内容変更は伴わない科目名称の変更を行い、あわせて実習施

設の調整、シラバスの整備を行った。「在宅看護実習（2単位 90時間）」は、2単位（60時間）に時間数を変更し、実習目的を統合・整理した。

これらの実習科目の新設や時間数の変更をもとに、臨床実習委員会を中心に実習スケジュールを見直し、学生がそれぞれ目的の異なる実習を進めるにあたり、過密なスケジュールにならず効果的な学修が進むよう検討し、調整を行った。

④ 講義・演習科目の変更への対応

令和6年度までは各看護領域の専門性や実践力を高める科目として各看護領域の「実践論」を選択科目で開講していたが、新カリキュラムでは4年次までの臨地実習で体験していない保健医療福祉の場における健康課題と看護のあり方について、施設見学と討議を通して学ぶ「看護実践論Ⅰ～Ⅳ」として新設し、シラバスの整備を行った。各看護領域の「動向と課題」については30時間から15時間に時間数変更し、学内での講義科目として整備した。

⑤ 今後の課題

令和7年度に新カリキュラムの完成年度を迎える。次年度は令和6年度に実施した新カリキュラムの評価アンケート、学生によるDP評価の結果を踏まえて、令和7年3月に公表された看護学教育モデル・コア・カリキュラム改訂版も参照し、看護学部のDPの見直しの必要性について引き続き検討する。在籍している旧カリキュラムの学生に対しては、不利益が生じないように、教務委員会と学生委員会が協力し履修指導を行う。実習に関しては、令和7年度新設の「総合看護実習Ⅱ」「家族看護実習」「看護実践能力開発実習Ⅱ」が円滑に行えるようモニタリングを行う。

学生の主体的な学びについては、単位取得状況や授業外学習の取り組み状況から、学習に課題を持つ学生への支援、自己学習時間の確保と内容の充実が看護学部専門科目での課題である。平日にアルバイトをしている学生も多数いることから空きコマの時間を自己学習に有効活用すること、そのための学習環境の整備・自己学習する風土の醸成、学習課題のある学生の早期発見と早期対応を科目担当者、学年担当らと協力して支援すること、令和6年度に整備したナースングスキルトレーニングルームの活用をすすめるとともに利用上の課題を把握すること、カリキュラムに対する学生の要望を聞き学習環境の改善に継続して取り組むことが必要である。

令和7年度から開始する大学の新教務システムと連動する修学カルテ上に、看護学部では実習ルーブリックと看護技術チェックリストを作成し、学生のポートフォリオとしての活用を推進する計画である。その運用面での課題を検討し、円滑な導入と学生の学びの支援の充実に向けて、臨床実習委員会や演習・実習担当教員らと協力して取り組む必要がある。

(2) 自己学習の環境整備

①看護技術習得のための学習環境の整備（ナースングスキルトレーニングルーム）

看護技術の習得には、繰り返しの練習が必要である。しかし、これまで実習室は正課の授業に使用することが多く、学生が空きコマを活用して技術練習を行うことが難しい状況にあった。そこで、学生が自由に自己練習できる環境を確保するために、看護学部棟1階のエレベーターホール前スペースを看護技術に関する自己学習室として整備し、ナースングスキルトレーニングルーム（Nursing Skills Training Room）と命名した。

主な基礎看護技術を学ぶ授業科目「生活援助論」「フィジカルアセスメント」「治療援助論」の授業進行に合わせた自己学習環境としては、主に看護実践開発実習室2（C110）を活用することとし、ナースングスキルトレーニングルームは臨床において実施頻度の高い看護技術を常に練習できる場として整備することにした。また、安全対策（室内の様子が外から見えない密室をつくらない）の

ため、入口側のドアと壁パネルは上半分を強化ガラスにして、廊下から中の様子が見えるようにした。これにより、練習している様子を外から見た学生が刺激を受け、自己学習意欲が高まるという効果も狙った。

設備としては、室内には血圧測定シミュレーター4台、呼吸音聴診シミュレーター1台、ベッド3台（うち2台にはマネキン型モデル人形を配置）、各ベッドにはCPS装置、酸素吸入セット、吸引器を配置した。主に血圧測定や呼吸音の聴診、酸素吸入、吸引、体位変換、更衣などの技術練習を行うことが可能である。また、水や温湯の使用はできないが、学生自身で物品を準備することで清拭や洗髪練習も可能である。使用できる時間は月曜日から金曜日の午前9時～午後6時の間で、事前予約は不要、空いていればいつでも使用できる。使用の際には、室内に設置した使用簿に学籍番号、使用時間、練習した技術を記入してもらい、使用実績を確認できるようにした。学生には、設備や使用ルールについて文書を配信し周知した。

2024年11月より運用を開始し、利用人数は延べ127人（11～12月0人、1月91人、2月36人）で、主な使用目的はバイタルサイン測定や清拭の練習であった。また、利用した学年はすべて1回生で、フィジカルアセスメントや生活援助論の技術テストに向けた練習として、1月後半から2月にかけての利用が多かった。ガラス張りで練習している様子が廊下から見えることで、学生と教員双方が声をかけやすい環境になっている。今後、演習科目や講義の際に事前・事後練習に活用できることなど周知を継続し、幅広い学年の利用率の向上を目指していく。



②自己学習室

学生が学内での自由時間を活用して自己学習ができるように、リモート対応の自己学習室を整備しており、自己学習室は、落ち着いた環境で学習できる個人ブース仕様で、リモート授業の受講やweb教材を使った学習、視聴覚教材の視聴が可能である。各ブースに設置されたQRコードにより実際の利用状況について把握しており、Web教材を利用した学習をはじめ多くの目的で使用されている（図1）。学年により使用状況にばらつきがみられる（図2）ことから、来年度に向けて自己学習室について更に周知を図るとともに、ニーズ調査の実施を検討している。

今後も、学習室の利用促進を図り、適正な自己学習環境の整備に努めていくことで、学生の自律的な学習を支援していきたいと考える。

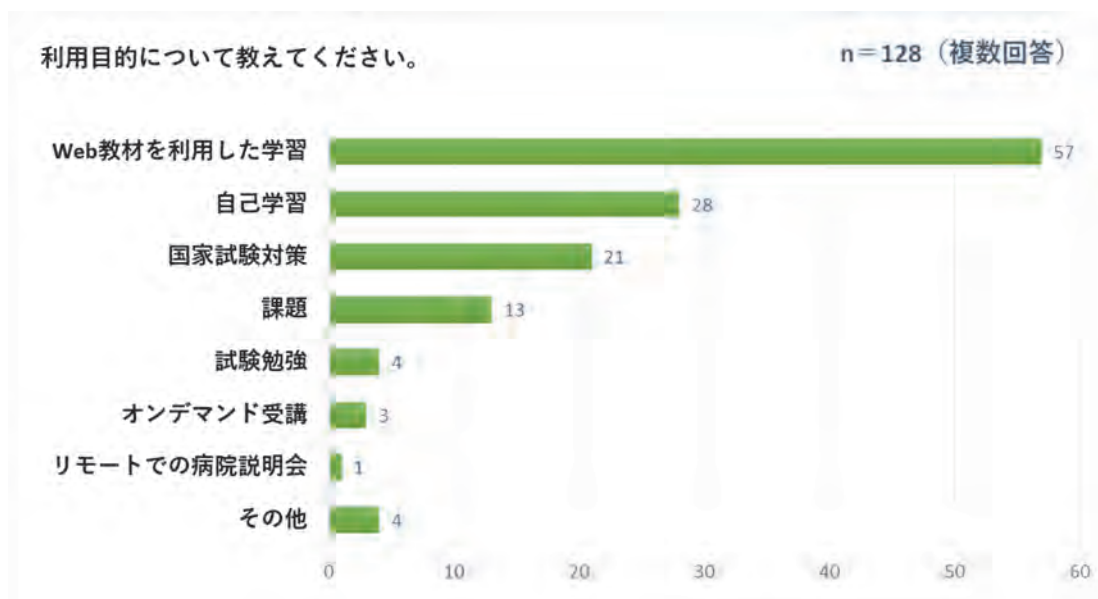


図1 自己学習室の利用目的

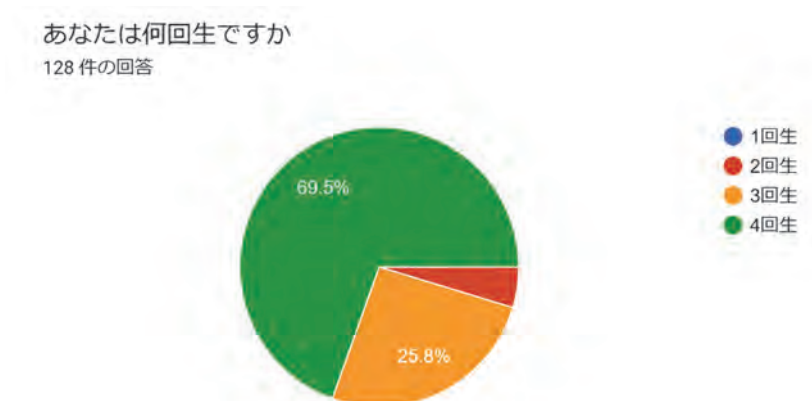


図2 自己学習室を使用している学年の分布

③自己学習スペース

令和6年度は、看護学部棟2階・3階・4階エレベーターホール前、看護福祉棟2階階段前（写真）のスペースの机と椅子の配置を大幅に変更した。コロナ禍で個人使用向けの配置になっていた机等を再配置することで、教材等を広げて学習することやグループワークに活用しやすいようにした。また、配置する椅子を増やして、より多くの学生が使用できるようにした。今後も使用状況・ニーズに応じて環境を整えていきたいと考える。



看護学部棟2階エレベーターホール前



看護学部棟 3 階エレベーターホール前



看護学部棟 4 階エレベーターホール前



看護福祉棟 2 階階段前

(3) 4 回生による看護技術学習支援

令和 5 年度は試行的な実施であった 4 回生による看護技術学習支援を今年度は適用科目を増やし、本格的に実施することとした。

この取り組みは、学生が課題をこなすだけでなく、キャリアと関連付けながら目指す自己像に向けて低学年次から主体的な学びの姿勢を身に付けられるようになることをねらいとしており、上回生である 4 回生に一つのロールモデルとして演習に参加してもらい、学びを刺激し支援する役割を担ってもらっている。

①方法

昨年度は、2 回生の「治療援助論」の一部の演習のみであったが、今年度は「治療援助論」のすべての演習に加えて、後期からは 1 回生の「生活援助論」「フィジカルアセスメント」でも導入し、教員は、ラーニングサポーター学生（以下 LS 学生とする）による学習支援を授業計画に組み込んで設計した。演習担当教員数は当初計画通りとし、学生の役割と教員の役割を明確にした。＜資料＞のようなチラシを作成し、4 回生全員にポータルサイトを通して募集の周知を行い、学生が自由意思で参加できるようにした。

② 結果

のべ 11 名の 4 回生が参加し活動時間はのべ 95 時間 40 分と、昨年度より大幅に増えた（昨年度のべ 5 名、のべ 9 コマ）。演習内容は表 1 の通りであった。

演習前には、演習内容や学習目標、当日の役割について LS 学生と打ち合わせを行い、当日は教員と一緒にグループに入るように設定した。LS 学生は、グループディスカッションや演習の中で自身の実習での体験をふまえたアドバイスや 1、2 回生が戸惑ったり手間取ったりしているところでのさりげないサポートを行うことができていた。

1 回生の「フィジカルアセスメント」については、後期の科目であったため、4 回生は実習や看護研究の執筆、国家試験に向けた学習に力を入れ始める時期とも重なり、参加はなかった。

参加した 4 回生、およびサポートを受けた 1, 2 回生からは、表 2 に示すような感想が得られた。2 回生の「治療援助論」では、

授業のフィードバックとして 48 件の自由記載の回答を得た。内容の類似性から、7 つのカテゴリーに整理できた。【疑問を解消でき授業を受けやすかった】【同じ目線で考えてくれて学びが深まった】

【滞っているときに考えるヒントを得た】【先輩のようになれるように頑張りたい】【技術のコツを教えてもらえて理解が深まった】【実習の話を通してより実践的に考えられた】【優しく教えてもらえて助かった】など肯定的な意見ばかりであった。

授業を担当した教員からは、4 回生にとっては、様々な対象者や専門職者との連携が求められる臨床実践に向けて、他者に何をどのように発信し共有するのかを考えたり、知識を改めて振り返り定着させたりする機会となっているのではないかという意見があった。また、1, 2 回生の中には、自分との違いに圧倒されて 2 年後を不安に感じているような学生もいたが、4 回生から「初めからできたわけじゃないよ」と伝えられ、学修には段階があるということの認識や、実習での経験を聞いたことが刺激になり、学修や技術習得へのモチベーションとなっているといった意見もあった。

表 2. LS 学生および 1・2 回生の感想

<LS 学生>

- ・“伝える”のは自分がするのとは違って難しいと感じたが、自分自身の知識の再確認になり、勉強になった
- ・1, 2 回生から「すごいですね」と言われてうれしかった

<1, 2 回生>

- ・4 回生は知識も多く、様々な可能性を考えながら患者への対応を考えていて、自分もまずは知識をしっかり身に付ける必要があると思った
- ・実習で学んだことを教えてくれて、実際の看護現場の想像がしやすくなってよかった
- ・いろいろ質問ができてよかった、年齢が近いので、気軽に相談でき、親身に答えてくれた
- ・2 年後には私も先輩のように後輩に教えられる立場になりたいと思った
- ・ヒントを出してくれたり、自分たちで考えられるように質問形式でアドバイスをくれてとても勉強になった

③ 成果と課題

学年を超えて学び合う機会として、学び合う仲間の存在、少し先に同じ状況を経験した先輩からの支援を得られることは、日常的に学生が学習に取り組むことを促進し、学び続けるモチベーションを維持することにつながり、相談のしやすさなど学生同士ならではの学び合いが生まれていた。実習を終えた 4 回生が身近なロールモデルとなり、学ぶ側の下級生は学習への動機づけが高まり、学習意欲の向上が認められた。LS として参加した 4 回生も、自分自身の知識・技術・態度を振り返り、より深く学習する機会となっていた。

十分な準備の機会提供、役割周知や受け入れられている雰囲気づくりなどの配慮が十分行えなか

った点は課題であるが、双方にとって学年を超えて学び合う機会となったと考える。授業や就職活動との重なりもあり、導入できる演習は限られているが、4 回生が参加できる機会を作ることは双方にとって有意義であり自律的な学習を支援する方策となることが確認されたため、来年度は計画的に 4 回生への周知を行い、より多くの学生に参加してもらえようようにしたい。

また、当初は、導入した科目の担当者が窓口となって事務手続きを行っていたが、後期からは看護学部の事務職員の方に書類のとりまとめを行ってもらうこととした。まだ手続きの流れが十分にシステム化されていないため、来年度はスムーズに進められるように手順を整理する。

<資料>チラシ例（1 回生 生活援助論）

看護技術学習サポーター 募集！（1 回生 生活援助論）

1, 2 回生の技術学習をサポートする看護技術学習サポーターを募集します。看護技術の学習は、反復学習により確実に身につきますが、解剖学、生理学の知識と結び付けて根拠を学ぶことが難しい現状があります。

そこで、3 回生までの臨地実習を終えた 4 回生の皆さんに、看護技術学習サポーターとしてお力を貸していただきたいと考えています。具体的にお願したい内容は、単元ごとに異なりますが、生活援助論、治療援助論、フィジカルアセスメントなどの技術演習に 1, 2 回生と一緒に参加していただき、技術のポイントと一緒に確認する、質問できずにいる学生が質問できるようにサポートするなど、1, 2 回生と教員をつなぐ役割をお願いしたいと考えています。是非ともよろしくお願いします。

是非ご参加ください！

- 看護技術を磨きたい方
- 看護教育についての理解を深めたい方
- 就職活動で使える実績を積みみたい方
- 授業の隙間時間に活動したい方

今回の募集は、**1 回生の生活援助論**です。

演習内容	募集日時/申込締切	担当
安全・安楽を守る援助 (感染予防行動、指圧・マッサージ)	5 月 20 日 (月) 4 限～5 限 5 月 27 日 (月) 4 限～5 限 締切：5 月 8 日 (水) ※4.5 限連続の授業です	山中
食生活への援助 (食事介助、口腔ケア)	6 月 3 日 (月) 4, 5 限 締切：5 月 22 日 (水)	長戸
活動と休息への援助 (ポジショニング、歩行介助、 車椅子への移乗・移送、 ストレッチャーでの移送等)	6 月 10 日 (月) 4 限～5 限 6 月 17 日 (月) 4 限～5 限 締切：5 月 29 日 (水) ※4.5 限連続の授業です	瓜生

募集人員：各回 5 人程度

申込は、各担当教員宛に期限までにメールでお願いします。

質問も受け付けていますので、お気軽にお問い合わせください

お問い合わせ先：山中 yamanaka@cc.u-kochi.ac.jp

長戸 nagato-k@cc.u-kochi.ac.jp

瓜生 uryu@cc.u-kochi.ac.jp

学習支援内容

看護技術演習に参加して、1, 2 回生が質問できるように支援するなど

演習前

事前に担当教員と打ち合わせを行います

演習後

1, 2 回生からの質問などをまとめて担当教員に報告します

報酬あり

学内アルバイトと同額、詳細はお問い合わせください

その他

- 1 人に対応することはありません。必ず担当教員がいますので、確認しながら行えます。
- 参加できるところだけで大丈夫です。

(4) 看護学部における教育の評価：卒業生・卒業生就職先を対象とした調査

令和6年度看護学部活動目標では「アセスメントプランに基づき評価結果を分析し、抽出した課題に対応する」ことを掲げた。アセスメントプランでは卒業生調査を4年ごとに実施し、満足度、現在の就業状況、大学のカリキュラムへの意見や要望、獲得した能力の活用等の把握をあげている。令和6年度は調査年度に該当し、このアセスメントプランに基づいて卒業生・卒業生就職先を対象とした調査を行った。いずれも対象となる卒業生、就職先管理者に依頼文書を封書で郵送し、webアンケートフォームで回答を得た。ここでは【卒業生を対象とした調査】、【卒業生就職先を対象とした調査】に分けて結果の概要を報告する。なお今回の調査では看護学部のDPに基づく能力から下記に示した計18の能力を抜粋し質問した。

DP1

1. 看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力
2. 人間の健康や疾病の成り立ちや治療、発達段階について説明する力
3. 看護ケアの対象の健康課題とそれに関連する要因を説明する力

DP2

4. 健康課題解決に向けてエビデンス検索を行って計画を立案し、実施・評価する力
5. 基本的な看護援助技術を原理原則を踏まえて実施する力
6. 健康レベルに応じた基本的な看護援助技術を安全・安楽に配慮して実施する力

DP3

7. 対象の健康課題について多職種と共通認識をもつ力
8. 多職種と情報交換し、看護の専門性を発揮して健康課題に取り組む力
9. 対象の健康課題を解決するために他者と協働する力

DP4

10. 多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力
11. 基本的な看護を実践する上で、人々の尊厳と権利を擁護する力
12. 自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力

DP5

13. 看護専門職として成長していくために自己洞察し、学習課題や目標を設定する力
14. 看護の現象を探究するために理論的知識や先行研究の成果を探索する力
15. 研究の基本的な知識を活用して看護研究のプロセスを展開する力

DP6

16. 看護学に関連する分野の動向を踏まえて、広い視野から看護のあり方について意見を述べる力
17. グローバリゼーション・国際化の動向を踏まえて、看護のあり方について意見を述べる力
18. 看護の責務として安全・安心な健康生活を整えるという視点をもって意見を述べる力

【卒業生を対象とした調査】

① 調査対象と期間

卒後4年目（R3年3月卒業）から1年目（R6年3月卒業）までの卒業生223人を対象とした。調査期間は令和6年12月～2月であった。

② 結果

a. 回収率

103人から回答が得られ、回収率は46.2%であった。

b. 対象者の属性

回答者の内訳は、卒後年数3年目の割合が最も多く、次いで卒後4年目が多かった（表1）。職種は、看護師が最も多く、次いで、保健師が多かった（表2）。

表1 卒後経験年数

	人数	割合
卒後4年目	32	31.1 %
卒後3年目	33	32.0 %
卒後2年目	18	17.5 %
卒後1年目	20	19.4 %
合計	103	

卒後経験年数別職種の内訳は、どの経験年数も、看護師の割合が最も多く、次いで保健師が多かった。従事する場所は、看護師・助産師は200床以上の病院が最も多く、保健師は、市町村が最も多かった。

現在の勤務先は、現在の勤務先は卒業時と変わらないと回答した人が約8割、卒業後に転職を経験したと回答した人が約2割であった（表3）。卒業後に転職をした人のうち半数は、卒後経験4年目の回答者だった。転職した時期は、卒後経験4年目、3年目の場合、1～2年で転職したと回答した人が多かった（表4-1）。転職した理由の割合が最も多かったのが「労働環境が合わなかった」、次いで「職種の変更」が多かった（表4-2）。

表3 現在の勤務先

	人数	割合	
現在の勤務先は卒業時と変わらない	83	80.6	%
卒業後に転職をした	20	19.4	%
合計	103		

* 卒後に転職をした人のみ

表4-1 転職した時期

	1年	2年	3年	4年	合計	割合	
卒後4年目	4	2	1	3	10	50.0	%
卒後3年目	2	3	1		6	30.0	%
卒後2年目		3			3	15.0	%
卒後1年目	1				1	5.0	%
合計	7	8	2	3	20		

表4-2 転職した理由（複数選択可）

	1年	2年	3年	4年	合計	割合	
労働環境が合わなかった	5	3	1		9	45.0	%
職種の変更	3	4		1	8	40.0	%
自分の健康状態	4	1	1		6	30.0	%
責任の重さ・医療事故への不安	2	2			4	20.0	%
進学・資格取得		1		1	2	10.0	%
その他	1	1		1	3	15.0	%
合計	15	12	2	3	32		

c.看護学部に対する満足度

教育内容への満足度、学習環境や支援への満足度、卒業生であることの誇りについて、どの年代も「そう思う」の割合が最も高く、次いで「ややそう思う」であり、全体の約9割を占めていた（図1）。

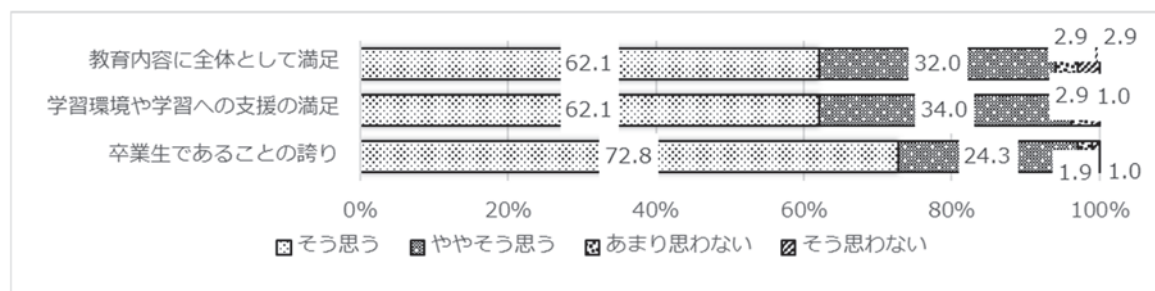


図1 教育に対する満足度

d.能力別にみた教育内容の評価

能力が身につく教育内容であったかを問う質問に対して、「そう思う」と回答した人の割合が最も高かったものは、「10.多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力（DP4）」であり、次いで「11.基本的な看護を实践するうえで、人々の尊厳と権利を擁護する力（DP4）」であった（図2）。

能力ごとに卒後年数の割合の比較を行ったところ、「15.研究の基本的な知識を活用して看護研究のプロセスを展開する力（DP5）」については、卒後4年目が「そう思う」と回答する割合が最も低かった（図3）。

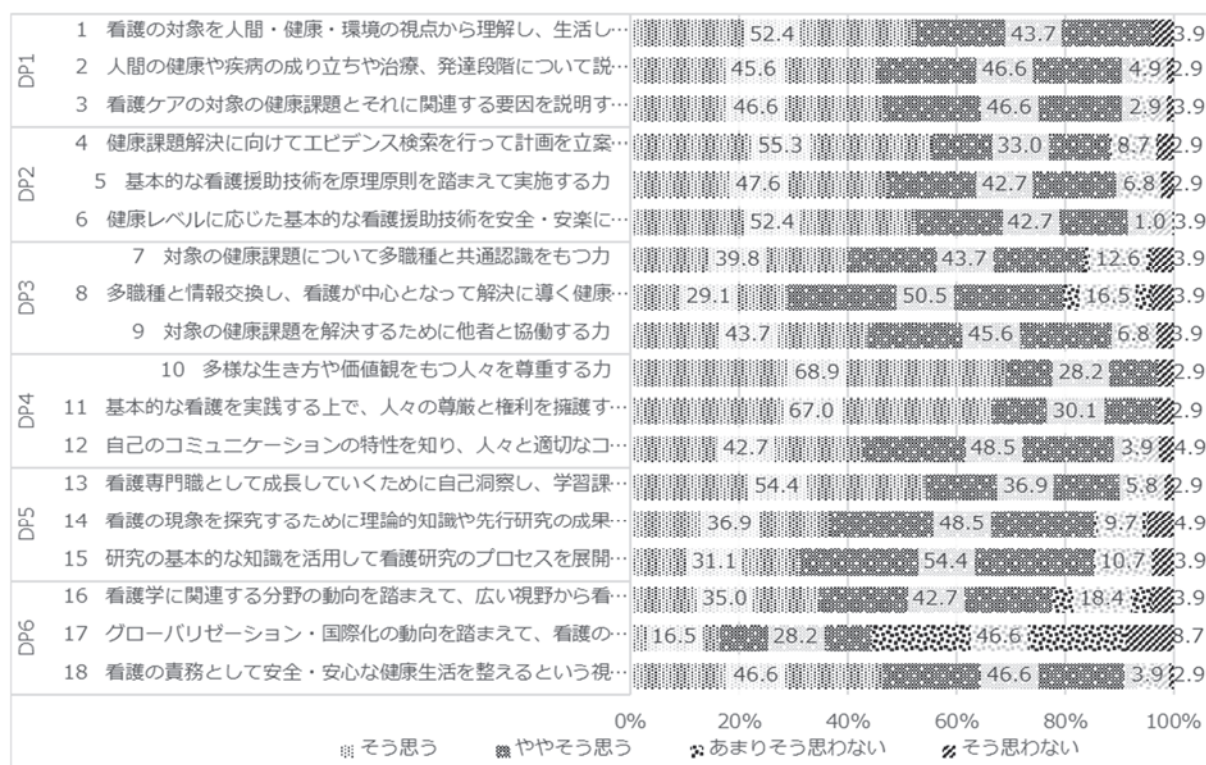


図2 能力別にみた教育内容の評価

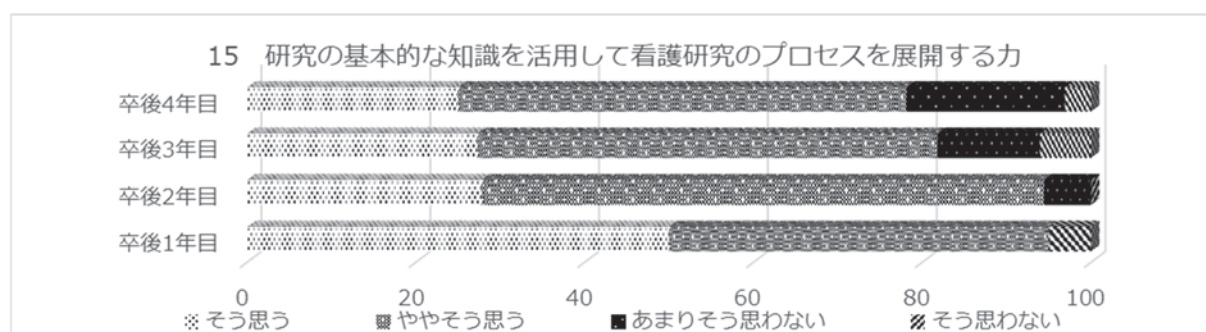


図3 卒後年数別にみた教育内容の評価
「15. 研究の基本的な知識を活用して看護研究のプロセスを展開する力（DP5）」

e.卒業後の実践で役立っている能力

卒業後の実践に役立っていると回答した人の割合が最も高かった能力は、「1.看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力（DP1）」であった。次いで、「10.多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力（DP4）」の割合が高かった。割合が最も低かったのは「17.グローバル化・国際化の動向を踏まえて、看護のあり方について意見を述べる力（DP6）」、次いで「15.研究の基本的な知識を活用して看護研究のプロセスを展開する力（DP5）」、「16.看護学に関連する分野の動向を踏まえて、広い視野から看護のあり方について意見を述べる力（DP6）」であった（図4）。

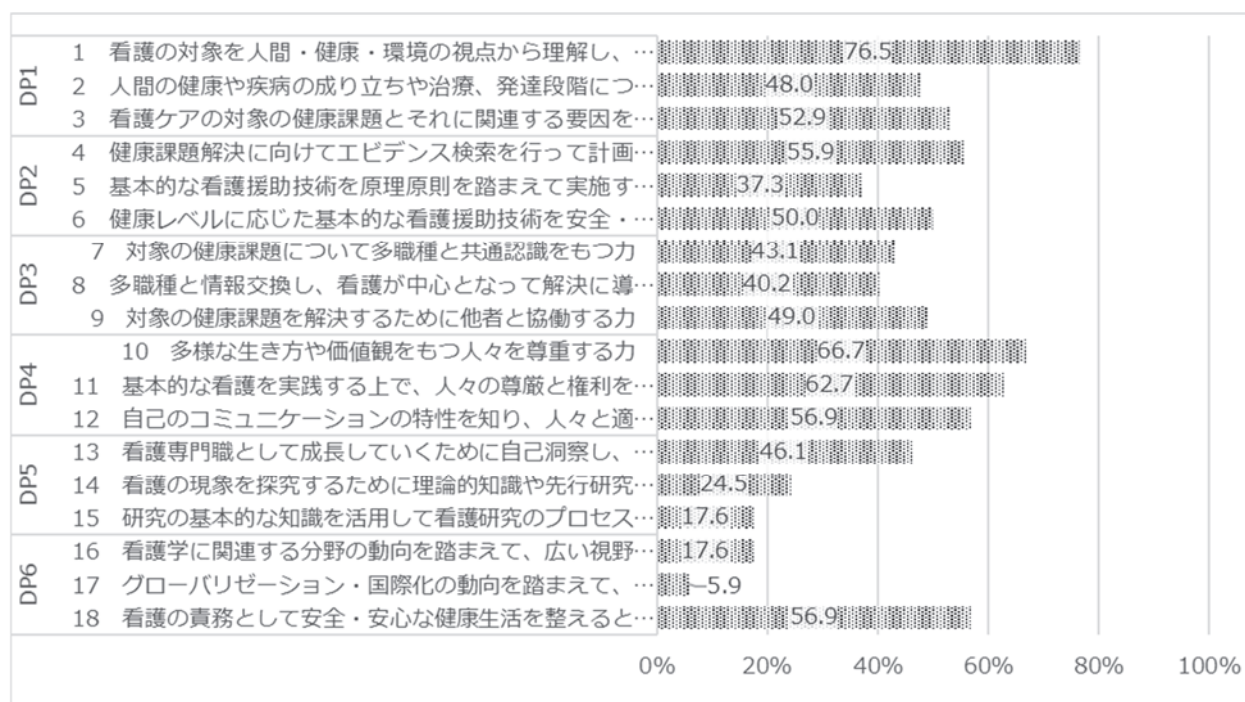


図4 卒業後の実践で役立っている能力

f.満足している教育内容

満足していると回答した人の割合が最も高かった教育内容（複数選択可）は、「統合カリキュラムで複数の資格が取得できる教育」「臨地実習や学内演習における少人数制の指導・助言」であった。次いで、「学生同士が学び合える方法を取り入れた授業（グループワーク、シミュレーション教育）」の割合が高かった。教育内容ごとに、卒後年数の割合の比較を行ったところ、「看護研究のプロセスを学ぼう計画された教育」については、卒後経験4年目の回答者が、他の経験年数と比較し、低かった。また、「看護学だけでなく、医学をはじめ様々な分野の学問の視点を学ぶ教育」は、卒後経験4年目が最も高く、経験年数が少なくなるほど、割合は低かった。

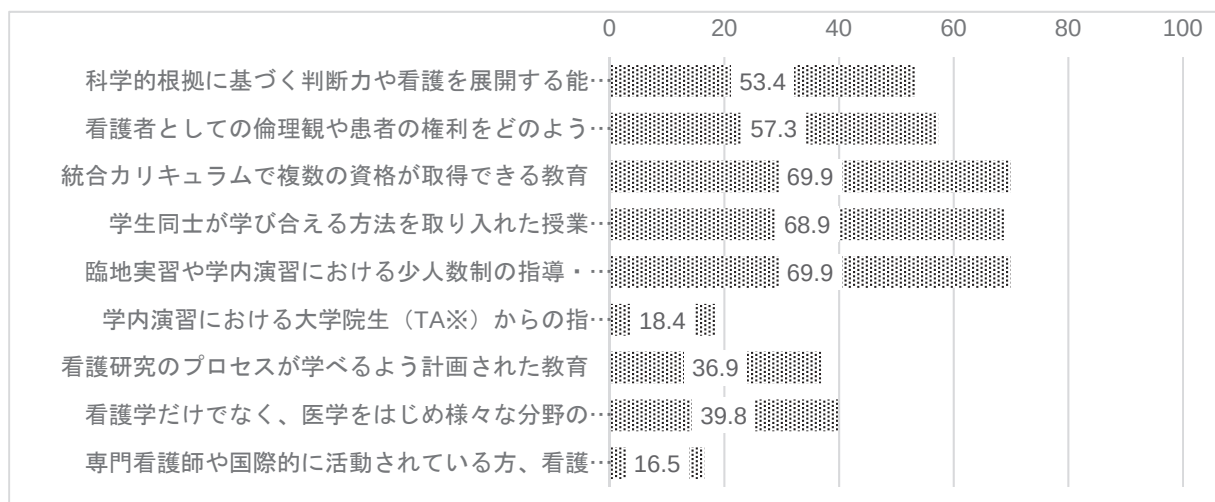


図5 満足している教育内容

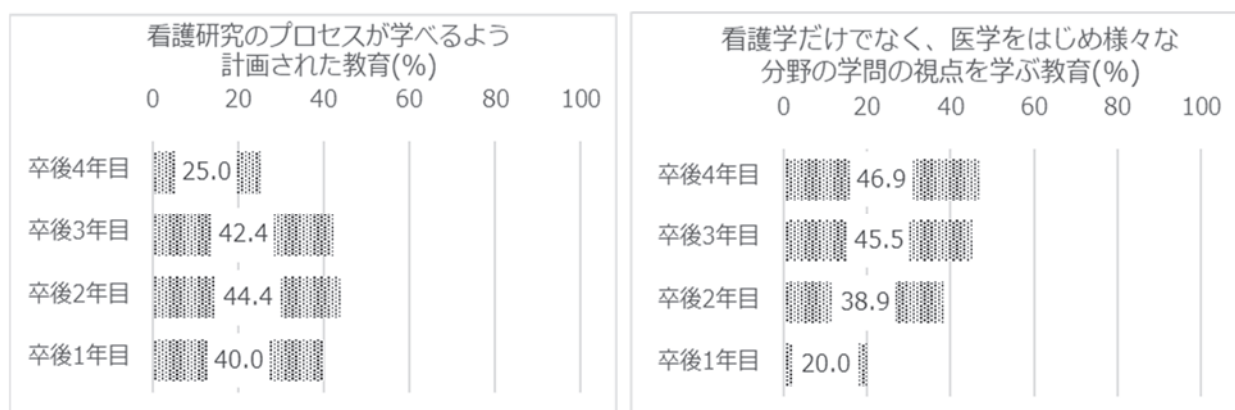


図6 満足している教育内容：卒後年数での比較（一部抜粋）

g. もっと学びたかった教育内容

もっと学びたかったと回答した人の割合が最も高かった教育内容は、「薬理や医学的知識」であった。次いで、「看護・医療英語」の割合が高かった（図7）。教育内容ごとに、卒後年数の割合を比較したところ、「薬理や医学的知識」は、卒後2年目、1年目の割合が50%以上と高かった（図8）。

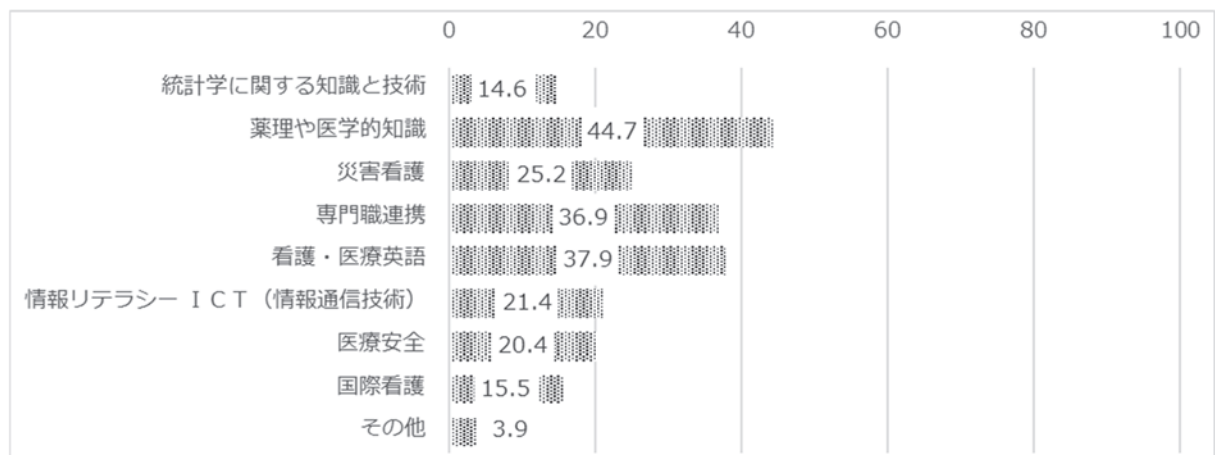


図7 もっと学びたかった教育内容

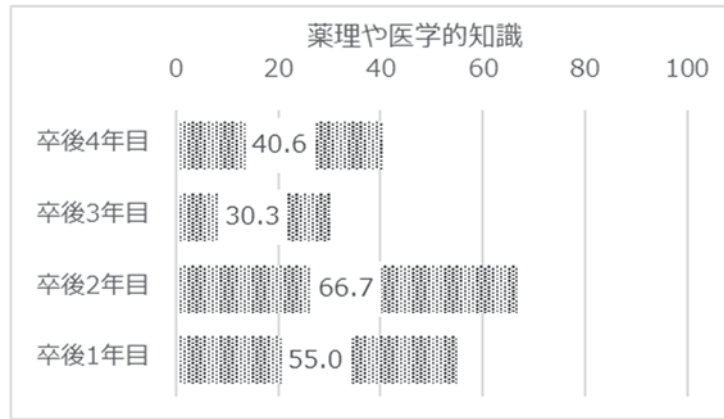


図8 学びたかった教育内容「薬理や医学的知識」：卒後年数での比較

h.看護学部学習環境・学習支援に関する満足度とその理由

看護学部の看護学部の学習環境・学習支援に関して満足しているかという問いに「そう思う」「ややそう思う」と答えたのは96.1%であった。一方「そう思わない」と回答したのは1.0%であった。満足度に関する理由を自由回答で求めたところ37件の回答があった。肯定的な意見が多かったが、COVID-19の影響で臨床や地域での実習に制約があったことを理由として述べたものが複数名いた。以下に自由回答の一部をあげる。

- ・学んだ、勉強したという充実感、達成感が今もあります。
- ・授業時間以外でも希望があれば技術練習ができたこと。また、就職支援がとても充実しているところ。小論文や面接などの練習にはどの先生も協力的で、他の大学はこれほどまで就職支援が整っていないことを就職してから実感したから。
- ・先生方と学生の距離が近く、個人的な悩みがある時にも1人で悩まず先生方の研究室に行き、悩みを聞いてもらったから。
- ・看護技術の授業は他の大学を卒業した人の話を聞く限り恵まれた環境で授業を受けていたと感じる。
- ・試験期間は図書室や勉強できるスペースが足りないと感じたことがあった。
- ・3回生の冬ごろからコロナの影響が始め保健所での実習を経験できなかった。就職してからほぼコロナ業務で保健師としての全体像が見えず少し苦戦した。

【卒業生就職先を対象とした調査】

① 調査対象と期間

過去4年間に卒業生が2名以上就職した49施設の管理者を対象とした。調査期間は令和7年1月～2月であった。

② 結果

a. 回収率

33人から回答が得られ、回収率は67.3%であった。

b. 対象者の属性

200床以上の病院施設看護管理者26人(78.8%)、市町村の括保健師5人(15.2%)、200床以下の病院施設看護管理者1人(30.3%)、教育委員会2人(6.1%)であった。

c. 就職先管理者が選んだ重要な能力

18の能力のうち最も重要と思われるものから、6番目に重要と思われるものまでを選んでもらったところ、1位は割合が高い順に「1.看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力（DP1）」（9人：27.3%）、「10.多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力（DP4）」（5人：15.2%）、「12.自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力（DP4）」（4人：12.1%）であった。1位から6位までの総数でみると、選ばれた割合が最も多かったのは「10.多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力（DP4）」（23人：11.7%）であり、2番目に高かったのは「4.健康課題解決に向けてエビデンス検索を行い、計画を立案し、実施・評価する力（DP2）」（20人：10.2%）、「6.健康レベルに応じた基本的な看護援助技術を安全・安楽に配慮して実施する力（DP2）」（20人：10.2%）であった。（表5）

重みづけをして得点化した結果、総点の高い順に「12.自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力（DP4）」（97点）、「1.看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力（DP1）」（79点）、「5.基本的な看護援助技術を原理原則を踏まえて実施する力（DP2）」（69点）があがった（表6）。

表5. 就職先管理者・教育担当者が選んだ重要な能力（単位：％）

		重要度						DP 総数
		1位	2位	3位	4位	5位	6位	
DP1	1. 看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力	27.3	6.1	6.1	3.0	6.3	0.0	8.2
	2. 人間の健康や疾病の成り立ちや治療、発達段階について説明する力	0.0	6.1	6.1	6.1	3.1	12.5	5.6
	3. 看護ケアの対象の健康課題とそれに関連する要因を説明する力	3.0	3.0	12.1	9.1	9.4	9.4	7.7
DP2	4. 健康課題解決に向けてエビデンス検索を行って計画を立案し、実施・評価する力	6.1	0.0	6.0	9.1	12.5	6.3	6.6
	5. 基本的な看護援助技術を原理原則を踏まえて実施する力	6.1	15.2	9.1	9.1	12.5	9.4	10.2
	6. 健康レベルに応じた基本的な看護援助技術を安全・安楽に配慮して実施する力	6.1	9.1	12.1	12.1	12.5	9.4	10.2
DP3	7. 対象の健康課題について多職種と共通認識をもつ力	0.0	3.0	3.0	0.0	0.0	12.5	3.1
	8. 多職種と情報交換し、看護の専門性を発揮して健康課題に取り組む力	0.0	9.1	3.0	0.0	3.1	3.1	3.1
	9. 対象の健康課題を解決するために他者と協働する力	3.0	3.0	3.0	9.1	3.1	15.6	6.1
DP4	10. 多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力	15.2	0.0	9.1	0.0	6.3	3.1	5.6
	11. 基本的な看護を実践する上で、人々の尊厳と権利を擁護する力	9.1	12.1	12.1	3.0	3.1	3.1	7.1
	12. 自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力	12.1	21.2	12.1	18.2	6.3	0.0	11.7
DP5	13. 看護専門職として成長していくために自己洞察し、学習課題や目標を設定する力	6.1	9.1	6.1	12.1	9.4	6.3	8.2
	14. 看護の現象を探究するために理論的知識や先行研究の成果を探索する力	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	1.0
	15. 研究の基本的な知識を活用して看護研究のプロセスを展開する力	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	0.0	0.5

DP6	16. 看護学に関連する分野の動向を踏まえて、広い視野から看護のあり方について意見を述べる力	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	17. グローバリゼーション・国際化の動向を踏まえて、看護のあり方について意見を述べる力	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.1
	18. 看護の責務として安全・安心な健康生活を整えるという視点をもって意見を述べる力	6.1	3.0	0.0	9.1	3.1	9.4	5.1	
		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

表 6. 就職先管理者・教育担当者が選んだ重要な能力（重みづけ得点）

		重要度						DP 総数
		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	
DP1	1. 看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力	54	10	8	3	4	0	79
	2. 人間の健康や疾病の成り立ちや治療、発達段階について説明する力	0	10	8	6	2	4	30
	3. 看護ケアの対象の健康課題とそれに関連する要因を説明する力	6	5	16	9	6	3	45
表 6（続き）. 就職先管理者・教育担当者が選んだ重要な能力（重みづけ得点）								
DP2	4. 健康課題解決に向けてエビデンス検索を行って計画を立案し、実施・評価する力	12	0	8	9	8	2	39
	5. 基本的な看護援助技術を原理原則を踏まえて実施する力	12	25	12	9	8	3	69
	6. 健康レベルに応じた基本的な看護援助技術を安全・安楽に配慮して実施する力	12	15	16	12	8	3	66
DP3	7. 対象の健康課題について多職種と共通認識をもつ力	0	5	4	0	0	4	13
	8. 多職種と情報交換し、看護の専門性を発揮して健康課題に取り組む力	0	15	4	0	2	1	22
	9. 対象の健康課題を解決するために他者と協働する力	6	5	4	9	2	5	31
DP4	10. 多様な生き方や価値観をもつ人々を尊重する力	30	0	12	0	4	1	47
	11. 基本的な看護を実践する上で、人々の尊厳と権利を擁護する力	18	20	16	3	2	1	60
	12. 自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力	24	35	16	18	4	0	97
DP5	13. 看護専門職として成長していくために自己洞察し、学習課題や目標を設定する力	12	15	8	12	6	2	55
	14. 看護の現象を探究するために理論的知識や先行研究の成果を探索する力	0	0	0	0	4	0	4
	15. 研究の基本的な知識を活用して看護研究のプロセスを展開する力	0	0	0	0	2	0	2
DP6	16. 看護学に関連する分野の動向を踏まえて、広い視野から看護のあり方について意見を述べる力	0	0	0	0	0	0	0
	17. グローバリゼーション・国際化の動向を踏まえて、看護のあり方について意見を述べる力	0	0	0	0	0	0	0
	18. 看護の責務として安全・安心な健康生活を整えるという視点をもって意見を述べる力	12	5	0	9	2	3	31

* 1 位は 6 点、2 位は 5 点、3 位は 4 点、4 位は 3 点、2 位は 2 点、1 位は 1 点をかけて集計

d. 就職先管理者からみた本学看護学部卒業生に対する能力評価

卒業生の能力に関して「十分身についている」または「身についている」と評価された割合（累積％）が高かったのは順に、「12.自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力（DP4）」（56.3%）、「11.看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力（DP1）」（56.2%）、「5.基本的な看護援助技術を原理原則を踏まえて

実施する力（DP2）」（53.2%）であった。「少しは身についている」までを含めた累計%をみると、多くの能力について一定の評価を受けているものの、一部の能力では「身についていない」とする評価も見られた（図9）。

先の結果で重みづけ得点上位であった能力については、「12.自己のコミュニケーションの特性を知り、人々と適切なコミュニケーションをとる力（DP4）」（56.3%）、「1.看護の対象を人間・健康・環境の視点から理解し、生活している人として説明する力（DP1）」（43.8%）、「5.基本的な看護援助技術を原理原則を踏まえて実施する力（DP2）」（40.6%）であった。

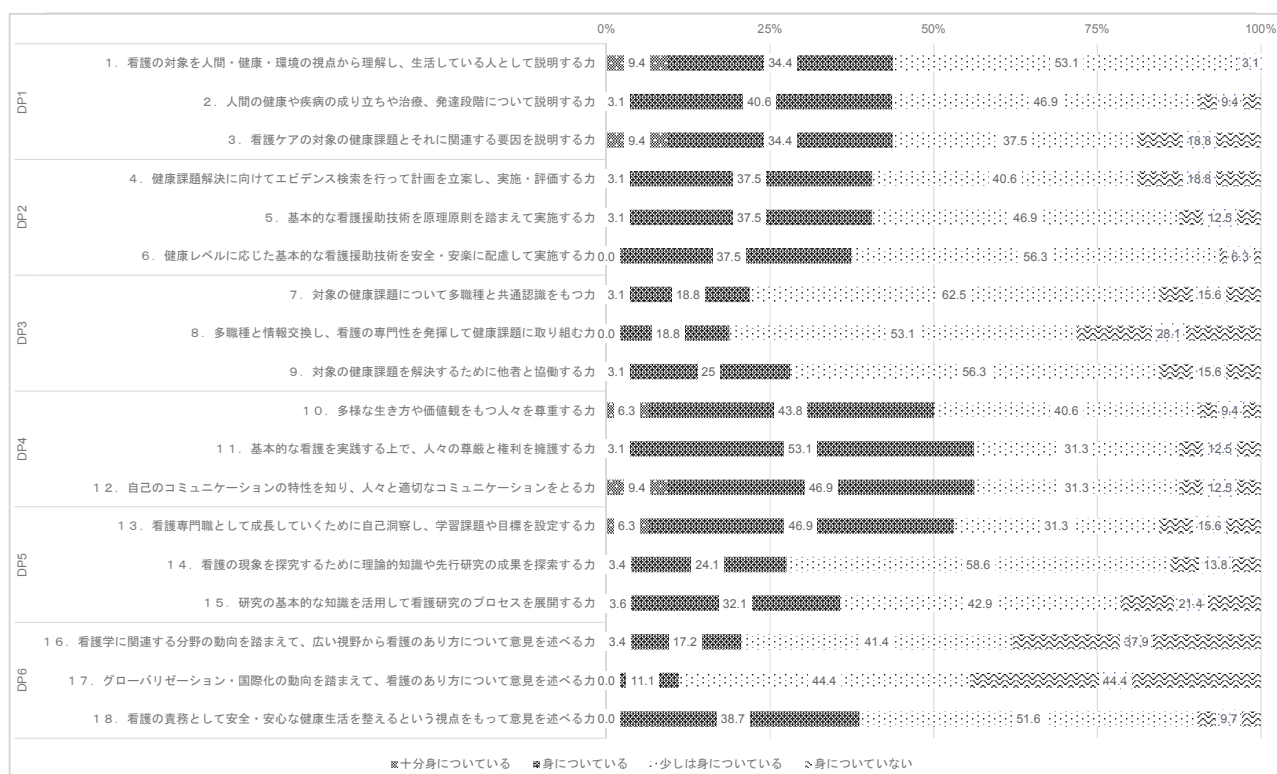


図9 就職先管理者からみた本学看護学部卒業生に対する能力評価

e.看護学部卒業生、看護学部の教育に関する意見、要望

看護学部卒業生、看護学部の教育に関する意見、要望について自由記載を求めたところ「知識や技術は就職後にも身につけることができるので、人への思いや人を理解しようとする姿、人々の健康への願いを持ち多様な人々とともに互いに尊重して、皆で目指すものを助け合って実現していこうとする人材を一緒に育てていければと思います」、「貴校卒業生1名は、真面目な態度と学ぶ姿勢で日々努力できています。そのような面が最も重要であると考えます。基礎看護技術の習得等については、入職後も支援していくことで自分のペースで習得できています」、「情報技術の革新や高齢化社会に対応する多様な役割があり、柔軟に対応できるような人材育成を期待しています」といった回答があった。

【まとめ】

今回の調査対象は旧カリキュラムの卒業生であり、現行の新カリキュラムは令和7年度が完成年度となる。今回の調査結果に加えて、在学生のDP到達度調査、令和6年度に改定された看護

学教育モデル・コア・カリキュラム改訂版等を参考にしながら、本看護学部教育カリキュラムの課題について検討していくことが求められる。

2) 看護学研究科の教育

令和6年度は、看護学研究科看護学専攻博士前期課程および博士後期課程、共同災害看護学専攻博士課程の2専攻3課程をもつ研究科として改組してから12年目を迎えた。入学式後に3課程合同オリエンテーションならびに課程別オリエンテーションを実施してスタートした。

(1) 看護学専攻博士前期課程

博士前期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本研究科の課程の目的、博士前期課程の目的、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー（修了・学位授与に関する方針）に沿って活動を行った。教育課程においては引き続き、修士論文ループリックの活用、ディプロマ・ポリシー評価指標の活用、授業評価を行った。

① 修士論文ループリックの活用

7つの評価項目と4段階の評価基準から成る修士論文ループリックを修士論文審査、各領域の課題研究および研究方法Ⅱの成績評価、および、研究指導時の到達度を確保する目的で活用した。

② ディプロマ・ポリシー評価指標の活用

ディプロマ・ポリシー評価指標は、修了時、ディプロマ・ポリシーに記載された能力が獲得できているか確認するために利用している。昨年に引き続き、学生自身が、主体的に、経時的にディプロマ・ポリシーに記載されている能力が獲得できているかどうかを確認し、満たしていない場合は、どのような科目が能力獲得の手助けとなるのか教員と相談できるような体制をつくり運用していくこととした。まずは、学生にディプロマ・ポリシー評価指標の活用について説明する機会を設け、ディプロマ・ポリシー評価指標を学生に配布している。

③ 授業評価

今年度も授業（講義・演習、実習、研究）の質向上、質保証を目的として、科目毎に授業評価を行った。アンケート項目は、ニーズへの合致、理解、専門性、講義方法などを含む8項目からなり、「1非常にそう思う」～「5全くそう思わない」の5件法で評価を求めた。表1に設問1～8（設問1授業内容は学生のニーズに沿っていた、設問2授業の内容は理解できた、設問3授業内容は自分の専門分野の学習に役立つものであった、設問4授業の方法や進め方は、学生が主体的・能動的に参加できるように工夫されていた、設問5教員は学生の意見や発言内容を反映しながら授業を進めた、設問6私はこの授業を通して、主体的に調べ、探求する施設が身についた、設問7私はこの授業を通して、専門的知識・技術（専門性）を高めることができた、設問8この科目の授業は総合的に判断した満足できるものだった）の結果（講義・演習、実習、研究すべてを合わせたもの）を示す。回答数は、324科目延べ回答数143件、回答率は44.1%であった。評価平均は4.3、すべての設問で、「非常にそう思う」「そう思う」が約9割を占めていた。

表1 設問1～8に関する回答結果

	非常に そう思う		そう思う		どちらとも いえない		そう 思わない		全く そう思わない		合計
設問1 ニーズとの合致	74	52%	53	37%	12	8%	2	1%	2	1%	143
設問2 授業の内容の理解	46	32%	76	53%	16	11%	2	1%	3	2%	143
設問3 専門分野の学習への有用性	91	64%	42	29%	8	6%	0	0%	2	1%	143
設問4 授業の方法と進め方	76	53%	49	34%	15	10%	0	0%	3	2%	143
設問5 学生の意見等の反映	84	59%	39	27%	16	11%	0	0%	4	3%	143
設問6 主体性・探求的態度	76	53%	47	33%	14	10%	3	2%	3	2%	143
設問7 専門的知識・技術の向上	74	52%	54	38%	10	7%	1	1%	4	3%	143
設問8 総合的満足	81	57%	50	35%	6	4%	2	1%	4	3%	143
割合	53%		36%		8%		1%		2%		143

④ ディプロマ・ポリシーの評価

令和6年度の修了生を対象に、カリキュラム、講義、研究指導、実習指導の満足度とともに、本研究科の6つのディプロマ・ポリシー（DP）の修得について、5件法で調査を行なった。回答数は9名（81.8%）であった（前年度64.3%）。

満足度（表1）の全体平均値は4.0だった（前年度4.5）。前年度、最も評価の高かった「カリキュラムに対する満足度」は、3.89であり（前年度4.7）、全体的に前年度を下回る結果にとどまった。

表2. 令和6年度修了生：カリキュラム・講義・研究指導・実習指導の満足度（結果）

満足度項目	平均	5	4	3	2	1
①看護学研究科の教育課程(カリキュラム)についての満足度	3.89	3	4	0	2	0
②看護学研究科の講義についての満足度	4.11	3	4	2	0	0
③看護学研究科の研究指導についての満足度	4.00	4	3	0	2	0
④看護学研究科の実習についての満足度(この質問は、高度実践看護コースの学生のみご回答ください)	4.4	2	3	0	0	0

満足度評価 5:満足している 4:まあまあ満足している 3:どちらともいえない 2:あまり満足していない 1:満足していない

DP評価（表3）の全体の平均値は2.46だった（前年度2.37）。DP個々の平均点は、DP1（2.69；前年度2.8）、DP2（2.29；前年度2.4）、DP3（2.36；前年度2.4）、DP4（2.49；前年度2.5）、DP5（2.40；前年度2.3）、DP6（2.56；前年度1.9）だった。DP6に関しては、前年度よりも大幅な上昇が見られた。

項目別では、平均点が最も高いのはDP6⑤「専門職としての哲学を発展させ、自らの看護観を明確に表現できる（2.89）」であり、最も低いのはDP2②「疫学的な知識や事例分析、統計分析の知識を用いて、現象を包括的に分析し、課題を明らかにすることができる（2.00）」およびDP3⑤「経済や政策・制度がケア提供方法やアウトカムに及ぼす影響を分析し、多職種で協働し、改善策を提案できる（2.00）」であった。

表3. 令和6年度修了生：DP自己評価（結果）

DPおよび各DPの小項目	平均	4	3	2	1
DP1:個人-家族-地域を多角的、複眼的視点で捉え、看護専門領域に関する理論、関連領域の知識・技術、高い倫理観を基盤として、エビデンスに基づく高度な看護ができる能力を有している。	2.69				
①対象を個人-家族-地域の連続性の中で多角的に捉え、意図的に看護を実践できる	2.78	1	5	3	0
②看護の諸理論、倫理に関する理論を活用して、看護介入を計画し実践・評価することができる	2.44	2	2	3	2
③提供されている医療の倫理性を判断して、看護を実践できる	2.78	2	3	4	0
④新たな知識とエビデンスに基づき思考し、専門領域のケアの質を改善するための実践ができる	2.67	2	3	3	1
⑤自らの看護実践を省察し、論理的に表現することができる	2.78	2	5	0	2
DP2:地域社会や生活環境の中で、人々が自立して健康生活を営むことができるように、地域の人々と協働して、健康を促進する地域文化の形成、発展に貢献する能力を有している。	2.29				
①地域ケアシステムの課題について分析し、改善に向けた方策を提案できる	2.11	1	2	3	3
②疫学的な知識や事例分析、統計分析の知識を用いて、現象を包括的に分析し、課題を明らかにすることができる	2.00	1	1	4	3
③ヘルスプロモーションの理念に基づき、地域の人々や多職種と協働して、健康の保持・増進に取り組む方法を提案できる	2.44	2	1	5	1
④地域の人々や地域文化のもつ健康に対する習慣や価値観を把握し、看護を実践できる	2.22	2	0	5	2
⑤倫理的問題や葛藤に対して、倫理的判断に基づき関係者を支援できる	2.67	2	3	3	1
DP3:社会のニーズや健康に関する課題に積極的に関与し、他の職種の専門性を尊重した上で協働しながら社会状況に対応する方略を開発する能力を有している。	2.36				
①互いを尊重したコミュニケーションにより他職種の認識を把握し、対象者を中心にケアを調整することができる	2.67	2	4	1	2
②他職種に対して看護の意図や必要性を説明し、協働することができる	2.56	1	4	3	1
③社会における健康課題を明確にし、多職種と協働して解決に導く方略を考案できる	2.33	1	3	3	2
④政策的な観点から、ケアの質保証やリスクマネジメントについて説明できる	2.22	1	2	4	2
⑤経済や政策・制度がケア提供方法やアウトカムに及ぼす影響を分析し、多職種で協働し、改善策を提案できる	2.00	1	2	2	4
DP4:学際的視点をふまえて看護実践の場、教育や政策の場で看護現象を研究的視点でとらえ、倫理的思考力、リーダーシップとマネージメント力を発揮して変革者として貢献する能力を有している。	2.49				
①看護を個と組織の両面からシステムとしてとらえて説明できる	2.44	2	2	3	2
②集団や組織の場のダイナミクスを分析し、集団や組織を動かすための方略を立てることができる	2.44	1	4	2	2
③ケアの質を改善するために、組織の目標を共有してメンバーが力を発揮できるように働きかけることができる	2.67	2	3	3	1
④対象擁護の立場から、倫理実践の普及のために教育的に取り組むことができる	2.44	1	4	2	2
⑤学際的知識や先進的な技術を探求し、ケアの改善に向けてリーダーシップを発揮することができる	2.44	1	3	4	1
DP5:看護実践を支える科学的・哲学的基盤を理解し、看護研究・看護教育を通して、看護学の体系化とその発展に貢献できる教育・研究能力を有している。	2.40				
①既存の研究論文を批判的に吟味し、評価することができる	2.22	1	2	4	2
②研究に関わる倫理的問題について考慮し、必要な対応を行い研究を遂行できる	2.56	2	3	2	2
③専門領域における課題を探究し、適切な研究方法・デザインを用いて研究を行い、知見を論文としてまとめることができる	2.33	2	2	2	3
④看護学の発展のために、専門領域における教育上の課題を挙げ、課題解決の方策を提案できる	2.56	2	2	4	1
⑤看護実践を支える科学的・哲学的基盤となる理論について説明できる	2.33	2	2	2	3
DP6:国際的動向や多様な文化に関する幅広い知識や最新の情報を備えて、看護をグローバルな視点から捉え、看護の普遍性の追及と体系化に貢献できる能力を有している。	2.56				

①グローバル社会における人々の健康問題を俯瞰し、文化や歴史的背景を含めて説明できる	2.33	2	0	6	1
②異なる文化への感受性を高め、文化を考慮した看護支援に取り組むことができる	2.44	2	1	5	1
③国際社会の動向を踏まえて、専門領域における課題を分析できる	2.44	2	0	7	0
④多様化・複雑化する人々の健康ニーズに対応する看護の可能性について説明できる	2.67	2	3	3	1
⑤専門職としての哲学を発展させ、自らの看護観を明確に表現できる	2.89	3	2	4	0
DP 評価(全体平均値)		2.46			

DP 評価 4:身についた 3:わりに身についた 2:やや身についた 1:わずかに身についた

「看護学研究科が今後さらに充実・発展していくために、取り入れたらよいと思うことや必要だと思うこと」に関する自由記載には、「縦と横のつながりを強化するために、カジュアルな交流の機会を設けること」「専門領域外以外でも構わないので、CNS の資格を有する教員の指導を受ける機会を設けること」「研究計画書および修士論文の提出時期について現行よりも前倒しにした方がよい」などの意見があった。

(2) 看護学専攻博士後期課程

博士後期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本大学院の目的、および博士後期課程の目的に沿って、また、看護学研究科委員会で年度当初に立てた活動目標をふまえて活動を行った。この活動目標のうち、博士後期課程に関連する目標として、目標 2「質の高い学生の確保」、目標 3「教育課程の充実」、目標 4「大学院コアコンピテンシーに基づく教育の質向上」が挙げられる。まず、これらの目標の下位目標の中でも教務活動に関連することを中心に、本年度の活動を評価し、その他の活動を通しての評価、それらをふまえた次年度への課題を明らかにする。

① 目標 2-1) および目標 3-4) に関する評価

目標 2-1) 学生の多様なニーズにあった教育課程の充実(目標 3)を図り、それを大学院の魅力として広く伝えていくことによって、質の高い学生を確保する

目標 3-4) 遠隔教育の教育成果の評価を行い、教育プログラムの充実に取り組む

博士後期課程の科目は、非常勤講師の科目も含め、すべて遠隔で実施した。機器のトラブルはほとんどなく、遠隔でも学生同士のディスカッションは活発に行われており、学生にとっては、身体的、経済的負担の軽減というメリットは大きく学修成果としても大きな課題はないと考えられる。また、研究指導についても、研究計画書や論文の提出直前などの時期を除き、ほとんど WEB での面談で行われ、今年度は 8 名の修了生を輩出している。今年度在学生のほとんどが県外在住の有職者であり、授業や研究指導を遠隔で受けられ、学位取得ができていることは本大学院の強みであると言える。このような特徴を PR したことにより、来年度も定員を超える入学生の確保につながった。

② 目標 4 に関する評価

目標 4-1) DP 評価指標を活用した調査結果の評価・分析を継続し、科目と DP・CP の適合の課題を抽出し対応する

本年度は、9 月修了生 2 名、3 月修了生 6 名に対して修了時の DP 達成度調査を実施した。昨年度の修了生からの回答を含めて 10 名以上のデータが蓄積されるため、4 月以降早期に分析を行い、課題の抽出と改善に向けた対応策の検討に取り組む。また、修了時だけでなく、年次ごとの達成度の確認においても活用し、タイムリーに課題の抽出と改善に向けた取り組みが行えるようにする必

要がある。併せて、学位論文ループリックのデータも R3 年度から一定数蓄積されてきているため、DP 達成度の評価の一部として検討に用いることが可能であると考ええる。

③ その他の活動に関する評価：国際性、学際性の強化

コロナ禍により実施できていなかったエルムズカレッジ大学院との交流について、2 月末、再開に向けて関係教職員とのカンファレンスを実施した。今後、学生間の交流も含めて、研究や教育に関する交流を行えるように具体的な活動方法を検討していくことが必要である。

④ 次年度に向けた課題

次年度も引き続き、遠隔による授業開講となる。指導教員とも連携をはかり個々の学生のニーズや状況を把握するとともに、非常勤講師からも学生の反応や課題などについて意見を伺い、効果的な学修が行えるように支援していく。また、学生同士の交流や情報交換の機会を設けることも必要であると考ええる。

DP の達成度調査、学位論文ループリックを用いた評価については、修了生だけでなく、各年次の経時的な評価も行い、カリキュラムに関する課題の確認と対応策につなげられるようにする。

(3) 共同災害看護学専攻博士後期課程 (DNGL)

① 教育の概要

高知県立大学、兵庫県立大学、東京科学大学（旧東京医科歯科大学）、千葉大学、日本赤十字看護大学の 5 大学によって 2014 年度に開講した共同災害看護学専攻博士課程 (DNGL) は、コース開講 10 周年を経た。令和 6 年度は事務局を本学が担当し、木下真里（本学・教授）を委員長、増野園恵先生（兵庫県立大学・教授）を副委員長として運営にあたった。

コース全体では、インターンシップⅡの発表会（兵庫県立）、災害看護研究デベロップメント合同ゼミ（千葉）を開講した。研究計画書審査に相当する Qualifying Examination (QE) の受検者はいなかった。3 月には本学、東京科学大学それぞれ 1 名ずつ計 2 名が課程を修了し、DNGL の学位を授与された。この結果 R6 年度末時点の在籍者数は、千葉大学、日本赤十字看護大学が各 5 名、本学が 2 名、東京医科歯科大学は 1 名、兵庫県立大学では 1 名となった。一方で、仕事や家庭の事情、妊娠・出産による長期または断続的な休学者も複数おり、この中には QE 未了または QE 合格後数年経過した状態の学生も含んでいるため、まだ全員の修了には相当の時間がかかることが予想される。

2024 年 6 月には、長年コースの運営をけん引し、各大学の教職員・学生が圧倒的な信頼を寄せていた宮崎美砂子先生が逝去され、コースは大きな衝撃を受けた。その後、千葉大学でこれまでも講義や研究科長として DNGL の教育・運営にかかわってこられた正木先生が新たに委員として選任され、学生指導および運営に大きな混乱はきたすことがなかった。2024 年 10 月のお別れ会には、コースで共同献花し、また多数の関係者が出席して故人を偲んだ。

② 本学在籍者の動向

本学では今年度、2016 年度入学者、2018 年度入学者、2019 年度入学者の合計 3 名が在籍した。このうち 1 名（増田みちる氏・2019 入学）が、博士論文中間発表会、論文審査、最終試験に合格し、2025 年 3 月に課程を修了した。前年度休学 2 名のうち 1 名は 2024 年 4 月にいったん復学したものの、研究の進捗が芳しくなく、再度 11 月から 2026 年度までの予定で再度休学した。この 2 名の休学者はいずれも QE 未了であり、修了までに今後数年かかる見通しである。

③ コンソーシアム科目

令和3年より開始した、DNGL コンソーシアム科目については、今年度も引き続き12科目が提供された。本学においては、2科目「環境防災学」「災害看護活動論（準備期）」計3単位を提供し、のべ2名（うち1名は他大学所属）が受講した。また、本学からは2名の学生が他大学提供のコンソーシアム科目のべ3科目を履修した。

令和7年度からは、本学の強みや特徴を生かした科目提供を行うべく、科目構成を見直した結果、本学が提供するコンソーシアム科目を以下の通り変更することが承認された。

変更後（令和7年度～）			変更前	
科目名	単位数	変更点	科目名	単位数
環境防災学	1単位	なし	環境防災学	1単位
災害看護活動論（準備期）	1単位	単位減	災害看護活動論（準備期）	2単位
感染症看護セミナー	1単位	新規		
合計	3単位	なし	合計	3単位

※令和6年度以前入学者は、災害看護活動論（準備期）と感染症看護セミナー2科目の受講をもって、災害看護活動論（準備期）2単位の認定とする。

2. 学際的・国際的な学びを育てる教育環境

1) 学部学生の国際化への支援

(1) イタリア短期派遣研修

イタリア短期研修は、2024年9月16日～9月24日（9日間）実施した。参加者は、看護学部から2名（いずれも3回生）、文化学部1名、健康栄養学部1名の計4名であった。昨年から引き続き看護学部教員1名が引率した。派遣先機関はヴェネツィア・カ・フォスカリ大学で、期間中全日程の研修をヴェネツィア本島および周辺地域で実施した。

研修期間を通してイタリア・ヴェネツィア本島に宿泊し、カ・フォスカリ大学日本語学の授業に参加、本島および周辺地域の散策および歴史的建造物の見学などの観光を行った。全期間を通して現地学生との交流を深めたほか、本学が2025年4月に受入れる国際日本学プログラムの広報ならびに今後の交流に関しての意見交換を行った。

日本語学の授業参加に際しては、共通テーマを「年中行事！食と言葉と音楽と～お月見編～」に設定し、日本人と月の文化的背景、箏曲、俳句、月見団子について、綿密な調査および発表準備をして臨んだ。今回はそれぞれの興味や特技を生かして自由に発表内容を準備したため、完成度が高かった。現地で発表するには、高度すぎるのではないかと心配するほどであったが、さまざまな工夫と入念な準備、そして現地学生の高度な知的好奇心とが合致して、十分伝わったと思われる。現地受入れにあたった教員の方々からも、昨年の研修の様子をみて全く心配していなかったが、今年も期待通り（以上）であった旨の称賛を受けた。



図 1 特技の箏曲について説明する参加者（看護学部3回生）



図 2 積極的な交流（看護学部 3 回生）

全日程ヴェネツィアおよび周辺地域にとどまることにより、学生同士の自然な交流の時間が多く取れ、円安による参加費用負担も抑えることができた。円安下で、多くの学生が保護者らの支援を受けて研修に参加している状況、研修本来の目的（観光ではなく交流）を考えると、1 都市にとどまって海外経験をすることは有意義と考える。

この研修に参加する多くの学生にとっては、これがはじめての海外旅行であり、出発前にはさまざまな不安や、異文化に対する誤解をもっている学生もいる。しかし百聞は一見に如かずで、実際に現地でさまざまな体験をして、自ら乗り越える体験をすれば、それが自信につながり、今後のキャリアにも必ず役に立つと思われる。卒業時期に影響しない程度の短期研修は、看護学部生にとって貴重な学びの機会であり、今後も積極的に参加を促したい。

（2）必修専門科目による学習機会の提供

令和 2 年度に開講し、令和 4 年度に必修化した「グローバル社会と看護Ⅰ」は、毎回異なるテーマについて講師自身の経験とネットワークを駆使し、第一線で活躍する実務家や当事者を招いて授業を展開することにより、学生の視野を広げ、多様な価値観を看護専門職としてどのようにとらえるのかについて学ぶ機会を提供している。また、1 回生が後期に受講することから、進路に迷いが生じている学生にとっては、あらためて看護の役割の幅広さに気づき、自らの進路選択に自信をもつきっかけとなるように心がけている。

令和 6 年度は、紛争地帯で開業する助産師にご登壇いただき、国際社会の中で看護が果たす役割について理解を深めた。ガジャマダ大学（インドネシア）からの短期研修生を授業に招き、全員が研修生と自然に意見交換できる機会とした。（写真）



またこの科目では毎年、経済のグローバル化を背景に起こった薬害エイズ事件を取り上げているが、今回ご登壇いただいた被害者には、被害発生や感染判明の時期が学生と同年代であったことから、その経験やその後の人生で起こったこと、価値観などを淡々とお話しいただいたことにより、薬害の問題をより、自分事として身近に考えるきっかけとなった。



「看護実践能力開発実習」では、期間中に本学を訪れていたインドネシア・ガジャマダ大学からの短期研修生に学内演習に参加してもらい、両国の看護ケア、看護教育について相互に学びを深めた（写真）。

さらに、同実習終盤のまとめ学習では、実習で取り上げた症例に関連する最新の看護研究知見について報告した英語文献の紹介も行った。

(3) 異文化理解看護フィールドワーク開講とインドネシアへの短期派遣研修

令和6年は5年ぶりに異文化理解看護フィールドワークでのインドネシア・ガジャマダ大学への短期派遣研修を実施した。（令和5年度はCOVID-19感染拡大により短期派遣研修は中止となって以降4年ぶりにインドネシアへの短期派遣研修について協定校と協議したが、例年派遣していた時期が令和5年度はラマダンとなること等から、令和6年に派遣研修を実施することになっていた。）

異文化理解看護フィールドワークでは、派遣に向けての準備：インドネシアの医療・生活・言語についての学習とプレゼンテーション、日本・高知を英語で紹介するプレゼンテーション資料作成、海外派遣時のリスクマネジメント研修等を行った後、9月2日から9月10日に、2名の引率教員とともに8名の学生（令和5年度受講生3名、令和6年度受講生5名）がインドネシア・ガジャマダ大学看護学科で短期研修を実施した。

学生間交流では、ガジヤマダ大学の学生に対し、本学の学生がパワーポイントで紹介や高知の様子、日本の医療に関わる課題等を紹介した。また、大学で基礎看護学と救急看護学を担当されている Syahirul Alim 先生に、英語による①インドネシアの医療制度と健康課題、②簡単なインドネシア語とインドネシアの文化について講義を受け、インドネシアと日本の医療・看護の課題の違いについて学んだ。さらに、ガジヤマダ大学のメインの実習病院となるアカデミックホスピタルの見学、保健所見学、市町村の保健活動（この日は高齢者健診）も見学し、日本の病院看護、地域看護との類似点や相違点、対象者の類似点や相違点について学んだ。休日にはガジヤマダ大学の学生達のアテンドで、ムラピ火山のジープツアー、ボルボドゥール遺跡（世界遺産）やクラトンパレス遺跡の見学、マリオボロ散策をした。

参加した 8 名は非常に積極的にインドネシアの人々の生活・文化について学びながら、健康問題や課題についても考察し、ガジヤマダ大学の学生との交流を深めた。

(4) ガジヤマダ大学からの短期研修の受け入れ

令和 6 年 10 月 28 日から 11 月 4 日の期間で、インドネシア・ガジヤマダ大学看護学科学生の高知県立大学看護学部への短期研修を受け入れた。ガジヤマダ大学からは引率教員 1 名、学生 5 名が参加した。研修では以下のプログラムを実施した。

- ・講義：グローバル社会と看護（木下）、日本の医療保険・介護保険制度（川上）
 - ・学部学生の授業への参加：英語コミュニケーション（オバーグ）、看護実践能力開発実習（木下）
 - ・高知市保健所見学：前保健所長堀川先生より保健所の概要、生き生き百歳体操の説明
 - ・高知医療センター見学：中央手術室看護科長（日本 DMAT 隊員）岡崎氏より大規模災害への取り組み、高知県ドクターヘリの説明と施設見学
 - ・もみのき病院見学：インドネシア国籍の看護師 4 名による病院紹介と交流会、ホスピス緩和病棟見学
 - ・学生間交流：インドネシア短期研修参加学生 8 名と土佐和紙工芸村での紙漉き体験、市内散策（高知城、高知城歴史博物館、日曜市等）
- ※学生間交流については後援会からの補助を受けて実施した。

プログラムに対し、ガジヤマダ大学の学生は積極的に参加し、理解を深めていた。また、本学学生も学生間交流プログラムへの参加だけでなく、放課後や空いている時間に食事や買い物のサポートをするなど交流を深め、現在も SNS による交流を継続している。

(5) 短期・長期留学生への支援

看護学部では、大学の国際交流センター運営委員会で運営している協定校との短期派遣研修への学生参加を支援している。令和 6 年度は、上記のイタリア カ・フォスカリ大学への短期派遣研修に 3 回生 2 名の看護学部学生が参加した他、アメリカ エルムズ大学への短期派遣研修に 2 回生 3 名が参加した。教員が引率しない短期語学研修であるイギリス オックスフォード大学には 3 回生 1 名、1 回生 1 名が参加した。

令和 5 年度に国際交流協定校になったベルギーゲント大学日本学科へ看護学部 4 回生 1 名が、令和 6 年 9 月 18 日～令和 7 年 7 月 5 日の予定で長期留学を開始した。長期留学の準備に向けて支援するとともに、4 回生での長期留学であるため、令和 5 年度から本人と複数回面談し、看護学部での科目履修状況の確認、就職活動や看護研究についての希望を聴取し、教務担当教員と連携して修業年限が 1 年以上は延長しないよう調整した。

令和 7 年 9 月からエルムズ大学看護学部への約 1 年間の長期留学を希望している看護学部 2 回生

1 名に対し、留学前の英語学習支援、相談支援、申請支援等を行い、第 9 回国際交流センター運営委員会（令和 7 年 3 月 18 日）で審査を経て承認された。現在、英語学習支援や留学前の取得単位等についての相談支援等を継続している。

(6) 本学のグローバル教育に関する広報

本学看護学部を中心としたグローバル教育についての取組みは、日本 WHO 協会「目で見える WHO No.91 2025 冬号」でも取り上げられた。

2) 大学院への支援

(1) 国際性を強化する取り組み

看護学研究科では国際化を強化する取り組みとして、下記の 4 つを実施した。

① 「アカデミック・ライティングとリーディング」の実施

大学院学生対象に、海外誌や学会発表支援のための「アカデミック・ライティングとリーディング」（講師：Dr. Lee, Hyeon Ju）を実施、延べ 18 名が参加した。

② 海外文献検索ツール利用の支援

図書課と連携し英文検索ツールの活用について開催される研修会、「Web of Science トレーニング」を 3 回、「EBSCO 講習会」を 2 回実施し、大学院生の参加をサポートした。

② 国際学会への参加サポート

韓国で行われた East Asian Forum of Nursing の学術集会を促し投稿をサポートした。その結果、博士前期課程大学院生 2 名が投稿、採択され、発表を行った。

④ 講演の実施

ガジャマダ大学からの短期研修受け入れ時、医療システムリーダーシップと医療情報学を専門とされている ALIANI 先生の特別講義「Nursing Informatics」を国際的な視野を育成する目的で企画し、大学院生 3 名の参加を得た。

3. 教員の国際的な活動

1) 協定校との交流活動

(1) ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学

令和6年度イタリア短期研修は、2024年9月16日～9月24日（9日間）に実施され、昨年に引き続き木下教授が引率した。学生の研修、体験を支援するとともに、今後の交流に関して、カ・フォスカリ大学側担当者と具体的協議を行った。

コロナ禍および担当者の逝去による長期中断の後、再開後の短期交流は大変うまく行っており、今後も継続する方針を双方が確認した。一方で、イタリア側学生の本学への研修参加者の確保が課題となっている。カ・フォスカリ大学へは、日本からも多数の有名大学が交換留学協定を締結しており、イタリア人学生にとっては研修先選びに苦労しない状態である。国立大学であるカ・フォスカリ大学として、特定の大学の研修を薦めることは難しい。そこで、①本学との間で交換留学の協定を締結する。これにより、授業料免除、学生寮の利用、学生支援サービスの特典により、競争力を確保する。②学生募集スケジュールを見直す。現在学生募集は秋に行い、春に来日するスケジュールであるが、学生募集を他大学の交換留学選考終了後の1月から実施し、秋学期に渡航するように変更することで、他大学の選考にもれた学生の受入れにより、学生を確保する。二点を検討することになった。

(2) ガジャマダ大学との活動

インドネシア・ガジャマダ大学医学/公衆衛生学/看護学部教授 Ariani Arista Putri Pertiwi 先生による特別講義「Nursing Informatics」を令和6年10月30日に開催した。教員10名、大学院生3名が参加した。

また、令和6年10月10日に、Ariani 先生も参加された西ジャワ州インドネシア看護管理者協会主催の国際セミナー「看護実践における遠隔医療：コストとケアの質」において、「在宅領域でのテレナーシング」についてのゲストスピーカーとして川上准教授がオンラインで参加した。

2) 民間団体との連携

(1) 国際 NGO ピースウィンズジャパン

特定非営利活動法人ピースウィンズジャパン(PWJ) は、本学と災害時連携協定を締結しているが、看護学部教員は災害時以外に、この NGO の実施する国際人道支援活動に関して技術的協力を継続している。今年度は、同団体が受託した令和6年度日本 NGO 連携無償資金協力事業「ミャンマー避難民に対する救援事業（タイ・カンチャナブリ県サンクラブリ郡におけるミャンマー避難民を含む脆弱な母子支援ボランティアの育成事業）」に、木下真里教授が保健医療専門家として8月に派遣され、現地 NGO に対して専門的助言を行った。

(2) 共同研究

上述2024年8月のPWJ委託業務での渡航をきっかけに、現地医療機関および保健医療分野の支援団体との連携がはじまり、同年末ごろからタイ・ミャンマー国境地域での母子保健サービスに関する共同研究をスタートした。まずは、移民や避難民の妊婦健診(Antenatal Care, ANC)受診状況のデータを収集し、どのようなサービスを受けているのかを調査することから開始している。2021年のミャンマー軍事クーデターや、コロナ禍、2025年3月28日に発生した大地震の影響や、米国の海外援助政策方針の変更(USAIDの解体による事業終了)に伴う財政難が、現地の母子の健康状態に影響を及ぼす可能性を検討する。

次年度も継続予定であるが、今後は調査結果を踏まえた支援にまで活動を拡大するため、正式な母子保健支援事業として公的機関への応募を検討中である。

(3) 学会活動

① 日本災害医学会国際委員会

前年度より引き続き、木下真里教授が日本災害医学会の国際委員として、主に世界災害緊急医療学会 WADeM2025・Tokyo の開催企画、演題 20 編の査読、災害看護系国際学会との連携を担当した。創刊にあたっては、査読委員となり、学会演題編、投稿論文 1 編の査読を担当した。2024 年 WSDN（世界災害看護学会）が神戸で開催されるにあたっては、木下教授が JADM-WSDN 連携ワーキング・グループのリーダーとして協力の調整にあたった。

② 世界災害看護学会 WSDN

11 月に神戸で開催された表題学会には、木下教授が単独座長として登壇した。また DNGL として 5 大学共著演題を発表した

(4) WHO 協会機関誌への寄稿

日本 WHO 協会「目で見える WHO No.91 2025 冬号」に、本学看護学部を中心としたグローバル教育についての取組みについて寄稿した。



3) COACHES プロジェクト

COACHES は、災害時にすべての被災者の安否と健康状態をクラウド上に記録し、広く共有する情報システムであり、これを導入することにより効率的で迅速な支援を実現しようという情報イノベーションの取り組みである。木下真里教授が研究責任者として、これまで高知工科大学や、民間企業、自治体と学際的に連携して実施して開発を進めてきた。

今年度は、科研費「全被災者の健康状態把握を支援するモバイル・ツール開発研究（基盤研究 C20K11132）」の助成期間延長分に加えて、新たに「全被災者の安否・健康状態を把握し共有する仕組み COACHES 実証研究（基盤研究 C24K14202）」も開始となり、合計 2 件の助成を受けて以下の活動を行った。

(1) 研究成果の発表

令和 6 年度第二回県大立志塾「探究★こころと身体と健康」において県内高校生を対象に実演を交えて紹介した。また、オープンキャンパスの災害看護体験ブースでは、県内外の高校生および保護者を対象に研究紹介および成果の報告を行った。

(2) 実証実験

実用化の次ステップとして、実証実験の実施計画の検討を行った。具体的には、実証実験サイトの検討を行った。タイ・ミャンマー国境地帯の村落での実証実験サイト候補として検討した。この地域は、移民・難民の往来が盛んであり、多民族、多言語の民族で構成され、氏名や生年月日、住所の把握が困難な一方で、多くが日常的に携帯端末を利用している。隣国ミャンマーの軍事情勢によって、避難民の流入が頻繁に起こっていることから、COACHES 導入ニーズを認めた。

(3) 学際ネットワークの拡大

今年度から香美市を拠点に DR-IoT 事業を推進する Dreams Forum に、本学・社会福祉学部教員とともに参加することとなり、今後新たに学際的連携が拡大する見込みである。

(4) 次年度に向けての取り組み

実証実験を本格的に実施するにあたっては、実災害でも利用可能な仕様にシステムの改良を行う必要があり、必要な開発予算の助成申請を行って、早期の実用化を目指す。

5. がんプロフェッショナル養成プラン

1) はじめに

文部科学省は、令和5年度より第4期がん対策推進基本計画の人材育成の施策として「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」事業に取り組んでおり、中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムは、「地域をつなぐ未来世代のがん専門医療人養成」事業を展開している。本学は、がんプロ第1期からがん高度実践看護師WGの幹事校としてがん看護専門看護師の養成およびがん看護の質向上に向けた取り組みを行っている。令和6年度は、本学と徳島大学大学院、山口大学大学院、鳥取大学大学院の4大学院で取り組んだ。

2) がん高度実践看護師WGの活動

がん高度実践看護師WGでは、「1. がん高度実践看護師の養成」「2. がん医療における質の高いがん看護実践の推進」を2つの活動テーマに挙げ、①各大学によるがん高度実践看護師の育成、②がん高度実践看護師インテンシブコースの開講、③がん高度実践看護師WG講演会の開催、④大学院がん看護学合同セミナーの開催、⑤11 大学院チーム医療合同演習への参加（教員はFD）⑥H.P.などによる広報活動、⑦各大学におけるセミナー・特別講義の開催、⑧修了生に対するがん看護CNS認定試験までのサポートの8つの活動に取り組んでいる（図1）。

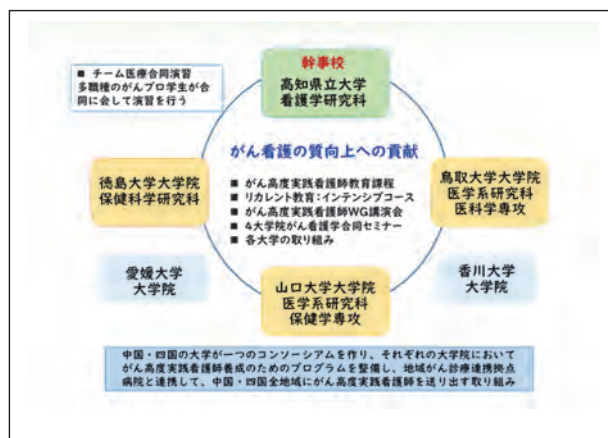


図1 がん高度実践看護師WGの活動

3) 高知県立大学の取り組み

高知県立大学大学院では、「1. がん高度実践看護師の養成」では、38単位の教育課程のプログラムに加え、がん看護実践を豊かにする取り組みを行っている。令和6年度は、2名が入学し、修了生の3名ががん看護専門看護師の認定を受けた。

「2. がん医療における質の高いがん看護実践の推進」活動としては、リカレント教育プログラムを開講している。

(1) がん高度実践看護師の実践力を豊かにする取り組み

令和6年度は、がん看護実践看護師教育課程に加え、がん看護実践を豊かにする取り組みとして、以下のような取り組みを行った。

①がん高度実践看護師（APN）セミナー

- ・日時：2024年6月6日（木）、6月10日（月）、6月21日（金）、6月24日（月）、7月5日（金）、7月12日（金）、7月18日（木）の7日間
- ・場所：高知県立大学看護学部棟 C322
- ・参加者：各回4～6名（がん看護学領域学生7日間合計31名）

高知県内で活躍する修了生のがん看護専門看護師より、高度実践看護師としての役割機能別に、実践、倫理調整、コンサルテーション、コーディネーション、教育、研究の事例など、活動の実際についてご講義いただいた。学生は、先輩の体験を通し、高度な看護実践の在り方や専門看護師の役

割機能をどのように発揮していくのか等について具体的に学ぶ機会となり、学生自身が目指す高度実践看護師についての目標や課題を見出すことができていた。

(2) がん医療における質の高いがん看護実践の推進：リカレント教育

① がん高度実践看護師WG講演会 in Kochi

- ・日時：2024年7月14日（日）13：00～16：40
- ・場所：高知県立大学池キャンパス Web(Zoom)開催
- ・テーマ：がんゲノム医療における意思決定支援
- ・講師／テーマ
平沢 晃 先生（岡山大学学術研究院医歯薬学域臨床遺伝子医療学分野教授）
「がんゲノム医療における基本的な知識と看護師への期待」
荒木 もも子 先生（島根大学医学部附属病院臨床遺伝・ゲノム医療センター副看護師長）
「がんゲノム医療を受ける患者・家族の支援～看護師に期待される役割と課題～」
- ・参加者：79名

第4期の全体の活動目標は、がん医療の新たなニーズやアンメットニーズに応えるケアの質向上を推進する看護師養成である。2024年度は、「がんゲノム医療における意思決定支援」をテーマに、中四国全県、東京、近畿、九州などから79名の方々にご参加いただき、web(Zoom)での講演を開催した。

平沢 晃 先生には、がんゲノム医療のこれまでの歩みと定義、がん遺伝子パネル検査、治療の最適化と発症予防のためのがんゲノム医療についてご講義いただいた。

荒木 もも子 先生には、遺伝とがん、遺伝性腫瘍について具体的な事例を踏まえてご講義いただき、看護職が正しい知識を得ることの重要性と看護職に求められる役割について考えることができた。

アンケートでは、講演会の内容について93.1%が非常によくわかった、よくわかったと回答し、「最新の情報を得られた事は大変貴重な機会だった」、「本人、家族の意思決定について、それぞれ納得できるような支援ができるように今後も学んでいきたい」という意見があった。参加者にとって最新の知見を得られるだけでなく、自らの看護について振り返り、明日からの看護に向けて考える機会となった。

② がん高度実践看護師（APN）コース：リカレント教育プログラム

第4期の全体の活動目標は、がんサバイバーシップを支える専門性の高い看護師養成である。2024年度は「Extended(延長された生存) & Permanent(長期的に安定した生存) Stageにあるがんサバイバーへの支援」をテーマに、4単位60時間（8日間）の教育コースを実施した（表1）。

受講者は39名であり、高知、愛媛、香川、岡山、広島、山口、島根、鳥取、兵庫、大阪、福岡、岐阜、東京と、中国・四国のみならず全国各地から参加があった。受講者のうち32名が修了した。

受講生からは、「Extended&Permanent Stageにおける特徴を知ることができた、多職種と協働できる点を具体的に知れた」、「今回のようにサバイバーに関してまとまった講義を受ける機会はなかなかないので受講して良かった」、「専門性の高い講師からのわかりやすい講義や、グループワークでの学びがあり、得るものが大きい」、「具体的な内容かつスライドがまとまっていて、大変分かりやすい」、「資料がデータでもらえたので復習しやすい」、「グループワークで学びが深まった」、「地域のCN・CNSとも交流する機会が持つことができ、充実した研修」、「事例を通して理論に基づいて考えることができたので日々の看護実践に活かしていきたい」という意見が聞かれた。

また、すべて Web 開催としたことについて、「Web 開催は時間的・経済的負担が少なかった。現地開催だと移動の費用や時間もかかり参加できなかった」、「遠方なので事前宿泊で 3 日間連続した休みの希望を 4 か月のあいだ職場にだすのは難しい」、「Web でも十分グループワークはできた」、「今後も Web 開催をしていただきたい」などの意見をいただいた。

表 1 2024 年度がん高度実践看護師（APN）コースの内容

目 的	がんの初期治療を終了後も残存する機能障害や生活障害のあるがんサバイバーに対する専門的知識と技術を学び、がんサバイバー・家族のニーズや潜在化した課題、アンメットニーズに対応することのできる専門性の高い看護実践力を修得する。
対 象	専門看護師、大学院修士課程修了者、がん看護に関連する認定看護師
修 了 要 件	本教育プログラムで定める科目（1 単位 15 時間）をオンラインで 4 単位 60 時間のうち 8 割以上受講すること
履 修 期 間	2024 年 9/7(土), 8(日)、10/5(土), 6(日)、 11/2(土), 3(日)、12/14(土), 15(日)
履 修 科 目	＜がんサバイバー診断治療学：1 単位 15 時間＞ Extended & Permanent Stage にあるがんサバイバーの生活を支えるために、初期治療後も残存する機能障害や生活障害について、医学的・解剖学的視点から理解することにより、患者のアセスメント能力を獲得することを目指す。また、残存する機能障害や生活障害に対する対応方法について理解を深め、看護実践について考察する。 講師：医師 5 名、がん専門薬剤師 1 名、高知県立大学看護学部教員
	＜がんサバイバー看護基盤論：1 単位 15 時間＞ Extended & Permanent Stage にあるがんサバイバーの機能障害や生活障害についての知識を踏まえ、身体的・心理的・社会的な課題を理解するとともに、がん看護に活用できる概念や理論を理解し、がんサバイバーへの看護実践を検討する。 講師：がん看護 CNS5 名、医療ソーシャルワーカー 1 名、高知県立大学看護学部教員
	＜がんサバイバー看護実践論：1 単位 15 時間＞ Extended & Permanent Stage にあるがんサバイバーの機能障害や生活障害および病態の理解を踏まえ、がんサバイバーの生活の質の向上につながる看護実践を学修する。また、がんサバイバーを支える社会の様々な取り組みについて学修する。 講師：がん看護 CNS3 名、家族支援 CNS1 名、理学療法士 1 名、管理栄養士 1 名、医療ソーシャルワーカー 1 名
	＜がんサバイバー看護展開論：1 単位 15 時間＞ 科目 1～3 の学習を踏まえて、高度な看護実践を展開できる能力を獲得し、Extended & Permanent Stage にあるがんサバイバーに対する看護援助を考える。 講師：高知県立大学看護学部教員 4 名
受講者	39 名 うち 32 名が修了 がん看護 CNS 14 名、家族支援 CNS 1 名、緩和ケア CN14 名、がん化学療法看護 CN 3 名、 がん放射線療法看護 CN 2 名、がん性疼痛看護 CN 2 名、乳がん看護 CN 1 名、 がん薬物療法看護 CN 1 名、大学院生 1 名

おわりに

第4期(令和5度～令和10年度)のがんプロフェッショナル養成プランにおいて、本学は第1期より継続してがん高度実践看護師WGの幹事校として活動を行っている。現在、修了生の49名ががん看護専門看護師として様々な場で活動している。

今後は、愛媛大学に2025年度新設予定のがん高度実践看護師教育課程との連携をしていく。そして、5大学院で協働して入学生の確保とCNS認定試験受験の支援に継続的に取り組んでいく。また、リカレント教育においては、アンケート調査を分析して、インテンシブコース(APNコース)においては新たなテーマの教育プログラムを開発し、がん高度実践看護師WG講演会においても新たなテーマを企画していく。これらの取り組みにより、高度実践看護師および地域の看護職の看護実践力の向上に貢献していきたい。

6. 高校生のための看護学を学ぶ公開講座

高校生のための看護学を学ぶ公開講座は、看護学に高校生が触れ考える機会を提供するもので、高校生が学問として看護を学ぶということ、大学で看護を学ぶ志向性を強めることを目指し実施している。令和6年度は、「援助関係」をテーマとし、オープンキャンパスのプログラムの一つとして参加型で実施した。

- 実施日時：令和6年7月27日（土曜日）

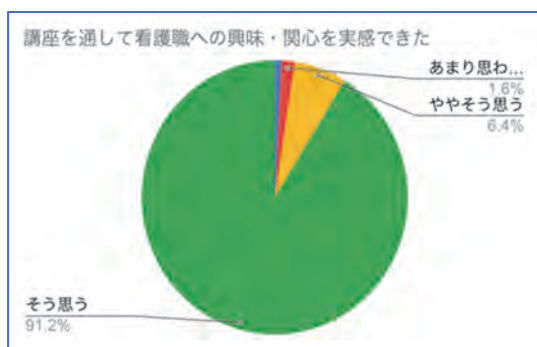
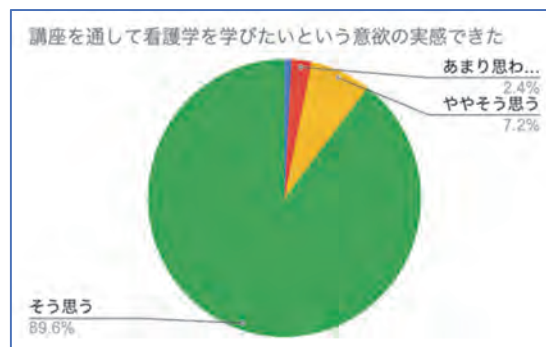
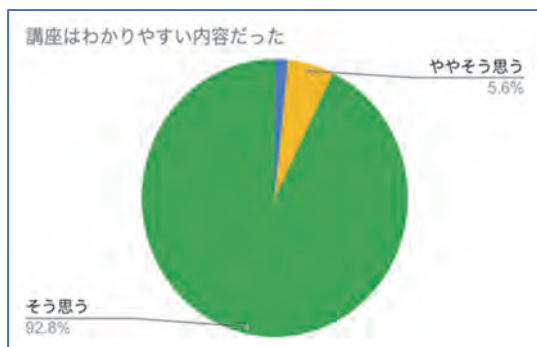
午前の部と午後の部に1回ずつ、合計2回実施。事前申込の予約制

- 高校生対象：午前、午後とも定員80名
- テーマ：「援助関係について考えてみましょう」
- 講師：畠山卓也 准教授（精神看護学領域）
- 内容：講義と課題学習(1回40分)

参加者がこれまでに培ってきた「対人関係」と、これから学び身につけていく「援助関係」との相違について考えることのできる機会とする。

講義を通して、人間関係と援助関係の相違について確認しながら、個人ワーク（①私のことをケアしてくれる看護師だと認識するための条件、②参加者自身のよいところ、強み）に取り組み、その内容を全体で共有した。そして、「豊かな人間関係をつくるために、いまできること」についてグループワークを行い、日々の生活のなかで取り組み努力することの大切さを共有した。

GoogleFormsを用いた参加者のフィードバック（回答数125件・回答率90%程度）からは、講座のわかりやすさ、看護学を学ぶ意欲、看護職への興味・関心のいずれも高い評価だった。また、自由記述の回答からは、人間関係を大切にすること、自分を知ること、自分を磨くこと、相手の立場になって考えることの大切さが記されていた他、グループワークで他者の意見を聞くことの面白さについても多くの高校生が回答していた。





7.高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業：看護・社会福祉連携事業

1) 看護・社会福祉連携事業について

高知医療センターと高知県立大学は、医療・健康・福祉・栄養分野における交流連携を推進し、双方の実践、教育、研究の質向上を図るとともに、地域・社会への貢献を促進するため、平成 22 年 11 月に両組織間の包括的連携協定を締結した。これは、高知医療センター看護局と本学看護学部が、よりよい看護の実現を目指して平成 18 年から取り組んできた看護連携型ユニフィケーション事業を発展させたものである。現在はこの協定に基づき、全体を統括する包括的連携協議会の下に、健康長寿・地域医療連携部会、看護・社会福祉連携部会、健康栄養連携部会、災害対策連携部会の 4 部会を設置し、さまざまな連携事業を展開している。

このうち看護・社会福祉連携部会では、看護および社会福祉に関する連携事業として、①学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供、②基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力、③教員によるコンサルテーションの実施、④臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究、⑤県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催、⑥その他看護・社会福祉連携活動の実施、を行っている。

(1) 看護・社会福祉連携部会の委員および活動状況

令和 6 年度は部会委員を、高知医療センター18 名（看護局 8 名、地域連携室 10 名）、高知県立大学 9 名（看護学部 7 名、社会福祉学部 2 名）、計 27 名で構成し、活動を推進した。今年度は本学看護学部が部会長および事務局を務めた。

看護・社会福祉連携部会では、前年度末に活動計画が決定していたため、下記のとおり 1 回のメール会議と 1 回の部会会議を開催した。また適宜、情報交換や相談を行いながら、事業を進めた。

- ・第 1 回看護・社会福祉連携部会（メール会議）：8 月

上半期の事業実績および下半期の事業計画の確認、COVID-19 による影響の把握

- ・第 2 回看護・社会福祉連携部会：2 月 17 日開催

事業実績および活動評価の確認、次年度の活動に向けた課題の検討、次年度の事業計画の検討等

(2) 看護部会における事業実績

今年度は、活動に対する COVID-19 の直接的影響は概ねなくなったが、一部はオンラインで行うなど工夫し、両施設で協力して事業に取り組んだ。最終的な事業実績は表 1 のとおりである。

表 1 令和 4 年度看護部会における包括的連携事業実績

1. 学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供

1)学部生および大学院生の臨地実習

学部生：看護基盤実習、看護実践能力開発実習Ⅰ、急性期看護実習、慢性期看護実習、母性看護実習、小児看護実習、★チーム医療実習、総合看護実習（急性期看護・慢性期看護・小児看護・★精神看護・助産看護領域）、看護管理実習（急性期看護・慢性期看護・小児看護・助産看護領域）、助産看護実習Ⅰ・Ⅱ のべ 304 名

大学院生：小児看護学実践演習Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、がん看護学実践演習Ⅰ、クリティカルケア看護学実践演習Ⅳ のべ 6 名

2)大学院生および教員の臨床研修

大学院生：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域、5回・のべ7名）、救急症例検討会等への参加（クリティカルケア看護学領域、2回・のべ2名）
教員：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域5回・のべ7名）

2. 基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力

1)医療センターによる教育・研究支援

(1)教育支援

学部生：

インターンシップ（3回生31名）

実践的知識獲得へのサポート；「感染管理について」（2回生80名）、「医療安全について」（3回生85名）、「医学的知識を活用した看護実践」（3回生65名、4回生66名）

ゲストスピーカー；★治療と看護「患者・家族の移植治療のプロセスと移植コーディネータの役割について」（3回生10名）、急性期看護論「クリティカルケアの場における死と看取り」（2回生80名）、終末期看護援助論「終末期にある患者と家族のケアの実際」（3回生85名）、★チーム医療実習ゲストスピーカー「入退院支援センターにおける継続看護および連携について」（3回生85名）

★小児看護領域看護師1名の派遣（2024年10月1日～2025年2月28日）

看護実践能力開発実習Ⅰにおける指導（4回・4回生82名）

ナーシングカフェ：小児看護の魅力を語る会（2月20日・1回生1名、3回生2名、4回生4名）

*参加者なし：ドクターヘリ見学および「ドクターヘリの運用とフライトナースの役割について」

*未開講：がん看護論ゲストスピーカー「外来でがん治療を受けるがん患者への看護支援」

大学院生：★老人看護展開論Ⅱゲストスピーカー「高齢者のせん妄と薬物療法」（博士前期課程1名）

(2)研究支援

学部生：看護研究における研究対象者の紹介（助産コース）

大学院生：修士論文、博士論文における研究対象者の紹介（3題）

教員：教員の研究における研究対象者の紹介（4題）

2)大学による教育・研究支援

(1)継続教育支援

研修の講師：「ストレスマネジメント」（19名）、「グループマネジメント」（28名）、「話をきく技術」（12名）

シミュレーション研修「けいれんの初期対応」のトレーニングならびに勉強会；4Aフロア（小児看護学領域、1回・7名うち医療センター3名、2回・6名のうち医療センター2名）

マネジメントリフレクション（看護管理学領域、3回・118名）

シミュレーション教育学習会（オンラインでの学習会）看護実践能力を高めるための学習会「学習支援の極意を学ぶ！」（20名うち医療センター10名）

*未実施：「4・5年目看護師のキャリア開発」

(2)研究支援

看護研究4「看護研究を系統的に学ぶ」（5名）

3. 教員によるコンサルテーションの実施

CNS申請に向けてのサポート（小児看護学領域1名）

せん妄・認知症ケア、リエゾンチームのケアの質向上を目指すためのコンサルテーション(4 回 2 名) *未開催：QC サークル活動のコンサルテーション
4. 臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究 なし
5. 県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催 1)市民を対象とする共同事業 *未開催：「赤ちゃん同窓会」企画・運営への学生・教員の参加 2)専門職者を対象とする共同事業 なし
6. その他看護・社会福祉連携活動 なし

★は新規事業

(3) 事業評価および次年度への課題

看護部会では、今年度も両施設で連携しながら各事業を実施した。COVID-19 の影響もほぼなくなり、計画していた事業は概ね予定通り実施できた。

年度末には部会会議において事業評価を行い、ここ数年の状況を踏まえ、本年度も実施してきた事業を再検討し次年度計画に反映することとなった。今年度、新カリキュラムに対応した実習（チーム医療実習）がスタートしたが、高知医療センターの協力を得て、学びの多い実習となっており、引き続き次年度以降も連携して実施する。これまでの事業を継続するだけでなく、各事業の効果や必要性を評価し、改善や発展に取り組み、両施設にとって有機的な連携事業を生み出すことができている。次年度は新カリキュラムに対応した実習として家族看護実習、総合看護実習Ⅰ、総合看護実習Ⅱ、看護実践能力開発実習Ⅱが開講される予定になっている。新規事業においては担当者間で連携を密にとり、高知医療センター、本学ともに実りの多い事業となるよう努める。

また、看護と社会福祉の連携強化として実施してきた、社会福祉部会で毎月（4～10 月）行われている事例検討会は、昨年度に引き続き対面での開催であり、本学からは看護の教員や大学院生も参加することができた。大学院生にとっては社会福祉やソーシャルワークについて学びを深める機会や、各専門領域における社会的課題に関して多角的に考察する機会となっている。また、社会福祉と看護の視点を織り交ぜ、対象者理解や関わりのプロセスを振り返ることで、複眼的な分析につながるだけでなく、互いの専門領域の考え方や活動を知ることが参加者にとって刺激になっていることから、今後も引き続き参加を促していきたい。次年度も対面のみで開催になるため、今後も参加促進を図っていく必要がある。

2) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ

(1)高知医療センター・高知県立大学スキルズラボの相互利用の概要

高知医療センター2 階 205 に高知医療センタースキルズラボが開設されている。本学からは、医療センター看護局を通じて高知医療センターのイントラネット（院内 Web→設備予約）を使用して事前予約をおこなってから使用する（鍵は看護局、事務局で管理）ことになっており、主に学部生実習などの目的で使用している。高知医療センターの医師や看護師も事前予約の上、本学に設置している設備および備品（シミュレータなど）を使用できる。申込書類は教育研究戦略課に提出されるため、設備および備品の管理責任者は総務企画課から連絡があった場合、設置室、設備および備品を確保する。

(2)高知医療センタースキルズラボの利用実績

令和6年度(4-12月)における高知医療センタースキルズラボ使用実績としてナーシングスキルへのアクセス数は317(341)人、アクセス回数は8,353(10,197)回、映像閲覧回数は1,625(1,624)回、閲覧コンテンツ数は690(875)であった。動画講義へのアクセス数は105(88)人、アクセス回数は307(478)回、閲覧講義回数は762(188)回、閲覧講義数は119(91)であった。本学からの高知医療センターでのナーシングスキルコンテンツへのアクセス数は、25(0)であった。昨年度の本学からのアクセス数ゼロに対して、具体的なコンテンツの紹介等により、若干の実績数の増加がみられた。
※()内は令和5年度実績

(3)高知県立大学スキルズラボの利用実績

本年度の高知医療センターによる本学施設の利用実績として、高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業「医療コンフリクトマネジメント研修会」が令和6年12月21日(土)に開催された。BLSOプロバイダーコースが本学から必要物品の貸し出しを行い、令和6年11月2日(土)に協同開催された。

(4)高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ運営委員会

本学からの委員として、池田教授が参加している。本年度は令和6年10月17日(木)に第1回スキルズラボ運営委員会が開催された。令和6年度スキルズラボ備品等決算、令和6年度使用実績等報告、令和7年度スキルズラボ予算について話し合われた。運営委員会での議論は、高知医療センターとの包括的連携協議会において報告された。

(5)次年度の課題

本年度は昨年度に比べて、使用実績や活動実績がやや改善した。コロナ禍以前の活動に戻るまでには、様々な課題は残されているが、医療センター職員、学生(学部・大学院)や本学教職員の協働を推進し、効率的な包括連携の運営方法を再構築していく必要がある。

(6)スキルズラボ備品

本年度のスキルズラボの備品は昨年度と同様であるが、貸出実績はやや増加した。詳細は、健康長寿研究センター報告書を参照されたい。

3) 専門職者のキャリアサポート

(1)事業概要

本事業は、医療専門職者の臨床実践能力の向上や生涯発達の支援を目指して、高知医療センターとの包括的連携事業並びに高知県立大学健康長寿研究センターの専門職者のキャリアサポートとしての企画である。本年度は、初学者・学習者を育てていく指導者の看護実践応力を向上することに焦点を当てた「学習支援の極意を学ぶ！」学習会を開催した。

講師である愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センターの内藤知佐子氏より、初学者・学習者に見えているものと指導者が見ているものの違い・学習した内容が実践に結びつかないことなどの困りごとを共有しながら、改善を図るために必要となる「きく・みる・つたえる」方法を見出すことに焦点を当てた講義が展開された。さらに、講義で学んだ「学習支援の極意」を知識にとどめず実践に活用できるように、参加者を少人数のグループに分けて3つの架空事例を用いたグループディスカッションを行うといった講義と実践をつなぐ参加型の学習会を実施した。

(2)活動成果

講師から「学習支援の極意」として指導者は初学者や学習者がどのような背景をもち、どのような思考過程を特徴とするのか等を理解する必要性を既存の研究結果からエビデンスを示されるとともに、“教える（ティーチング）”から相手に応じて“引き出す（コーチング）”指導方法への転換が求められていることを具体的に学んだ。さらに、効果的な学習支援となるためには初学者・学習者と指導者との相互交流や相互理解を深めていくかかわりが重要であり、指導者の“質問から発問へ”“具体的な発問のパターン”といった具体的な内容を学んだ。講義の後は実践への活用として、ひとつの事例（指導者と新人Nsのケアの振り返り場面）が示され、講師が講義で示した極意の活かし方を解説したうえで、3つの場面事例を1事例ごとに4～5人のグループディスカッションを通して、個人の学びにとどまらず、グループメンバー内外の学びの共有ができた。

(3)活動評価

参加者は学習会の中で、自身の指導者としてのあり様を振り返ったり、講義で学んだ「学習支援の極意」の内容を架空事例の展開において活用する実体験を行ったりすることができた。参加後のアンケート調査において、13名の参加者より回答を得た。その結果、学習会の内容が自身の学習ニーズにとても合っているかについて「とてもそう思う」「そう思う」（5段階評価の5）と13名全員の回答を得たことより、非常に満足感が高かった。また、学習会に参加して今後に役立つ気づきや学びが得られたかについて「とてもそう思う」「そう思う」と12名より回答を得たことから、概ね学習支援に活かす気づきや学びが得られていた。さらに、得られた気づきや学びを今後の看護実践や看護教育に活かすことについては「とてもそう思う」「そう思う」と13名全員から回答を得たこと、また、自由記載においても明日から活用できるポイントや工夫を得たことや、講義の中での事例をグループディスカッションしたことでより実践の場をイメージして活用できるとの意見を得ることができた。

したがって、参加者個々人の立場において、初学者・学習者を育成していくにあたり、相手を理解する姿勢を礎に、指導者自身の思考を転換しながら看護専門職として高め合える学習支援の極意を日常の中で展開していく機会となったことより、本事業の達成ができたと考える。

4) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース Blso in 高知

(1) 事業概要

本事業は、高知県内の救急隊員や医師、看護師を対象とし、病院外や救急外来での急な分娩の対応、産科救急の初期対応を学ぶ研修である。高知県が平成29年度から高知医療センターに委託している事業であり、高知医療センターにて令和6年11月2日に開催された。受講者は救急救命士19名、医師2名、看護師1名、その他2名であった。看護学部教員（母性・助産看護学領域）はアシスタントとして運営サポートに携わった。研修プログラムは、分娩介助、新生児蘇生、女性傷病者の評価、症例検討、救急車内分娩などであり、講義と少人数グループによる実技トレーニングにより実践を学ぶ内容となっている（表1）。

		メイン会場(1階)	サブ会場(1階)
08:30～	受付開始	講師 8 時 00 分集合	
09:00-09:10	オープニング	渡邊	
09:10-10:10	分娩助 助 ABC:1 階メイン、DEF:1 階サブ 自己紹介 5 分 60 分(各セッション 20 分×3)	G1 分娩→肩甲難産→第 3 期 G2 肩甲難産→第 3 期→分娩 G3 第 3 期→分娩→肩甲難産	G4 分娩→肩甲難産→第 3 期 G5 肩甲難産→第 3 期→分娩 G6 第 3 期→分娩→肩甲難産
10:20-11:15	新生児蘇生 ABC:1 階メイン、DEF:1 階サブ 実習 50 分 最後に各グループでまとめ 5 分		
11:25-12:25	女性傷病者の評価 ABC:1 階メイン、DEF:1 階サブ 実習 50 分(シナリオ 5～6 個) 最後に各グループでまとめ 10 分		
12:25-13:00	休憩		実技試験会場準備(2 階)
13:00-13:40	症例検討 AB、CD:1 階メイン、EF:1 階サブ		
13:40-14:10	マタニティーケアの安全性(1 階メイン)		
14:20-15:10 車内分娩 15:10-15:30 4 本の柱	車内分娩(4 本の柱)/筆記・実技試験	車内分娩 ABC 筆記・実技試験 DEF	車内分娩/4 本の柱 (1 階メイン) 筆記・実技試験 2 階
15:40-16:30 車内分娩 16:30-16:50 4 本の柱	筆記・実技試験/車内分娩(4 本の柱)	筆記・実技試験 ABC 車内分娩 DEF	車内分娩/4 本の柱(1 階メイン) 筆記・実技試験 2 階
16:50-17:00	クロージング、写真撮影		DEF 講師は筆記試験添削 ABC 講師は写真撮影までに シミュレーター片付け

表 1. 研修プログラム

(2) 活動成果

高知県内の分娩施設の減少により、住居区域外で妊婦健診・分娩をする妊婦は多数いる。そのため、分娩施設までの物理的距離から、分娩施設がない地域の医療者は車中分娩、妊産婦救急に遭遇する機会が増えているといわれている。産科疾患の搬送や救急対応は全救急搬送においても少数の事例であり、救急救命士等においても、対応に不安を抱えている方も少なくない。周産期専門でない医療従事者がそのような場面での対応を学ぶことは、高知県内の妊産婦や胎児・新生児の救命に直結することであり、高知県民が受ける医療の質向上につながる。

(3) 活動評価

本学からは必要物品の貸し出しを行っており、病院前妊産婦救急に関わる人材の継続教育を支援することができた。受講生が、所属施設で伝達講習を行い知識の普及にもつながっている。アシスタントとして運営サポートに入った教員は、周産期医療に関する最新の知見や産科救急の他組織多職種連携の実践的な学びが得られるとともに、研修の企画・運営といった教育手法を学ぶ機会になった。次年度も開催される予定であり、引き続き、高知医療センター事務局、産科と連携して対応する。

8. 健康長寿研究センターにおける看護学部活動

1) 看護学部の方針

健康長寿研究センターは、高知県立大学の関連学部が連携して、地域の人々の健康長寿の推進および健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の知識や技術の向上に努めることを目的として設置されている。看護学部では、運営委員会を中心に健康長寿研究センターの運営及び活動に参画し、他学部や地域教育研究センターの教員と連携して地域健康啓発研究活動を展開している。また、看護学部教員や領域、学部全体等の単位でセンター事業を実施することで、高知県内の看護その他保健医療福祉分野に係る人材育成と県民の健康づくりに貢献することを目指している。

2024年度は、大学の既存の3センターが新たな研究機構として再構築された。健康長寿研究センターも新機構の方針に則り、活動ポリシーの5領域の見直しを行った。まず、既存の5領域の中でも新しいセンター名にもある「高知県の健康長寿を研究する活動」を強化し、下記の新しい活動ポリシーを定めた（下線部は強化した特に強化していく活動）。

- 1.健康長寿社会を推進する調査・研究及び社会実装の提案に関すること
- 2.健康長寿を目指す県・市町村との連携に関すること
- 3.医療機関・社会福祉施設など健康長寿に関連する機関との連携に関すること
- 4.健康長寿に携わる専門職等の教育・研修に関すること
- 5.地域共生社会の実現に係る施策・事業の科学的評価に関すること
- 6.地域共生社会に携わるボランティア・リンクワーカーの育成・訓練に関すること

これまで看護学部4事業として、事業間の連携及び他の事業とのつながりも大切にしながら高知県の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動を強化してきた事業に関しても県民の医療・健康・福祉の具体的な課題解決につながる成果指標を示すことが求められる。

昨年度から実施している、津野町との連携協定に基づき、津野町の住民の方々の健康とウェル・ビーイングの向上に資する活動についても同様である。短期間で成果を示すことは難しい課題が多いのが現実だが、だからこそ、領域や学部を超えて学際的な活動を通じて、調査研究を社会実装していくためにも健康長寿研究センターの存在意義があるといえる。

今年度の報告は、年度途中でのポリシー変更でもあり、これまでの形式を踏襲した事業実施報告も多いのが実情ではあるが、今後は、個々の事業や教育・研修の成果や効果を科学的に検証・評価し、地域共生社会の実現に重要なリンクワーカーやボランティア・市民のリカレント教育や育成に努めていきたいと考えている。

なお、本報は、健康長寿センターにおける看護学部の主な活動の要約の報告であるため、各活動の詳細な内容は、「令和6年度健康長寿センター報告書」をご参照頂きたい。

2) 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動

(1) 土佐市連携事業

メンバー：小林秀行、田之頭恵里、徳岡麻由

① 活動概要

土佐市では、小中学生に対する健康調査の実施とその後の指導を通して、小中学生とその家族が成長後も健康的な生活を送れるよう、健康の改善を促すことを目的に、平成24年度から生活習慣病予防健診（とさっ子健診）を実施している。本プロジェクトは土佐市と本学との間で締結されている連携事業の一つとして行われている。

本年度は、開始より 10 年以上経過したことから、データベース化による健診結果の健康政策への利活用を念頭に、過去の受診者の健診データと生活習慣データの関連の分析を進めた。また、健康行動や社会経済状況、家族の状況との関連を検討する必要があることから、過去の受診者を対象とした追跡調査を実施し、結果の分析を進めた。

また、子どもが適度な身体活動を行って健康的な生活を実現する一助とすることをねらい、健診当日にスウェーデン体操の実技体験を行った。

さらに出産後の育児困難や産後うつ症状の出現予防として、妊娠期からの継続した支援の必要性から「土佐市両親学級」を開催している。両親学級を通し両親と家族を理解し、地域での生活の実際や健康課題を知り、教育研究に活かしている。また、学生が対象と関わる中で、対象の妊娠の受け止めや子どもへの思い、出産への準備性の高まりを学ぶ貴重な機会を得ている。

② 活動成果

健診当日には市が実施する生活習慣病予防健診に加えて、受診者ならびに保護者を対象に健康行動やウェル・ビーイングに関する質問紙調査を実施した。また、過去の受診者ならびに保護者を対象に同様の調査を実施し、合わせて 180 人の有効回答が得られた。統計分析の結果、夜更かし

（小学 5 年生は 22 時以降、中学 2 年生は 23 時以降の就寝）により、脂質代謝（中性脂肪）や糖代謝（HbA1c）の項目で有所見となるリスクが有意に高くなった。また、平日に朝食を欠食することにより肥満度が上昇する影響が見られ、これは身体活動の不足や家族の経済的豊かさを考慮しても変わらない結果であった。

スウェーデン体操の実技体験には約 30 人の児童・保護者の参加が得られ、日頃の運動習慣がある子どももない子どもも、健康の上で効果的な身体活動を楽しみながら体験されていた。

両親学級には 10 組の両親が参加された。沐浴は両親が実際に体験できるよう、安全や工夫について共に考え、手順を確認しつつ実施した。具体的にどのような場所で誰が、どんな方法で実施するか、両親がイメージしながら取り組む様子が見られた。手順通りにやることが正解ではなく、新生児に合わせて徐々にコツがつかめることを知り、「イメージが深まりました」と話される両親の様子がみられた。育児生活プランでは各家庭が 1 枚のシートに現在の家庭生活での役割分担について話し合い、産後の育児生活を具体的にイメージしながら、役割を話し合う機会となっていた。

③ 活動評価

分析の結果は土佐市健康づくり課と共有し、分析結果とそれに基づく生活習慣形成のアドバイスを記事とした「とさっ子だより」が作成され、市内小中学校の全児童・生徒に配布され、分析結果が健康的な生活習慣を目指す普及啓発に活用された。

また、研究成果は日本公衆衛生学会総会、ならびに日本看護科学学会学術集会で発表されたほか、論文にまとめて公刊された。両親学級については効果的な開催に向けて検討中であり、今後、開催時期や回数、プログラムの内容や運営方法等の検討を重ねることが必要である。今後も地域社会の実際のサービスとの連続性の中で、事業全体についての評価機会につなげていきたい。

(2) 地域ケア会議推進プロジェクト

本プロジェクトは、高齢者の介護予防を促進するために土佐市が平成 25 年度より行っている「地域ケア会議」の会議運営に関する助言、会議内容の課題分析の支援を行うもので、今年度も看護学部の教員 2 名が出席した（詳細は健康長寿センター報告書参照）。

地域ケア会議では、土佐市の事業所が担当している要支援 1、要介護 1 のケースについて看護職のほか多職種で専門的な視点で情報の分析、ケアの方向性などについて助言をした。助言内容を

うけて各事業所が取り組んだ内容について3か月後に報告をうけ、さらに情報の分析を行い今後のケアの方向性を協議した。各ケースでは、脳卒中、循環器疾患の症状管理の難しさ、家族介護者の負担緩和を図るアプローチや認知症高齢者の生活支援等についての対応困難が挙げられ、特に疾患の症状変化、異常を早期発見するためのポイント、家族の言動の解釈、家族の強みを活かした介護負担感を緩和するためのアプローチについて助言を行った。このほか、専門職間で土佐市の介護上の課題とその対応策、地域ケア会議の運営方法の工夫についても協議した。これまでケース検討会資料に検査データが含まれていない場合が多く症状の把握、予測について十分な検討に至らないことが課題であった。そのため、全ケースの報告において、直近の検査データを含めてもらうことで身体情報に関するアセスメント、介護予防についての具体的アプローチの検討がより深められるようになった。

このように、看護職のアドバイザーには疾患特有の症状管理、家族の介護負担の緩和についてのアドバイスが求められており次年度も継続して参加する予定である。

3) 高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

(1) 中山間地域等訪問看護師育成講座

①事業概要

本講座は、平成27年度から高知県中山間地域等の訪問看護師の確保・育成・定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、大学の教育力・学習環境を活かした「中山間地域等における新任・新卒訪問看護師育成プログラム」を開発・運用している。中山間地域等の訪問看護ステーション（以下訪問看護ST）と協働し、高知県、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知県医師会、高知県社会福祉協議会、高知医療センターの協力のもと新任・新卒訪問看護師育成に取り組み、新卒者17名を含む合計192名が修了し、在宅や医療機関等で活躍をしている。

②事業成果

- i. 訪問看護スタートアップ研修（35科目138時間・特別講義2科目）を年2回開催した。

【開催日時】前期：令和6年4月23日（火）～令和6年9月17日（火）

後期：令和6年10月1日（火）～令和6年12月18日（水）

【受講者】17名：新卒卒1名、中山間卒6名（スタンダード3名、セカンド1名、サード2名）
全域卒10名（内通年コース1名）

- ii. 学習支援者研修会・検討会

新卒・新任者が所属する訪問看護STの学習支援者となる管理者等を対象に、学習支援に関する研修会・検討会を7回開催し、学習支援に必要な研修と課題や対処を検討した。

- iii. 新卒および修了者フォローアップ研修

新卒者を対象に、フィジカルアセスメント研修を4回開催した。修了者フォローアップ研修は、糖尿病をもつ在宅療養者のセルフケア支援、ポータブルエコー、中山間訪問看護、ACPと看取り・エンゼルケア、複雑なニーズをもつ在宅療養者と家族の支援をテーマに6回開催した。ケースプレゼンテーションは16回実施し、修了者コンサルテーションはキャリア等に関する5件の相談があった。また、公式ラインの登録者数を増やし修了者への情報提供に努めた。

- iv. 保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議

高幡、中央西福祉保健所管内の2ヶ所で開催し、中山間地域の在宅医療・訪問看護の現状と課題を共有し、訪問看護師育成、研修方法に関する課題や期待について意見交換を行った。

- v. 参画団体による企画会議

関係協力団体による企画会議を2回開催し、新卒・新任訪問看護師育成の課題や対策、新卒や修了者のフォローアップ研修、事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成

における関係機関の役割について検討した。

③活動評価

令和 6 年度受講者の約 6 割は訪問看護 ST 所属であったが、訪問看護事業予定の医療機関、連携する高齢者施設、退職後のセカンドキャリアとして訪問看護を志向する看護職の受講など多様な動機やキャリアをもつ受講ニーズに対応した。結果、研修 35 科目（157 項目）の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの 5 段階で評価した自己評価点の平均は 3.9 ± 0.7 （標準偏差）であった。また、新卒卒 1 名、中山間卒スタンダードコース 3 名の修了時の目指す姿および学習課題の自己評価は、ほぼ全員が「できた・まあまあできた」と捉えており、プログラムを活用して実践力を備え自信をもった単独訪問が可能となり、訪問看護 ST の一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。なお、本講座の事業内容、実施体制、プログラムの詳細、事業評価については、本学健康長寿研究センター報告書に掲載している。

(2) 入退院支援事業

①活動の概要

入退院支援事業は、中央西福祉保健所の依頼を受け平成 22 年度から地域病院協働型入退院システム構築に取り組んだ実績から発展し、平成 28 年度からは高知県の基金事業として位置づけられている事業である。

本事業は平成 28 年度に本学が策定した「地域・病院・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン（以下、ガイドライン）」を活用して病院の入退院支援体制の構築及び、入退院支援・退院調整における院内の横断的な調整役を担う「相談支援事業」や、地域のコーディネーターとなる人材育成や病院内外が協働する入退院支援を推進する管理者、看護管理者育成などの「研修事業」、および自施設で入退院支援体制の改善に取り組むことを目指す「入退院支援体制のモニタリング事業」の 3 事業を展開している。

②活動成果及び評価

i. 相談支援事業

昨年度モデル基幹病院である、高知病院、高知西病院において、可視化シートを用いて 2 事例について事例展開を行い、システムの定着化に取り組んだ。また、今年度、新たなモデル基幹病院である近森オルソリハビリ病院において、ガイドラインに沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、地域包括支援センター、居宅介護支援専門員、病院の多職種が参加した運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討、決定し、次年度、「入退院支援可視化シート」案を作成、その後地域スタッフからの意見を踏まえ、見直しをかけ、事例展開につなげ、システムの定着化を目指す。

ii. 研修事業

研修事業である研修会、大交流会、報告会では、県内外より 185 施設、述べ 534 人の参加があった。

iii. 入退院支援体制のモニタリング事業

今年度はモニタリング運営会議を 12 病院に対して行った。モニタリング運営会議では、病院・地域スタッフが参加する事例検討やモニタリングシート結果の分析などを行い、地域・病院・多職種協働型退院支援システムの稼働状況について評価を行った。また、地域からの情報を各専門職の支援計画に有効に活用する視点について示す「入・退院時の引継ぎルールを活用した専門職による入退院支援ケアマニュアル ver.1」を作成した。

iv. 総合評価

相談支援事業、及び研修事業、モニタリング事業において、199 施設、延べ 672 人の参加があっ

た。相談支援事業・研修事業、モニタリング事業を継続して展開することにより、入院時から、地域・病院・多職種で切れ目のない円滑な移行を目指した「地域・病院・多職種協働」による入退院支援の体制づくりの必要性について県全体への周知に繋がっていると言える。

以上より、高知県の地域包括ケアシステムの重要な構成要素である「在宅医療」・「介護連携」にも、寄与できたと考える。

(3) 糖尿病保健指導連携体制構築事業

令和元年度より高知県から委託を受け、「糖尿病保健指導連携体制構築事業」を開始した。本事業は、糖尿病の未治療者・治療中断者・重症化ハイリスク者に対して、院内多職種と地域の保険者・保健福祉機関・1次医療機関との連携・協働によって、継続的かつ効果的な治療と生活の両立支援を行う「血管病調整看護師」を育成し、その活動を支援するものである。

令和6年度は、第1期～第3期の13モデル基幹病院のうち参加8病院と6つの福祉保健所を、安芸、中央東・高知市、中央西・高幡、幡多の4ブロックに分けて、地域の糖尿病重症化予防を推進する連携体制の強化支援策を講じた。その具体的活動は、参加8病院の血管病調整看護師への糖尿病重症化予防のOff-JTとして、「基幹病院合同連絡会議」5回、「ブロック単位の事例検討会」3回を開催した。これらは、次年度に向けて血管病調整看護師が地域の中で主体的かつ自律的活動を行えることを目的に実施した。

「基幹病院合同連絡会議」は、4つの基幹病院（高知県立あき総合病院、社会医療法人仁生会 三愛病院、高知県立幡多けんみん病院、高知医療センター）が企画・運営した。血管病調整看護師が、地域の課題に着目し、解決に向けた活動を行えるよう、第8期高知県保健医療計画のアウトカム指標を視野に入れた課題・成果の可視化、課題抽出と対策を協議する方法を話し合えるよう支援した。また、「ブロック単位の事例検討会」は3つのブロック（安芸ブロック、幡多ブロック、中央東・高知市ブロック）で開催され、各ブロックに属する基幹病院（高知県立あき総合病院、高知県立幡多けんみん病院、社会医療法人近森会 近森病院）が企画・運営した。血管病調整看護師が、重症化ハイリスク者の抱える問題の特徴と地域の支援体制づくりを話し合えるよう支援した。これらの会議は、本事業に係る多機関・対象者への参加依頼と調整により実現した。本事業の「基幹病院合同連絡会議」「ブロック単位の事例検討会」は、高知県保健政策課と高知県立大学健康長寿研究センター事務職員の連携による各方面との連絡・調整、ならびに協議のテーマ・方法に対する福祉保健所と本事業担当教員の準備支援と連携より開催され、血管病調整看護師にとって貴重な学習機会となった。

これら活動を通して、血管病調整看護師は、地域の保健医療福祉職者と協議することで、地域住民の重症化を見渡す視座、重症化予防を地域単位で捉える視野、看護師のケア調整役割を発揮する視点をさらに一歩前進させたと評価できる。

今後の課題としては、未だコロナをはじめとする複数の感染症が常時警戒されるなか、病院看護職者のマンパワー不足も重なり、血管病調整看護師の活動継続がますます困難な状況に陥っていることである。医療改革による臨床現場の変動も大きく、血管病調整看護師の活動が看護職全体へ波及するようなケア政策や看護教育が一層必要になると考えられる。

（詳細は健康長寿センター報告書参照）

(4) 高知県介護職員喀痰吸引等研修

① 活動の概要

本事業は、平成24年4月1日から施行された介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養（以下「たんの吸引等」という）の実施のための研修の制度化を受けて、居宅及び障害者支援施設等におい

て必要なケアをより安全に提供するため、特定の者に対して適切にたんの吸引等を行うことができる介護職員等を養成することを目的としている。基本研修と現地で実際のたんの吸引等を指導する実地研修から構成される。

地域完結型医療の推進により、居宅や施設でたんの吸引等を実施できる介護職員等の養成の必要性があり、本学では今年度基本研修を全4回計画した。

② 活動成果および評価

＜活動成果＞

第1回は受講者がいなかった。第2回目以降は、2日間の講義研修を終えた受講者10人(※うち第4回研修受講者1名は筆記試験未受験)のうち9人が筆記試験に合格し、実技研修を受け、基本研修を修了することができた(合格率90%)。

＜評価＞

受講者は昨年に比べると少ないが(令和5年度27名、令和4年度13名)、その中でも小児への吸引等を目的とする受講者が増えており、医療的ケアを必要とする児の生活を保証するための体制づくりが必要となっていると考えられる。高知県では、高齢者介護に関わる人材不足が深刻な地域もあり、業務の都合で研修参加が負担となることも予想されるため、研修に参加しやすくなるよう、日程や地理特性を考慮して開催場所を検討しながらの継続が必要と考える。

尚、詳細は健康長寿センター報告書参照。

4) 高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

(1) 中堅期(前期)保健師能力育成研修

昨年からは開始し、2年目の取り組みである。本研修は、中堅期(後期)保健師の人材育成としておこなっていた、保健活動評価研修会につながることを目的に、地区活動の展開を理解するための研修として取り組んでいる。1回目は、地区活動の展開について、2回目は地区活動計画の立案・評価指標について、3回目は、研修の取り組みのプレゼンテーションの計3回の研修である。前年度の評価を踏まえ、研修内容や時間の工夫をおこない、今年から2回目と3回目の間に、個別のコンサルテーションを導入した。なお、今年度は、全てWeb形式での開催を行ったことから、高知市から遠方の村からの参加も複数あった。また、個別のコンサルテーションは、課題に対する質疑応答や、助言を行ったことで、好評を得ることができた。しかし、研修のグループワークや、参加者同士の意見交換の時間設定が短かったため、次年度は情報共有や交流をおこなうなどの工夫を行っていく予定である。

(2) 高知県新任期保健師研修会

1年目の保健師を対象とした研修では「個別支援」、2年目の保健師を対象とした研修では「地区診断」、3年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル①」としてプロセスの理解、4年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル②」として、事業評価の実施をテーマに、各2回、取り組んだ。今年度は、Web形式の開催を導入し、遠方からも参加しやすい方法を取り入れた。研修の1回目は、方法論を中心に説明し、2回目に成果物を提出するように行った。なお、新任期1年目の保健師は、初年度の研修であり、保健師間の交流が重要となるため、全て対面で行った。研修後、参加者から、Web形式の開催について、継続を希望する意見があった。ここ数年は、集合研修において、4年間受講する新任期保健師が多い。本研修は、日頃の実践を踏まえた研修となることから、自らの課題を振り返る機会となる。今後も、集合研修と、OJTによる保健師の専門能力の

獲得を連動させながら、研修内容の工夫を行っていく予定である。

(3) 公開講座「フィジカルアセスメント研修」

本事業では、フィジカルアセスメントの経験不足や自信不足を解消し、基礎知識と技術を再確認・強化することを目的に、県内の卒後3年目までの臨床看護師を対象に実施した。研修内容は、フィジカルアセスメントに関する講義・グループワーク（55分）、講師による事例を用いたフィジカルアセスメントデモ（10分）、参加者のフィジカルアセスメント演習（45分）、聴診演習（15分）、全体の振り返り（20分）であった。

20人の募集に対して9人が参加し、アンケートには4人から回答を得た。4人の年齢の平均は33.8歳で全員が女性だった。看護師経験年数は、4人ともに2年目で、このうち2人が、フィジカルアセスメント研修の受講経験があった。現在の勤務病棟は、医療療養病棟2人、一般病棟1人、回復期リハビリテーション病棟1人だった。アンケートの回答によると、フィジカルアセスメントの知識や技術を強化できたと全員が回答した。一方で、下位項目の「異常所見の正しい判断ができた」について、1人があまり思わないと回答した。フィジカルアセスメントの手技は全員が学べたと回答した。研修に参加した動機を聴取したところ、「上司に勧められたから」「フィジカルアセスメントが苦手だから」「講師を知っていたから」などだった。

研修期間中の受講者の主体的な様子やコメント、アンケート結果を考慮すると、臨床におけるフィジカルアセスメントに関する課題に対して、基本的な知識や手技を再確認する機会を提供できた可能性がある。グループワークによるディスカッションやそれぞれの施設における情報共有は、フィジカルアセスメントにおける不安軽減や安心に繋がった可能性が示唆される。一方で、20人の募集に対して参加が9人であること、参加の動機が、上司の勧めや講師を知っていたこととの回答を考慮すると、本研修におけるニーズの再検証が必要である。さらに、終了後アンケートの回収率の低さについても原因の検討が必要である。

5) 高知県の健康長寿および地域共生社会の調査・研究および社会実装に向けた活動

(1) シミュレーション教育事例検討会

昨年度、シミュレーション教育学習会（オンラインでの学習会）を「教育実践に活用する振り返りの技」のテーマで高知医療センターとの包括的連携事業並びに高知県立大学健康長寿研究センターの専門職者のキャリアサポートと位置付けて実施した。そこで、本年度も、高知医療センターとの包括的連携事業並びに高知県立大学健康長寿研究センターの専門職者のキャリアサポートとして、高知県下の医療専門職者を対象とし、初学者・学習者を育てていく指導者の看護実践能力の向上に焦点を当てたテーマ「学習支援の極意を学ぶ！」（オンラインでの学習会）を開催した。

その結果、参加者個々人の立場において、初学者・学習者を育成するための指導者としての思考の転換が求められていること、その転換をもって初学者・学習者とともに看護専門職として高め合える学習支援の極意を学び、日常の中で展開していく糧やスキルを得た。詳細は包括的連携事業専門職者のキャリアサポートを参照されたい。

9. 高知県立大学「県民大学」学生プロジェクト「立志社中」の採択と活動

1) 健援隊の活動

健援隊の活動目的は、専門知識をわかりやすく地域の方に伝え、知識の普及と健康文化の醸成であり、立志社中プロジェクト設立時の 2013 年より活動している。プロジェクトでは、活動を通して地域の方との関係性を構築しつつ地域の要望を取り入れながら継続的に課題の解決に取り組んでいる。今年度は、1~4 回生まで 41 名の学生が活動を行った。

(1)活動目標

- ①香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と健康寿命向上に関する知識、方法の共有や災害の備えについて一緒に考え、住民の方のセルフケア能力の向上を支援することを目指す
- ②香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と減災に備える意識の向上を目指す
- ③園の方と子どもが自分の健康について興味関心をもてる健康教育活動を目指す
- ④地域の住民の方と AED の知識や使用方法に関する知識の普及を目指す

(2)活動内容

- ①香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と健康寿命向上に関する知識、方法の共有や災害の備えについて一緒に考え、住民の方のセルフケア能力の向上を支援することを目指す

隣接する神池地区と柳瀬地区は、病院までの距離が遠いこと、近隣に入院病床がないため、入院が必要になると住み慣れた地区を離れざるを得ないという医療上の課題がある。住民の方々にとり入院を防ぎ「住み慣れた地域で健康に暮らしたい」ということが健康ニーズの一つとなっている。そのため、住民自ら体調管理に取り組めるよう、送付するお便りでは熱中症を取り上げた。

現地への訪問は、神池地区 2 回、柳瀬地区 1 回であり、健康活動として、血圧測定、健康体操の実演や誤嚥・窒息の予防と対処法、折り紙を住民とともに実施した。また、継続して健康チェック表の作成と送付を 3 か月に 1 回行った。また、2 回生 5 名が中心となって取り組み、地域の方は、延べ約 20 名参加されていた。

- ②香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と減災に備える意識の向上を目指す

地区内を住民の方と一緒に歩き、避難時に危険な個所（苔で滑りやすい、石垣が倒れてくる）を確認し、後日住民の方に写真を提示しながら意見交換を行った。また、住民の方と備蓄品や災害時の炊き出しについて話すことができた。柳瀬地区の住民からは、可能であれば、来年度炊き出しをしたいという要望が聞かれた。

- ③園の方と子どもが自分の健康について興味関心をもてる健康教育活動を目指す

今年度は、高知市五台山保育園と高知愛児園において活動を行った。教育内容については、子どもたちの保育園での過ごし方、興味関心があることなど事前に子どもたちについて理解をした上で、教育内容を検討することに努めた。各保育園で各 3 回、子どもたちと共に遊び、保育園の日課に取り組む子どもと交流を図った。子どもたちの様子や園の職員からの意見を踏まえ、健康だよりでは「熱中症」や「バランスの良い食事」について配布した。また、健康教育は「睡眠」「バランスの良い食事」「手洗い・うがい」についてクイズを交えて行った。小児の活動では、2 回生 4 名が中心となって活動に取り組んだ。

- ④地域の住民の方と AED の知識や使用方法に関する知識の普及を目指す

AED 講習に先駆けて、高知市消防局の協力を得てメンバーが救命講習を受講した。講習を受けて AED の使用においては、周囲への応援要請、AED と胸骨圧迫を併用することで効果が上がることなど、ポイントについて整理して、紅葉祭の参加者に対して AED を含む救命講習を行った。

(3)活動の評価

- ①香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と健康寿命向上に関する知識、方法の共有や災

害の備えについて一緒に考え、住民の方のセルフケア能力の向上を支援することを目指す

住民の方からは、地区にしながら自分の健康状態を知ることができる機会は、日頃から自身の健康管理に興味関心をもつ住民の方々にとって、新たなセルフケア能力の向上のきっかけ作りとなっていると考えられた。

②香美市物部町の柳瀬地区、神池地区の住民の方々と減災に備える意識の向上を目指す

初回の訪問で現地の危険な箇所を確認したため災害時のリスクについて住民の方に納得していただけ様子であった。ただし、防災対策の充実を図るための提案や具体的な活動には至っていない。話し合った内容を踏まえ、備蓄品や今後の炊き出しについてお便りで提案する予定である。

③園の方と子どもが自分の健康について興味関心をもてる健康教育活動を目指す

健康教育では、事前に五台山保育園と高知愛児園に事前調査として訪問し、園児の保育園での過ごし方を観察したことで子どもの行動、認知の特徴をふまえた教材作成に取り組むことができた。学習会では、毎回 10～20 名の年長児、年中児の参加を得た。子どもたちは集中して聞いている様子であった。また、学習会後にお便りを配布した時は、真剣に声に出して読み上げている様子や分かった内容を学生に知らせたりしており、関心を持って学んでいる様子であった。

④地域の住民の方と AED の知識や使用方法に関する知識の普及を目指す

救命講習は、一定の期間が経つと忘れてしまうため、住民を対象に定期的に知識の普及を図ることが必要である。健援隊の活動目的にも合致するものであり、今後も継続していく。

(4)今後の課題

より効果的な活動を行うため、学生の活動のタイミングと地域側の受け入れのタイミングがズレないように大学の年間行事、授業日程などと地域側のイベント等を踏まえた日程調整を早期から行いスケジュールを立てていく必要がある。今年度は、活動に必要な書類作成が期限間際になってしまったため、余裕をもって活動できるよう学生に働きかけていく。

今年度は、1 回生の学生が活動に参加できるように呼び掛けていたが、講義や学生の予定により都合がつかず、現地での活動は 2 回生のみであった。2 回生からは、前年度からの引継ぎが不十分であったとのことから、学年間でのコミュニケーションをとる機会を積極的に持ち、新しい年度のメンバーがスムーズに活動できるようにしていく必要がある。

2) いけいけサロン活動の活動

「いけいけサロン活動」は、看護学部 4 回生 6 名、2 回生 6 名、1 回生 5 名の計 17 名で活動する結成 10 年目のチームである。今年度のプロジェクトの目的「安心を考える：池地区で安心して暮らすことができる、知識を持ちより意見を尊重しあう、安心して活動ができる」を掲げて、地域の方々と学生が共創した実践可能な活動を行った。

(1) 活動目標

- ①一人一人が安心して活動できるようにそれぞれの意見や言葉を大切にする。
- ②互いに無理のない範囲で安全に楽しみながら、継続できる活動を行う。
- ③互いに尊重しあい、相手を理解しようとする姿勢を続ける。
- ④毎回の活動終了後に振り返りを行い、次の活動に活かす。

(2) 活動内容

上記 4 つの目標の到達に向け、以下の活動に取り組んだ。

① 毎月のチラシ配布の継続

池地域の町内会と協力して、毎月チラシの配布を行った。住民の方に、サロン活動開催の案内や季節に応じた話題や脱水予防などの注意喚起を行い、見て読んで楽しめるものを作成していた。

② 池地域でのサロン活動

池公民館、大学で計 6 回のサロンを開催した。池公民館でのサロンは、季節の折り紙や七夕といった活動をしてながら交流を深めるとともに本活動についての意見などを話し合うことができた。11 月のサロン活動では、大学祭に招待し災害時の避難場所である大学を身近に感じてもらえた。

③ 深掘り活動（池さんぽ・聞き取り調査）

池地域の避難経路・避難場所の実態を把握するために「池さんぽ」を行い、避難経路や避難場所にある危険箇所や災害時に活用できる場所を見つけることができた。さらにサロン活動の中で災害への思いについて聞き取りを行った。8 月の南海トラフ地震臨時情報「巨大地震注意」を体験したことで、災害を現実捉えて不安や危機感が高まっていることがわかった。

④ ペットと災害について

災害時に備えて「ペット用の迷子札」の試作品について住民の方々に意見をもらい、ペットにも負担がかからない迷子札の改良点が明らかになった。

(3) 活動の評価

① 毎月のチラシの配布の継続

2 回生を中心に 1 回生と協力して今年度も毎月かかさず配布することができた。学生は町内会代表の方と接し、締切や持参の仕方などを学ぶことができた。

② 池地域でのサロン活動

それぞれのサロン活動で、学生は高齢者である住民との会話の仕方や、健康管理の方法、生活上の工夫を理解し、それをふまえた活動を検討することができた。それぞれの学年が専門科目での知識を生かし、案を持ちよったサロンを行うことができた。

③ 深掘り活動、ペットと災害についての活動

自分たちで現地の散策、試作をすることでより具体的に検討することができた。さらに、検討した内容をもとに住民の方と意見交換することで新たな課題の発見ができた。

(4) 今後の課題

地域住民の方と学生の「つながり」をつくりたいと、多様な活動を発案し、地域に出向いた取り組みを継続できた。今後の課題は、住民の方との「つながり」がさらにひろがることを目的に多様な年齢層の人や人数が増えるような活動の仕方を検討していくことである。

3) UOK 手話サークルの活動

「UOK 手話サークル」は結成 5 年目のサークルで、令和 5 年度より立志社中プロジェクトで活動している。本年度は、看護学部 18 名、社会福祉学部 28 名、健康栄養学部 3 名の計 46 名で、より多くの地域の方に手話を「言語」として理解してもらえるように取り組んでいる。

(1) 活動目標

- ① 継続して手話を学び続け、聴覚障がい者に対する理解を深めると共に手話の技術を習得する。
- ② 聴覚障がい当事者である講師の補助をすることで、聴覚障がい者とのコミュニケーション方法の特徴や教え方のコツを学ぶ。
- ③ 絵本を使用し、学生だけでなく、様々な年齢の方々に手話や聴覚障がい者の方と関わってもらう機会を提供する。

(2) 活動内容

① 手話の勉強会を実施

木曜日の 18 時より新入部員も増えたことで、ゲームを交えた手話を行うなどしながら楽しく、指文字や単語を学べるように勉強会を実施した。また、第 19 回全国手話検定試験に向けて、手話通訳者で卒業生の徳永旭さんを招き勉強会を実施した。その結果、2 級 2 名、3 級 1 名、4 級 5 名が合格した。

②紅葉祭で手話歌「カイト」を披露

「カイト」の手話歌の動画を撮影し、部員が気楽に参加できる環境を整えた。勉強会の時も練習を実施した。直接手話歌には参加しなくても、模造紙に歌詞を書いたりその模造紙を当日に持って参加してくれたりした。また、当日は交流を続けている高知県聴覚障害者協会青年部の方も一緒に参加してくれたことで盛り上がる事ができた。

③聴覚障がい者や手話通訳士による講演会

手話の歴史などを踏まえた講演や、聴覚障がい者で防災士の資格を有する方から災害に対する備えや災害時の聴覚障がい者への対応などについて講演いただいた。手話通訳士の方からは、「手話通訳士になったきっかけや手話通訳士の役割・活動についてお話を伺った。また、講師の方がいらしたときは、司会なども担当し手話の技術をあげるように努めた。これらの講演会は地域の方にも多数参加してもらうことができた。

④手話の普及活動

10月19日イオンモール高知で開催された体験型イベントふくしフェア 2024 では、約 1,000 人の方に手話での挨拶や指文字での名前を体験してもらった。なかには、昨年も参加し、その時覚えた手話を披露してくれた子どももいた。また、こども食堂などで手話による「本の読み聞かせ」を行い、子どもの時から手話に親しんでもらえるように努めた。12月26日には、高知県手話言語条例が施行され、そのPR動画である「手話ではなそう」防災編～高知県立大学手話サークルのみなさんといっしょに～に手話サークルの学生が登場し手話が言語であることをPRした。

⑤その他

「中央地区社会教育委員連絡協議会研修会講師」「スマイリング交流」「ボランティア研修会」「高知県聴覚障害者協会青年部交流会」などに参加した。

(3) 活動評価

手話の技術の向上については、検定試験に合格しただけではなく、積極的に勉強会に参加することや手話歌に取り組む姿勢が伺えたことで手話を学ぶ機会を多く得た。そのようなことから目標①②は達成できたと考える。また、目標③についても、ふくしフェア 2024 で手話コーナやこども食堂での手話による「本の読み聞かせ」などで幅広い世代の方に手話を身近に感じてもらうことができたと考える。また、本年度は計画していた活動以外に講義依頼や高知県手話言語条例PRの動画への参加なども行い、手話を地域の方に知ってもらうきっかけづくりに貢献できたと考える。

(4) 今後の課題

立志社中として2年目であったが、昨年度以上の活動ができた。しかし、学外での活動となると参加する部員が少なく、限られた部員となっている。まだ、手話を勉強中である部員も多く、その部員が継続して手話を学べる環境を継続して行くことで、学外での活動に参加できるように努める必要があると考える。

来年度は、高知県手話言語条例が本格的に開始となるため、地域の方に手話を「言語」として理解してもらえるように積極的に関わっていきたいと考える。

10. 学生の課外活動

1) ボランティア活動への支援

高知県立大学看護学部では、教員と学生が積極的に地域社会のボランティア活動に参加している。教員2名がボランティア委員として、学生のボランティア活動を支援・促進することで、学生の人間や社会への関心を高め、さらに主体性を育むようにしている。ボランティア委員はまた、ボランティアを募集する機関・団体と学内教員との橋渡しを行っている。

今年度は、高知医療センターでのボランティア活動が再開となった。ボランティア委員は高知医療センターとの活動調整として、活動再開に合わせて事前学習環境を整え、学内演習を実施した。連絡協議会の参加と並行し各機関との調整を重ね、11月から学生の活動が開始となった。例年の高知県小児糖尿病サマーキャンプでのボランティアの募集や、ボランティアを行う際の保険への加入の支援も行った。以下、今年度のボランティア活動への支援について報告する。

(1) ボランティア活動参加前の学生への支援

① 学内ボランティアオリエンテーション

- ・看護学部が行っているボランティア活動について、書面と Moodle を用いて紹介した。ボランティア活動の紹介には、過去の活動の様子なども含め、活動内容が容易にイメージできるように作成した。

② Moodle を用いた事前学習と学内演習

- ・学内演習の事前学習として、ボランティアガイダンス資料、車いすの移乗・移送に関する資料と動画、視覚障がいをもつ人の歩行介助に関する資料などを Moodle 掲載した。
- ・学生は学内で車いすの実技演習や視覚障がいをもつ人へのガイドの実際について、ガイドする側およびガイドを受ける側の状況を体験型の演習を通して学んだ。演習後は、学生にチェックリストを用いて振り返り、学びや感想を Moodle 入力してもらった。

③ 高知医療センターでのガイダンス（10月）

- ・高知医療センターの概要やボランティア活動紹介などの講義と院内見学に参加してもらい、ボランティア活動先について理解を深め、活動に向けて準備を整えた。

(2) 高知医療センターでのボランティア活動

① 活動の実際

- ・高知医療センターの病院ボランティア「ハーモニーこうち」への参加は、花壇の整備や受付玄関前の清掃などの活動であった。機関の担当者と連絡をとりながら、学生が主体的にボランティア活動に参加できるように支援した。

② 活動期間と募集方法・参加状況

- ・活動期間は11月～1月であった。募集方法は、Moodle から活動内容と時間をアナウンスし募集を募った。その結果、11月5名、12月5名、1月3名の計13名の参加であった。

(3) ボランティア活動支援の評価と今後の課題

- ・Moodle を活用することにより、学習者は自分の時間の中で学習できる環境を整えることができた。①のオリエンテーションでその場で Moodle 登録を呼びかけ全員の登録ができたため、それ以降、タイムリーに情報発信を行えた。学内演習は、事前学習で得た知識を実際に体験することで、教員は学生の状況を理解でき、学生が態度や技術について学びを深めることができた。
- ・教員が各機関と連絡をとり、情報を共有することで学生の活動参加に向けて、必要な準備を整えることができた。今年度は科目等の履修のため学生のボランティア活動が限定的であった。しかし、高知医療センターにおける今年度のボランティア活動が段階を踏んでいる状況をみると、各

機関にご負担をかけることがない範囲で学生の現地での活動をご支援いただきました。次年度は学生の積極的な参加をよびかけ、主体的な活動の支援を行っていく。

2) 地域における活動

(1) 室戸ボランティアリーダー

2021年より本学のサークル団体として登録された室戸ボランティアリーダーは、県内の「国立室戸青少年自然の家」や「高知県立青少年センター」にて教育事業に参加する子どもたちのキャンプや自然体験のサポートを行っている。今年度も、リーダートレーニングの企画運営、レクリエーションや実際に行われる体験プログラムを学び、「子どもたちのためにどうすれば良いか」を考え、学生同士で相談し合いながらサークル活動に取り組んでいた。学生同士の交流会、リーダー養成講座の企画や開催を例年通り年間5回実施した。また、小学4～5年生の参加者を対象としたボランティア活動は年間17回開催することができた。小学生を対象とした自主企画を冬に1泊2日で計画した。自主企画ではオリジナルで考えた「遊び」を工夫し提供するなど、子どもたちが安心・安全に活動できるような地域での取り組みへの貢献をおこなった。

今後も、看護学部では、課外活動において報告や相談を受けながら、支援を継続していく。

3) 高知県立大学災害看護学生チーム(SIT)

高知県立大学災害看護学生チーム（以下、SIT）では、令和6年1月に日本DMAS（日本災害医学会学生部会）のメンバーとして能登半島地震のあった石川県庁に入って活動した1名（3回生）をリーダーに、学内での活動を継続した。前期は代表の3回生が引き続き定例の勉強会（災害医療の基礎知識、など）の運営を行ったが、2回生の中で代表をとる学生がいなかったこともあり、後期は1回生の中で熱心に活動推進に取り組むメンバーによって、活動が引き継がれた。大学祭では2年ぶりに、災害医療に関する展示ブースを設け、簡単なトリアージ講習や、段ボールで災害現場を再現したコーナーではトリアージ体験なども主催した。学外から訪れた高校生や子供たち、また医学生や医療関係者と思われる人たちとも熱心に意見交換を行なう経験ができたことで、1回生にとっても、社会とのかかわりを通じた、災害医療の啓発について、意識が高まったようである。

学内での活動を含めて、今後の活動については模索が続いているが、まずは母体ともいえる日本DMASの活動に積極的に参加するメンバーを増やすこと、日本DMASでの活動を通して、ひろく仲間や情報をひろげることには力を入れている。



【大学祭の展示】

鳥味行きのバスが事故で

大変なことに！

中にいる傷病者をトリアージ！

4) イケあい地域災害学生ボランティアセンター

イケあい地域災害学生ボランティアセンター（以下、イケあい）では、外部顧問の山崎水紀夫氏が1月の能登半島地震の被災地である輪島市に災害ボランティアセンター立上げ支援に入っていた。石川県は、看護学部にも出身学生は数名おり、なんとか現地のボランティア活動に参加できないものかを模索した。その結果、5月の連休中にまず3回生3人が先遣隊として輪島市の災害ボランティアセンターに行き、活動の傍ら、輪島市の避難所・仮設住宅の支援を任されているJOCA（公益社団法人 青年海外協力協会）の現地リーダーとつながることができた。

その後、本格的な仮設住宅への移行が進み始めた時期をみはからって、9月10日（火）～14日（土）、17日（火）～20日（土）の2回に分けて、学生5名（計10名）と教員1名によるボランティアグループを結成し、支援活動を行った。活動に当たっては大学後援会やしらさぎ会、看護学部同窓会からの支援をいただくことができたため、安全な場所での宿泊確保や、レンタカーの機動力を生かした小規模避難所でのお茶会活動などを行うことができた。参加したのは、前半は看護学部と社会福祉学部の1回生中心の5名、後半は看護学部の1～3回生5名であった。活動は主に、仮設住宅にある集会所を借りて、午前中は体操やボッチャで身体を動かし、午後からはお茶会形式のハンドマッサージや蒸しパンづくりなどを行って、集まって下さった方々同士の交流を深めた。

彼らは何をするにも初めてであったが、回を重ねるごとに積極的となり、「誰かのために」「その方々のために」何かをすることの手ごたえを学んでいたように感じる。その後、高知に帰った後も、地域行事で募金活動を行ったり、高知からでもできる支援活動を行っていた。高知－輪島間は、JRを乗り継いで往復できるギリギリの距離であり、後援会からの交通費の支援や、活動の準備には現地のJOCAからも多くのご協力をいただくことで実現できたと考えるが、こうした実際の活動経験は、学生にとっても今後の大きな糧となることを信じたい。

この他、イケあいは2回生の代表と幹部を中心に、三里フェアの運営支援を行い、また高知市の助成金事業である、「地域で行われる防災活動に対する学生参加の補助金」なども活用し、いくつかの地域活動に参加している。大学祭では、初めて模擬店を出店し、販売したベビーカステラは、大好評であった。

コロナ禍を挟んで、ほぼ全員が先輩たちの行なう地域活動を知らない世代になってしまったが、また少しずつ、自分達の活動を確立して欲しいと考えている。



輪島市でボッチャは人気のコミュニティスポーツでした

11. 戦略的研究プロジェクト推進費による活動

テーマ 2：地域課題の解決を目指す研究

事業名「生活習慣と Multidimensional frailty の関連の解明・日本一の健康長寿県構想に寄与するエビデンス構想への取り組み」

研究代表者：立木隆広

共同研究者：島田郁子 廣内智子 上坂真弓 戸崎精 小澤若菜
川本美香 高橋真紀子 中井あい 加藤昭尚

1) 事業の趣旨

世界的に高齢化が進む現代、フレイル（frailty）は最も重要な健康問題の一つとなっている。近年、フレイルは、身体的フレイルのみならず多面的な（身体的、精神・心理的、社会的）フレイル（Multidimensional frailty）として捉える考えが浸透してきている。生活習慣の悪化は、フレイルのリスク要因として注目されている。しかし、生活習慣と Multidimensional frailty の間の関連についてのエビデンスは不足している。

そこで我々は、生活習慣と Multidimensional frailty との間の関連を検討するために地域在住者を対象としたコホート研究を立ち上げ、エビデンスを構築していくことを計画した。本研究では、地域在住者において、生活習慣と Multidimensional frailty との間の関連を明らかにし、この結果を基に新たなフレイル予防の立案を行うことを目的とする。

高知県では、「日本一の健康長寿県構想」の下で幾つかの事業が進められている。その一つとして「健康寿命の延伸に向けた意識醸成と行動変容の促進」があり、その中で取り組んでいるのがフレイル予防の推進である。日本一の健康長寿県構想の第 4 期 Ver.3 でのフレイル予防の推進の課題でも Multidimensional frailty の予防が必要と挙げられている。本研究は、この課題に対してどのような予防が必要であるかを探究するための基盤情報を先駆的に検討する挑戦的な研究であり、本研究成果をもって日本一の健康長寿県構想に寄与することを最終目的としている。

2) 方法

本事業は、生活習慣と Multidimensional frailty との間の関連を検討するための地域在住者を対象としたコホート研究のベースライン研究として位置付けた。研究デザインは横断研究とした。対象は地域在住 40 歳以上の日本人とした。説明指標を生活習慣とした。結果指標は、Multidimensional frailty 及びその各要素である身体的、精神・心理的、社会的フレイルの有無とした。評価方法は、Multidimensional frailty 及びその各要素である身体的、精神・心理的、社会的フレイルの有無を結果指標、生活習慣を説明指標として、交絡要因を調整してロジスティック回帰モデルを用いて関連の評価を行う。

3) 令和 6 年度の活動

- ・調査の実施
- ・調査から得られた情報の整理

4) 令和 7 年度の活動予定

2 年間の情報を合わせたデータセット作成し評価を行う。報告書等をまとめ活動結果を公開する。

12. 看護学部ニュースレターの発行

看護学部では、平成 23 年度から、学生生活通信『fure-fure』を年 2 回発行している。保護者に郵送するとともに、看護学部ホームページ（広報物&映像）に掲載している。『fure-fure』という名称には、学生を応援する気持ちと、学生が誰かを応援できるようになる願いが込められている。学生一人ひとりの学びの過程を教員が見守り、個性を尊重した教育を大切に、人と人とのつながりを大切にする校風の中で、学生が力強く歩んでいる姿、エネルギー溢れる学生生活を伝えている。

令和 6 年度は 7 月に第 27 号、3 月に第 28 号を発行した。第 27 号では、令和 6 年 4 月より、学部長に就任した、大川宣容先生、4 月に着任したがん看護学の田代真理先生、精神看護学の畠山卓也先生からご挨拶の文章を寄せていただいた。また、基礎看護学の瓜生浩子先生より、新しいカリキュラムでスタートした看護実践能力開発実習 I についての具体的な内容と学生の学びの様子が紹介された。

各学年担当からは、入学時のガイダンスやバスハイクでの様子や課外活動、学内演習や卒業研究への取り組みの様子等、各学年がカリキュラムに応じて主体的に学び、キャンパスライフを楽しむ姿が報告された。

第 28 号では、長戸和子先生より、学生部長の立場から学生生活をサポートする部門と具体的な支援内容を紹介していただいた。続いて、異文化理解看護フィールドワークでインドネシアのガジヤマダ大学への短期研修および本年度に新設された **Nursing Skills Training Room** について報告している。さらに、学生の活動については、イケあい地域災害学生ボランティアセンターによる、能登半島地震被災地でのボランティア活動が紹介された。

各学年担当からは、学生がより専門的な知識や技術習得努力している様子や、臨地実習や看護研究に取り組みながら、ひとり一人が将来像を少しずつ描いている様子などが紹介された。

13. 高知県看護協会との連携－生涯学習の拠点としての役割

1) 看護協会役員および委員

本学の教員は高知県看護協会の役員および委員の役割を担っており、高知県の看護の質を高めるために各分野において活動を行ってきた。令和6年度は13名の教員が以下の委員を担当した（表1参照）。

表1 高知県看護協会役員・委員・受託事業担当者

役員・委員名	教員名
第1副会長	長戸 和子
常任委員会：研究学会委員会 理事	
常任委員会：認定看護管理者教育運営委員会 理事	
受託事業に係る検討会：新人看護職員研修検討会 委員長	
常任委員会：認定看護管理者教育運営委員会 委員	内川 洋子
常任委員会：災害看護委員会 委員	竹崎 久美子
特別委員会：地域包括ケア検討委員会 委員長	森下 安子
受託事業に係る検討会：在宅領域看護検討会 委員長	
特別委員会：訪看ST運営委員会 委員	森下 幸子
受託事業に係る検討会：保健師助産師看護師実習指導者講習検討会 委員	池添 志乃
受託事業に係る検討会：高知県ナースセンター運営協議会 委員	藤田 佐和
職能委員会：助産師 理事・委員長	嶋岡 暢希
特別委員会：3職能生きる力を育むいのちの教育検討委員会 委員	
特別委員会：地域包括ケア検討委員会 委員	
受託事業に係る検討会：高知県小児救急電話相談事業 委員	高谷 恭子
特別委員会：看護研究倫理審査委員会 委員	岩崎 順子
常任委員会：研究学会委員会 委員	高橋 真紀子
特別委員会：3職能生きる力を育むいのちの教育検討委員会 委員	徳岡 麻由
受託事業に係る検討会：在宅領域看護検討会 委員	井上 加奈子

2) 研修および講習会

(1) 認定看護管理者研修

本年度はファーストレベル研修が開催された。本学からは以下の4名の教員が講師として参加した（表2参照）。

表2 認定看護管理者研修担当者

科目	時間数	教員名
ヘルスケアシステム論Ⅰ「保健医療福祉サービスの提供体制」 「ヘルスケアサービスにおける看護の役割」	9	森下 安子
人材管理Ⅰ「看護チームのマネジメント」	6	内川 洋子
組織管理論Ⅰ「看護実践における倫理」	6	豊田 邦江
「レポートの書き方」	3	山中 福子

- (2) 高知県保健師助産師看護師実習指導者講習会：臨床実習指導者講習会
隔年開催のため、本年度は開催されなかった。

(3) 臨床看護研究基礎研修

本研修は、臨床における看護研究の必要性を理解し、看護研究に取り組むための基礎知識を習得することを目的に開催された。5名の教員が講師として参加した（表3参照）。

表3 臨床看護研究基礎研修担当者

研修名	時間数	教員名
看護研究の基礎知識	6時間	畦地 博子 高谷 恭子
研究計画の進め方	3時間	池添 志乃
看護研究における倫理的配慮	3時間	瓜生 浩子
看護研究論文(症例研究を含む)の書き方と発表	3時間	田井 雅子

(4) 高知県専任教員養成講習会

高知県専任教員養成講習会が開催され、6名の教員が講師として参加した（表4参照）。

表4 高知県専任教員養成講習会担当者

科目	時間数	教員名
「専門領域別看護論演習」	3時間	内川 洋子
「専門領域別看護論演習」 家族看護学	3時間	長戸 和子
「看護教育方法論」 看護学実習の指導体制と連携	3時間	大川 宣容
「看護教育方法論」 看護学実習における教授活動 看護学実習に向けた準備	3時間	嶋岡 暢希
「看護教育方法論」 看護実習における教授活動 実習オリエンテーション、看護実習中の学生支援および事故防止対策	3時間	高谷 恭子
「看護教育方法論」 看護学実習カンファレンス	3時間	田井 雅子

(5) 高知県看護協会の教育プログラムにおける講師

高知県看護協会が主催する看護職員現任者を対象とした教育プログラムにおいて、8名の教員が講師として参加した（表5参照）。

表5 現任者を対象とした教育プログラム担当者

研修名／内容	時間数	教員名
臨床倫理の4分割法による事例検討 ～臨床のモヤモヤの解決と患者にとっての最善とはなにかを考える～	3時間	豊田 邦江
会議・カンファレンスでの発信力を高める研修	3時間	池内 香
一般病院における精神疾患対応向上研修 よく見られる状態像と対応方法	6時間	畠山 卓也 池内 香
（オンライン研修）令和6年度 医療的ケア児等支援者養成研修 令和6年度高知県医療的ケア児等支援者養成研修・医療的ケア児等コーディネーター養成研修プログラム	1.5時間	田之頭 恵里

・総論 医療的ケア児等の地域生活を支える医療的ケア児等のコーディネーターに求められる資質と役割 ・支援に必要な概念		
(オンライン・集合研修) 令和6年度 医療的ケア児等コーディネーター養成研修 令和6年度高知県医療的ケア児等支援者養成研修・医療的ケア児等コーディネーター養成研修プログラム ・総論 医療的ケア児等の地域生活を支える医療的ケア児等のコーディネーターに求められる資質と役割 ・支援に必要な概念	1.5時間	田之頭 恵里
令和6年度 医療的ケア児等のための看護技術研修	3時間 3時間	田之頭 恵里
「助産倫理」 新人助産師合同研修 【公開講座】	3時間	嶋岡 暢希
施設-在宅を支援する看護師育成研修 ・施設-在宅における療養者と家族への支援（実践）	3時間	井上 加奈子
・在宅への移行期にある事例のケア検討	5時間	井上 加奈子
施設-在宅を支援する看護師育成研修シンポジウム	3.5時間	森下 安子

(6) 地域災害支援ナース育成研修

高知県看護協会の地域災害支援ナース育成研修は、令和6年度で12年目となる。

基礎編4回の内3回（高知市・土佐市・南国市）の開催を支援し、看護職計102名の参加を得た。残りの1回は、幡多支部で地元の看護職同士で自主開催されたもので、今後もこうした、近隣の人材で本研修が開催できるようになるよう、支援していきたいと考えている。（表6参照）

また実務編では、これまでどうしても医療トリアージの実技研修の人气が高く、開催が難しかった「福祉避難所編」を開講することができ、看護職45名の参加を得た。福祉避難所に関する正しい理解や、様々なタイプの災害時要配慮者があることの基本的理解。また一般避難所を含む避難所対応の中で最近注目されているトイレの問題についても、汚物の処理方法や感染対策などに関して、理解を深めた。

昨年まで対面で開催していた『受援ガイドライン研修』については、研修画像を高知県看護協会のホームページに上げてもらう、オンデマンド視聴ができるようにしてもらった。しかし1時間の研修でも有り、再生回数は伸びていないことから、もう少し視聴しやすい形式を検討する必要があると考えている。

その他、公開講座的な「フォローアップ研修」として、能登半島地震における石川県看護協会の活動や七尾市地元病院の受援状況について当事者から話を聞く研修会を企画し、80名の参加を得た。この研修からは、県協会の災害対策委員は発災後に看護協会に詰めて、災害対応を行う必要性があることなどについて語られ、高知県看護協会としても、現在各地区理事からのみで構成されている災害対策委員の編成について、検討の余地があることが示唆された。また七尾市で実際に県外施設からの応援を多く受け入れた病院の看護部長さんには、研修会の後、本県で作成している『受援ガイドライン』についても見ていただき、意見を伺った。これを踏まえて、次年度は改定を加えることとなった。8月には日向灘を震源とする最大震度6弱の地震が発生したことで、初めて「南海トラフ地震臨時情報」が発表された。高知県看護協会における災害看護対策についても、より具体の準備が迫られている所であり、今後も委員会活動の支援を行っていく必要がある。

表 6 地域災害支援ナース育成研修担当者

科目	時間数	教員名
地域災害支援ナース育成研修【基礎編】主催：高知南・東地区支部	3 時間	竹崎 久美子
地域災害支援ナース育成研修【基礎編】主催：東部 1・2 地区支部	3 時間	竹崎 久美子
地域災害支援ナース育成研修【基礎編】主催：吾川・佐川・須崎・窪川地区支部	3 時間	竹崎 久美子
地域災害支援ナース育成研修【実務編】主催：高知県看護協会 福祉避難所編	3 時間	竹崎 久美子

14. 各領域の活動

<がん看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

がん看護学領域では、看護相談室事業として、地域の看護職や大学院看護学領域の学生を対象に、がん看護の質向上を目指した「質の高いがん看護実践を検討する会」（以下、ケア検討会）を開催してきた。新型コロナウイルス感染拡大以降、参加者が個別にオンライン参加する方法で開催してきたが、令和5年度より高知県内3ヶ所（高知県立大学池キャンパス・高知県立あき総合病院・高知県立幡多けんみん病院）のがん看護専門看護師の協力を得て Web でつなぐ、サテライト型ケア検討会に変更し、今年度も継続した。令和6年度の年間テーマは「皆で考えよう“認知症をもつがん患者への看護” Part2ーがん患者のACPをいかに支援するかー」で、がんと認知症を併せもつ困難事例に対する支援を検討した。

【第1回】

テーマ：認知症をもつ妻との在宅療養を希望する高齢がん患者への在宅移行支援

日時：令和6年6月8日（土）13:00～15:00

場所：メイン会場；高知県立大学池キャンパス、安芸会場；高知県立あき総合病院、幡多会場；
高知県立幡多けんみん病院（参加者は希望する会場で参加）

参加者：3会場で合計43名参加（看護職者37名、大学院生3名、本学教員3名）

【第2回】

テーマ：家族の希望でがん治療を継続する認知症をもつ高齢がん患者への支援

日時：令和7年1月25日（土曜日）13:00～15:00

場所：メイン会場；高知県立大学池キャンパス、安芸会場；高知県立あき総合病院、幡多会場；
高知県立幡多けんみん病院（参加者は希望する会場で参加）

参加者：3会場で合計39人参加（看護・福祉職者34人、大学院生1人、本学教員4人）

2) リカレント教育

がん看護学領域では、がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、大学院修了生のネットワークづくりの充実を図ることを目的として、がん看護学領域修了生の会“アストラルの会”を運営している。今年度も、Web 会議システムを用いた学習会を2回開催し、事例を通してがん看護専門看護師としてできる支援や、組織のニーズに応じた活動の在り方を検討した。今年度より、参加者全員による実践・近況報告の時間を設け、ネットワークづくりの活性化を図った。

【第1回】

テーマ：倫理的課題のある事例への直接介入のタイミング

事例提供者：がん看護専門看護師 野瀬 智代 氏

日時：令和6年8月3日（土）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：14名（修了生13名、本学教員1名）

【第2回】

テーマ：肺がん・脳転移を有する患者・家族のアセスメントと支援

事例提供者：がん看護専門看護師 今井 ユミ 氏

日時：令和6年12月21日（土）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：17名（修了生16名、本学教員1名）

3) がん看護学特別講義

がん看護学特別講義では、がん看護学領域の修了生が後輩である大学院生や修了生を対象に、修了後のがん看護専門看護師としての役割開発のプロセスや日頃の実践活動について語る機会を提供している。

テーマ：がん看護専門看護師の実践と役割開発

講師：独立行政法人地域医療機能推進機構 九州病院 近藤 恵子 氏（8期生）

日時：令和6年9月15日（日）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：13名（本学大学院生4名、修了生8名、本学教員1名）

内容：がん看護専門看護師として認定後から現在までの15年間、2つのがん診療連携拠点病院においてどのような活動を行ってきたのかご講義いただいた。自らが取り組んできた課題や役割開発を日本看護協会の“CNS キャリアラダー”に沿って整理し、変革推進者としてのモデルを示された。大学院生は、がん看護を主軸に組織改革や治療方法の改善にもつなげる姿勢に刺激を受け、自分たちが将来どのように専門看護師としての歩みを進めていけばいいのか多くの学びを得ていた。

4) がん教育外部講師派遣事業

令和5年度に施行された第4期がん対策推進基本計画において、がん教育・がんに関する知識の普及啓発は第3期に続いて課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが継続されている。高知県では、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、外部講師派遣事業が行われている。今年度は、4名の教員が7カ所の小学生や高校生および教職員を対象にがん教育を実施した。

(1) 日高特別支援学校高知しんほんまち分校

月日：令和6年9月9日（月）

対象：高等部2年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田代 真理

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

(2) 山田特別支援学校

月日：令和6年9月11日（水）

対象：高等部1年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田代 真理

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがん、がんと生きるに関する授業

(3) 佐川町立黒岩小学校

月日：令和6年11月15日（金）

対象：小学校5、6年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんについて知り、病気に負けないからだづくりについて考えるに関する授業

(4) 中土佐町立久礼小学校

月日：令和6年11月21日（木）

対象：小学校6年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 豊田 邦江

内容：がんについての基礎知識、たばこがん、がん検診の大切さに関する授業

(5) いの町立吾北小学校

月日：令和 6 年 12 月 16 日（月）

対象：小学校 5、6 年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんを通して健康や命の大切さを学ぶに関する授業

(6)高知市立布師田小学校

日時：令和 7 年 1 月 20 日（月）

対象：小学校 6 年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 豊田 邦江

内容：がんについて学ぼうに関する授業

(7)香南市立夜須小学校

日時：令和 7 年 2 月 6 日（木）

対象：6 年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 山西 亜紀子

内容：がんの基礎知識、がんと生きる、がんと心のケア、がんに罹患して感じたことに関する授業

2. 研究活動

がん看護学領域では科学研究費助成金を受けて、藤田が研究代表者の「外来治療する高齢がん患者を支える協働型包括的機能評価に基づく統合ケアモデルの開発（基盤研究 B）」に各教員が共同研究者として、継続して研究活動に取り組んだ。また、「高齢がん患者への緩和ケアと認知症ケアに統合モデルの開発（基盤研究 B）」について、第 39 回日本がん看護学会学術集会で発表を行った。がん看護学領域のケア検討会については「サテライト型『質の高いがん看護実践を検討する会』』についての取り組みと評価」のタイトルで、高知県立大学紀要看護学編に投稿した。

3. 活動の評価

ケア検討会では、南北に長い高知県の看護職がより参加しやすい環境でがん看護を学び、地域の看護職者と交流することができるよう、昨年度よりサテライト型ケア検討会を継続している。今年度は、参加対象を訪問看護ステーションや地域包括支援センター、老人保健施設、在宅診療所、医療ソーシャルワーカー、ケアマネジャーなど施設・職種ともに拡大し、多くの参加を得た。増加する認知症をもつ高齢がん患者に対し、多職種・多施設の実践家が対面で意見交換することで支援の視点が広がり、その後の地域連携にもつながっているとの意見が聞かれている。

リカレント教育のアストラルの会では、がん看護専門看護師の認定更新を終えた修了生に事例提供を依頼することで負担軽減を図るなど、会則変更を支援した。修了生同士の活発な意見交換や励ましは、新たな気づきや課題を認識する機会となり、自信を獲得する場となっていた。

4. 次年度の課題

社会貢献活動のケア検討会については、今後も Web 環境などの課題を改善しながら、高知県の看護職のニーズを踏まえた会の運営にとりくんでいく必要がある。ケア検討会参加人数の増加や対象職種の拡大をはかるとともに、各会場のがん看護専門看護師の連携を強化する必要がある。

リカレント教育では参加者が固定しており、新しい修了生だけでなく、様々な分野ですでに活動している修了生も含めて参加しやすい会の運営を支援していくことが課題である。

研究活動については、修了生の論文投稿や発表の支援を行うとともに、がん看護領域における新たな研究テーマへの取り組みが課題である。

＜慢性期看護学領域＞

1. 社会貢献活動

高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業（血管病調整看護師フォローアップ）の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が喫緊の課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

1) 地域の糖尿病重症化予防を推進する連携体制の強化

県下 8 つの参加病院と 6 つの福祉保健所を、安芸、中央東・高知市、中央西・高幡、幡多の 4 ブロックに分けて、地域の糖尿病重症化予防を推進する連携体制の強化支援策を講じた。血管病調整看護師が地域の課題に目を向け解決に向けた活動を行えるよう、「基幹病院合同連絡会議」において、第 8 期高知県保健医療計画のアウトカム指標を視野に入れた課題・成果の可視化、課題抽出と対策を協議する方法を話し合えるよう支援した。また、「ブロック単位の事例検討会」において、重症化ハイリスク者の抱える問題の特徴と地域の支援体制づくりを話し合えるよう支援した。これらの支援は、次年度に向けて血管病調整看護師が地域の中で主体的かつ自律的活動を行えることを目的に実施した。会議への参加者は、8 病院の血管病調整看護師、福祉保健所、市町村保険者、高知県保健政策課担当者、事業担当の本学教職員であり、「基幹病院合同連絡会議」の開催は 5 回、延べ 177 名の参加、「ブロック単位の事例検討会」の開催は 3 回、延べ 84 名参加があった。

2) 公開講座への参加

高知県の主催で「地域における医歯薬連携の促進を目指して」をテーマとして、オンライン研修が開催された。本公開講座は、高知県糖尿病重症化予防プログラムに関係する保健医療従事者を対象としており、事業担当教員も参加し、各地域の糖尿病医療と歯科連携における現状と課題を共有した。

プログラム：

- (1) 高知県の糖尿病重症化予防の取り組みについて
- (2) 令和 6 年度診療報酬改定で示された糖尿病医歯薬連携への期待
- (3) 地域単位での情報交換

2. 次年度の課題

令和 6 年度で高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業は終了するが、血管病重症化予防の現状と課題、及び効果的なケア活動への理解を深められるよう、血管病調整看護師のケア調整活動をテーマにした学習機会をリカレント教育やケア検討会で提供し、高知県血管病調整看護師への後方支援を継続する。

＜急性期看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質を高めることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。昨年度と引き続きケア検討会のテーマを「救急・集中治療領域における緩和ケア」とし、2回開催した。

第1回は、2024年6月11日に対面＋オンラインで開催し、参加者は32名であった。Stanford A型の急性大動脈解離で緊急手術後、せん妄となった事例について検討した。緊急手術による影響、現実認識ができていないことによる不安や恐怖、面会制限による孤独感などの心理的苦痛があることなどについてディスカッションし、患者の身体的苦痛の緩和だけではなく、社会的、心理的苦痛の緩和の重要性や緩和ケアとしての介入について振り返った。

第2回は、2025年2月13日に対面＋オンラインで開催し、参加者は13名であった。尿路感染症による敗血症の事例について検討した。急激に全身状態が悪化する患者に医療者としてどのように関わるか、目の前で患者の状態が悪化していくことに対する看護師の苦悩や全身状態が悪い中での緩和ケアを実践することへの困難さについて共有した。

第1回、2回ともクリティカルケア看護の中で重要視されているPICS、せん妄を中心としたミニレクチャーも行ったことで、日々実践している看護の振り返りにもつながった。

2) リカレント教育

(1) 専門看護師認定審査への支援および修了後の継続学習

今年度はオンラインにて専門看護師認定審査に向けた相談会を2回開催し、のべ2名の修了生が参加した。

また、急性・重症患者看護専門看護師（CCNS）の高度な看護実践を検討する事例検討会を4回開催し、のべ9名の修了生が参加した。現在CCNSとして活躍する修了生が事例を提供し、高度な看護実践について他の専門看護師とともにディスカッションすることを通じて、事例をまとめ、その成果を日本クリティカルケア看護学会学術集会で発表した。

2. 研究活動について

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費や外部研究機関の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

2020年度から「ICUにおける人工呼吸器装着患者の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」（研究代表者：神家ひとみ）、2021年度から「クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー育成プログラムの開発」（研究代表者：大川宣容）、2023年度から「高齢消化器がん患者の機能変化と生活の融合を目指した周術期回復支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）、「高齢者股関節手術前の運動・認知介入による術後せん妄予防の検討」（研究代表者：村川由加理）の研究に取り組んでいる。他領域教員との共同研究として、2023年度から「Transitionを基盤としたICU看護師の成長を導く支援プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容、神家ひとみ、森本紗磨美）に取り組んでいる。研究成果の公表は、学会発表2件、論文投稿1件であった。

さらに、他機関の共同研究として、「家族との協働型エンドオブライフケア実践能力を高める看護遠隔教育プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容）、「e-ラーニングによる介護者のためのエンハンスメント・プログラム活用の在宅療養支援」（研究分担者：大川宣容）、「高齢在宅療養者の急変対応スキル獲得に向けた訪問看護師遠隔教育プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容）に取り組ん

でいる。

今年度は卒業生への研究支援として 2023 年度看護研究（指導教員：村川由加理）を第 44 回日本看護科学学会学術集会で発表した。

3. 大学院関連

新たに 2 名の急性・重症患者看護専門看護師が誕生した。

4. 評価および次年度の課題

昨年度よりケア検討会も修了生との事例検討会もオンライン＋対面のハイブリッド方式で開催した。ハイブリッド開催により、高知県内の看護師も参加しやすくなり、さらに県外からの参加者も得ることができた。

また、今年度はケア検討会開催の呼びかけ時期の工夫や実習関連施設へのご案内、院生や修了生と臨床看護師とのつながりから事例検討会の広報を行い、参加者を広く募ることができた。次年度も引き続き、今年度実施した広報、運営方法を取りながら、より効果的な広報、運営方法を検討していく。

在学中からのアプローチにより、卒業生の看護研究の成果発表に向けて支援ができた。引き続き研究成果の公表に向けて取り組みを継続する。

＜小児看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 小児看護学領域の大学院在学生・修了生の交流会

本年度の交流会は、対面とオンライン会議システムを活用したハイブリッド形式とし、7月21日(日)に開催した。大学院在学生、修了生ならびに教員を含めた13名が参加し、現在取り組んでいることなどの近況報告を行った。修了後の活動に関する在 student からの質問に対して、修了生から活動の実際や組織から求められる役割に関する紹介があり、難しいと感じることや課題への取り組みなどについても具体的に意見交換を行うことができた。その他、修了生が継続して取り組んでいる疾患をもつ子どもの体調管理に関する研究の紹介もあり、参加者と意見交換を行うことができた。交流会を通して、修了生と在 student とのネットワークが広がり、交流や情報交換の場としても有効であったことから、次年度も開催していきたい。

2) 小児看護学領域事例検討会

修了生や大学院在 student を対象として、例年、年3回程度開催していたが、感染症のリスクが続いていることや、オンライン会議システムでは個人情報漏洩の危険があるため、実施を見送った。今後の開催方法について検討していく予定である。

3) 小児看護学領域特別講義

講師：永井友里氏（前高知医療センター 小児看護専門看護師）

日時：2025年3月4日（火）13時～16時

場所：高知県立大学看護学部3階 C310 講義室

参加者：10名（大学院在 student 7名、教員3名）

小児看護専門看護師に必要な実践能力として6つの機能の実際・展開について、今年度は実践機能、調整機能、倫理調整機能に焦点を当てた活動の実際をプレゼンテーションしていただき、参加者とともにディスカッションを行う企画を実施した。具体的には、講師より専門看護師となるまでの活動の実際をはじめ、専門看護師としてキャリアを積み重ねる中で、多様かつ複雑な疾患とともに成長発達していく子どもたちに提供される最善となるケアの探求・継続の実現に向けた活動における判断基準や思考過程を説明された。参加者それぞれにおいて、授業で学んだことの意味を深く理解したり、実践演習での学びの強化や自身の課題の明確化となったり、専門看護師として将来属する組織の一員として活動する中で明確な目標を立てて実践能力を発揮していくイメージにつながる貴重な機会となった。

4) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援

毎年、高知医療センターすこやかAフロアと連携して新人看護師を対象とした教育支援を行っている。「けいれんの子どもへの対応」をテーマとし、新人教育の進捗状況に応じた部署のニーズに合わせてシミュレーション勉強会を行った。勉強会は2回開催し、それぞれ新人看護師と指導者である看護師と副科長が参加し、基礎的なけいれんの知識を学習するとともに、複数の場面を通してけいれん時の子どもの観察やケアの実際について参加者同士で意見交換を行った。次年度は、部署との連携体制を強化し、ニーズに応じた教育支援を実施していく予定である。

【第1回】2024年12月20日（金）17時30分～18時30分

場所：高知医療センター

参加者：6名（教員3名含む）

【第2回】2025年2月21日（金）17時30分～18時30分

場所：高知医療センター

参加者：6名（教員4名含む）

(2) 赤ちゃん同窓会

本年度も各種感染症の流行に伴い、開催中止となった。

(3) ナーシングカフェ：小児看護の魅力を語る会

本年度は、高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業の企画であるナーシングカフェとして、看護学部1回生から4回生を対象に、平井葵氏より小児看護の魅力についてパワーポイントを用いて30分間語っていただき、その後、参加者とのフリーディスカッションを30分間実施した。参加者それぞれが興味関心のある子どもに関する質問を行い、平井氏の考えを改めて教えてもらうことを通して、子どもたちの看護に携わる将来像をイメージしながら意見交換を行うことができた。

日時：2025年2月20日（木）14時30分～15時30分

場所：高知県立大学看護学部2階C215

参加者：9名（4回生4名、3回生2名、1回生1名、教員2名）

5) その他の活動（ボランティア活動）

(1) 高知新聞社主催の「赤ちゃん会」看護学部学生の有償ボランティアのサポート

日時：2024年4月14日（日）8時～16時

場所：春野総合運動公園体育館

参加者：33名（4回生24名、3回生8名、教員1名）

「赤ちゃん会」では、生後3ヶ月から1歳6ヶ月までの子どもを対象に、身体測定や小児科医の診察、歯科検診、子育て相談などを行っている。2020年よりCOVID-19感染拡大のため一時中止となっていたが、今年度より再開されたため、看護学部の学生が有償ボランティアとして参加できるよう支援を行った。参加した学生は、看護師や助産師とともに子どもの身体計測や記録の介助、物品の補充や整理等を行い、子どもの成長発達を支える地域の取り組みについて理解を深めていた。

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

小児看護学領域では、各教員が研究代表者として、また共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「成人期に移行する心疾患の子どもと親の軌跡を支援する医療地域連携プログラムの開発」（研究代表者：高谷恭子 2023年 - 2026年）、「血液・腫瘍疾患の青年のSDMを支援する専門看護師の家族協働型実践プログラムの開発」（研究代表者：有田直子 2023年 - 2026年）。詳細は教員の活動、研究に関する報告参照。

また、他大学との共同研究、ならびに、科学研究費助成金以外の外部資金を得た共同研究にも取り組んでいる。

2) 修士論文・博士論文の公表への支援

令和 6 年度公表された修士論文、博士論文については以下に記す。

【博士論文】

- ・石橋かず代, 中野綾美 (2024) 青年期小児慢性疾患患者のセルフマネジメントにおける自立過程と影響する要因に関する文献検討, 高知女子大学看護学会誌, 49(2), 16-32.

【修士論文】

- ・佃勇輝, 高谷恭子, 中野綾美 (2024) 医療的ケア児を育てる親の南海トラフ地震に向けた準備性, 日本小児看護学会第 34 回学術集会, 大阪

3. 評価と次年度の課題

社会貢献活動については、本年度もオンライン会議システムを活用して、大学院修了生ならびに在学生、教員との交流を行うことによって、小児看護専門看護師の実践能力に関する情報交換を行ったり、研究活動の推進に向けた検討を行うなど、継続支援を実施することができた。また、小児看護学領域のみならず、他領域の大学院生も含めた特別講義を開催できたことによって、在籍中から専門看護師としての将来ビジョンを描きやすくする機会にもつながった。したがって、次年度はオンライン会議システムの活用と対面によるハイブリット形式を用いて、遠方の修了生や専門職者が参加しやすくなる事例検討会・特別講義を計画して、修了生・在学生の継続支援に取り組んでいく。

また、本年度は、臨地実習における学生の学びを確保するために、非常勤教員を迎えて臨地実習を展開できたことは、今後の病院施設と研究機関とのつながりを強化することや、それぞれの強みを活かした共同参画に向けた可能性の拡大になる機会を得た。よって、病院施設のニーズに応じた臨床実践能力の向上、看護実践モデル等の開発・検証に関する共同研究にも取り組んでいきたい。なお、研究活動については、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿に取り組んでいくとともに、各教員または共同研究として取り組んでいる研究活動の推進に力を注いでいくことが課題である。

<母性・助産看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

令和6年11月8日（金）に「回旋異常のケア」をテーマとして、Web 会議システムを用いた検討会を行った。参加者は20名で、県内外の開業助産師やクリニック、病院に勤務する助産師14名と、領域教員6名であった。回旋異常に関する事例を提供いただき参加者で共有後、各施設や個人の助産師が実践しているケアの情報交換を行った。昨今の女性の体の特徴を踏まえた回旋異常の予防方法や産婦の身体面だけでなく、精神面にに関わり産婦が安心してお産に向き合える様々な具体的なケアの内容についての共有が行われた。さらに書籍や文献から回旋異常についての機序やケアについても共有することができ、近年増加している回旋異常について多方面から考える機会となった。

2) 令和6年度母性・助産看護学領域交流会

令和6年5月24日（金）に、Web 会議システムを使用して交流会を行った。県内外の卒業生3名と領域教員5名が参加し、近況を共有した。

3) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース BLSO in 高知

医療センターを会場として令和6年11月2日に開催された。本事業は高知県内の救急救命士や医師、看護師を対象とし、病院外や救急外来での急な分娩の対応、産科救急の初期対応を学ぶ研修であり包括的連携事業として実施している。領域教員2名（嶋岡暢希・飯田悠花）がアシスタントとして参加した。

4) 高知県内小・中高校における「いのちの教育」出前講座講師

高知県看護協会より依頼を受け、11月に小学校3校計240名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。うち1校には領域教員2名（前田愛友香・徳岡麻由）の他、高知医療センター助産師1名、助産コース4回生3名と連携して運営した。12～1月には高校1校の各学年それぞれ計534名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。2月は小学校1校100名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。また、県教育委員会による外部講師派遣事業からの依頼により、特別支援学校1校、小学校1校計52名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。本学の出前講座への依頼により中学校1校6名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。

5) 高知県周産期医療施設の看護・助産関係者間の意見交換会

高知県内周産期医療施設の看護・助産管理者、高知県看護協会助産師職能委員等を対象に高知県周産期医療協議会副会長の永井立平医師を交えての意見交換会を令和6年3月14日に開催した（主催：高知県看護協会・高知県助産師会、会場：本学看護学部棟C220、出席者：29名）。企画、参加者との調整、運営に領域教員3名（嶋岡暢希・西内舞里・徳岡麻由）が携わった。

2. 学習会

母性・助産看護学に関する学習会（企画・運営：岩崎順子・徳岡麻由）を、Web 会議システムにて7回開催し、県内外の助産師、他大学を含む母性・助産領域教員が参加した。下記をテーマに、助産看護活動や先行研究を通じた意見交換を行った。

〔第1回〕日時：令和6年5月28日（火）17：30～18：30

テーマ：『助産師のキャリアとライフワーク』

- 参加者：5名
- [第2回] 日時：令和6年7月17日（水）18：00～19：00
テーマ：『包括的性教育①』
参加者 15名
- [第3回] 日時：令和6年9月10日（火）18：00～19：00
テーマ：『包括的性教育②』
参加者 9名
- [第4回] 日時：令和6年10月23日（水）18：00～19：00
テーマ：『絵本を通して伝える子育ての支援 ～ひかり文庫での活動報告～』
参加者 15名
- [第5回] 日時：令和6年11月20日（水）18：00～19：00
テーマ：『1人の助産師の働き方～総合周産期からクリニック、助産院、
アルバイト、にわとり飼育』
参加者 11名
- [第6回] 日時：令和7年1月29日（水）18：00～19：00
テーマ：『助産師トレーナーが行う身体的アプローチ～開業3年目を迎えて』
参加者：14名
- [第7回] 日時：令和7年2月19日（水）18：00～19：00
テーマ：『胎児期、新生児期からのベビーコミュニケーション術
～おなかの中から子育てしよう♪～』
参加者：14名

3. 研究活動

母性・助産看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。2021年度から「周産期医療施設における両親を対象とした妊産婦健診ケアモデルの開発と検証」（研究代表者：嶋岡暢希）、2022年度から「Family Confidence を高める乳児家族ハイブリッド型看護介入モデル開発」（研究代表者：岩崎順子）、2024年度から「学校で性教育を実施する助産師のコンピテンシー」（研究代表者：徳岡 麻由）の研究に取り組んでいる。

領域教員2名（嶋岡暢希・徳岡麻由）が高知県看護協会生きる力を育むいのちの教育検討委員会委員として高知新聞社「生命（いのち）の基金」助成金を得て「学校教員がとらえる中学生の自己肯定感」の研究に取り組んでいる。

4. 評価及び次年度の課題あるいは活動方針

本年度は、社会貢献活動、学習会、研究活動等を通じて、学外関係者とのネットワークが着実に広がり、県内の周産期医療に関する情報共有や意見交換が活発にされた。これらの活動によって、教育・研究・地域貢献をつなぐ活動基盤が形成されつつある。

次年度は、これまでのネットワークを活用し、教員自身の関心に基づいた実践や研究領域を明確化することで、地域課題に即した研究活動を計画的に推進していきたい。

＜老人看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 看護相談室（ケア検討会）

2024年6月11日（火）に「身体拘束最小化」について、Webで学習会とディスカッションを実施した。

2024年度の診療報酬改定で「身体拘束の最小化に取り組んでいるのか」入院医療全般に問われるようになった。そのため、まず「身体拘束最小化」とは何かについて学び、その後、参加（修了生4名と博士前期課程在籍の2名）と教員3名でディスカッションを実施した。病院で勤務する修了生から身体拘束を実施するときにジレンマに陥り躊躇する看護師もいるが、安全面の視点から実施を続ける看護師もいることがわかった。参加者からは身体拘束を実施した時は、早期に解除できるようにカンファレンスを実施することや身体拘束を最小限にできるような取り組みを実施していくことの必要性が話し合われた。

2) リカレント教育

研究の項、参照。

2. 研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的パッケージの開発」（2019～2024年、基盤研究C、研究代表者、竹崎久美子）に取り組んだ。本年度は、病院などでの認知症の疾患やケアなどの教育プログラムについて、教員だけではなく病院で勤務している修了生と一緒に検討をおこなった。

3. 教育的活動

1 回生のふれあい看護実習では、地域で生活する高齢者のイメージについて、実習前後の比較を実施した。実習前は身体的心理的社会的に脆弱なイメージを持つ学生が多かったが、宅老所での関わりの中で高齢者に対するイメージを好転的に捉えることができるようになり、「強み」に目を向けることができるようになった。

2 回生の「老人の健康と看護」「老人看護援助論」では、ふれあい看護実習の体験から疾患を持ちながら生活をする人として捉えるとともに、高齢者の特徴を踏まえた疾患のケアについて学ぶことができるように行った。グループワークを適宜実施したことで他の学生と意見を共有することができた。高齢者の「発達」という視点も組み入れながら授業を展開していった。

4 回生の老人看護総合実習では、老人の発達の視点や身体的視点、そして病態や地域生活など包括的に捉えることができるように、実習施設の協力を得ながらカンファレンスなどを通して実習目標に達することができたと考える。

4. 評価および次年度の課題

本年度は、ケア検討会が1回のみで開催となった。病院などへ広報活動不足が要因の一つであると考え。テーマとしては、今年の診療報酬改定により重要な内容であると考えられたが、臨床の取り組みを検討するには時期尚早の感があり、まずは先駆的な事例などについてもっと学ぶところからの企画が必要であったと考えている。今後は、広報活動や運営方法について検討していくことが必要である。研究活動については、本年度が最終年度であり教育プログラムを高知医療センターで講演することで成果をみせることができたと考える。次年度は学会等での公表を検討していくことが必要である。

<精神看護学領域>

1. 活動

1) 社会貢献活動

(1) 看護相談室（ケア検討会）

本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を4回実施した。

① 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年6月20日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、話題提供施設、Web 開催

参加者：11名(本学大学院修了生1名、本学卒業生1名、精神看護専門看護師7名、教員2名)

内 容：修了生が所属組織で取り組んでいる「精神科クリニカルパス（セルフケア OAT ユニット）」の紹介を行い、参加者間で検討するプログラム中心のコンサルテーションとして実施した。OAT ユニットは、精神科で実践している看護を可視化し、患者のケアに活用しようとする試みで、OAT ユニットの開発と実装に向けた課題を、参加者が実践事例を想定しながらディスカッションした。本会を通して、出てきた課題に取り組み、精神科救急病棟での導入に向け洗練化していくこととなった。

② 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年9月19日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：16名〈本学大学院生1名、本学大学院修了生1名、精神看護専門看護師10名、他大学教員1名、教員3名〉

内 容：「外部のリソースとして CNS 活動を実践する」をテーマに、CNS の役割について検討した。精神科病院の外部コンサルタントとして活動している専門看護師より、外部の組織に参入する際の配慮について話題提供され、参加者間で情報交換を行った。病棟のパワーバランスを考慮することや、CNS の見立ての伝え方を意識すること、依頼者とともに目標の共有化・明確化を図り成果を示すことなどについて、実践事例を交えてディスカッションを行った。

③ 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年12月19日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：12名〈精神看護専門看護師8名、本学修了生1名、教員3名〉

内 容：「CNS の抱える陰性感情にどう向き合うか」をテーマに、参加者間で意見交換を行った。ディスカッションを通して組織の状況や組織と CNS の関係性、CNS に対する組織の期待など、客観的な視点で対象組織をアセスメントすることができた。また、組織のなかでの CNS の立ち位置や役割を明確にすること、変革推進者（Change agent）としての CNS のあり方について考える機会となった。

④ 第4回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和7年3月13日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：11名〈精神看護専門看護師7名、小児看護専門看護師1名、教員3名〉

内 容：「精神看護 CNS の救急病床における役割開発を考える～認定から1年を振り返って～」というテーマで意見交換を行った。救命救急病棟において精神看護の専門性をいかにして発揮し、組織の強みを活かしたチーム・ビルディングを行っていくのかについて、CNS の役割と機能を参加者間で検討した。日常業務を通したモデリングの役割（教育的機能）、スタッフへの情緒的支援、相談、倫理調整等の役割につながる事が再確認できた。

(2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

第34回日本精神保健看護学会学術集会（国際医療福祉大学成田キャンパス；千葉県成田市）の開催に合わせ、精神看護学領域交流会を実施した。学会では、本学の修了生や教員によるシンポジウムやワークショップも開催され、精神科臨床における看護外来の専門性について参加者とともに考える機会となった。1日目の夜には精神看護学領域の交流会を開催した。対面での交流会は数年ぶりの開催となり、少人数ながら近況を報告しあった。次年度以降も、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考える。

(3) 精神科病院におけるボランティア活動

高知県内の精神科病院が行う催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、本年度も病院側からのボランティア募集がなく、活動は実施していない。次年度はボランティアの開催予定について病院側に確認をとり、学生のボランティア参加の可否については検討していく。学生が主体的に精神障害をもつ人との交流が持てるよう環境を整えていく。

2) 研究

(1) 教員の研究活動

精神看護学領域では、それぞれの教員が研究助成を受け、研究に取り組んでいる。「認知症の人と家族の伴奏を支援する家族看護援助モデルの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：田井雅子 2021-2024 年度)、「BPSD 緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護一介護協同介入モデルの作成」(科学研究費助成金 研究代表者：畠山卓也 2019-2024 年度)、「精神科高度実践看護師の行う外来看護活動の好事例を活用した看護外来支援モデルの構築」(科学研究費助成金 研究代表者：畠山卓也 2024-2027 年度)、「双極性障害をもつ人と家族へのメンタルヘルスリテラシー獲得・向上のための看護方略」(科学研究費助成金 研究代表者：池内香 2022-2024 年度)、「双極性障害をもつ人と家族による当事者参加型セルフモニタリングツールの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：池内香 2024-2026 年度)に取り組んでいる。

研究成果として、第34回日本精神保健看護学会学術集会にて発表した。また、前年度戦略研究として取り組んだものを第29回日本老年看護学会学術集会にて発表した。

(2) 大学院生・学部卒業生の学会発表支援

博士後期課程修了生の海外ジャーナル誌への投稿支援を行った。

博士前期課程修了生の第44回日本看護科学学会学術集会での発表支援、学会誌への投稿支援を行った。

2. 評価と次年度の課題

他施設との連携においては、各教員が教育研究活動を通して関係構築をしている。特に本年度は高知県立あき総合病院での新人指導看護師への支援を行い、教育研究活動のフィールドを

拡大している。今後も他施設や地域のニーズに関する情報収集を行い、教育研究活動をすすめていく。看護相談室においては、今年度も Web を用いた遠隔開催となった。全 4 回の開催となり、県内外から多くの専門看護師、修了生が参加した。修了生からの紹介で、他大学修了の精神看護専門看護師が参加することがあり、参加者は拡大している。また、今後も卒業生や修了生の学会発表、論文投稿等の支援を行っていく。

<家族看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

今年度は、臨床で出会うご家族へのケアについて地域の皆様と一緒に学び合うケア検討会として、地域の医療職や卒業生、修了生を対象にオンラインで開催した。

日 時：令和6年10月29日（火）18:30～20:30

参加者：卒業生1名、修了生5名、大学院生1名、地域の看護職7名、教員4名

事例検討：脳梗塞を発症後にDNARとなった患者の家族への関わりと支援

事例提供者：修了生

2) リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を実施した。年度当初に年間の開催計画を提示し、修了生から提供された事例についての事例検討や教員によるテーマに関する講義とディスカッションをオンラインで実施した。

事例検討会では、修了生から「がんターミナル期にある療養者とその家族の在宅ケアに関する事例」や「感染症により脳死状態となった子どもとその家族の支援」などの様々な状況や健康問題を抱える家族の事例や、実際の家族支援の状況を提供していただいた。

事例提供者に場面を語っていただき、参加者からの質問を通して家族の体験への理解を深め、事例家族への看護支援の方略を検討した。

【第1回】

日 時：令和6年5月28日(火)18:30～20:30

参加者：修了生3名、大学院生2名、教員5名

事例検討会：がんターミナル期にある療養者とその家族の在宅ケアに関する事例

事例提供者：修了生

【第2回】

日 時：令和6年6月18日(火)18:30～20:30

参加者：修了生3名、大学院生3名、教員5名

テーマ：家族の変化と看護1 役割の視点から

講 師：瓜生浩子

【第3回】

日 時：令和6年7月30日(火)18:30～20:30

参加者：修了生2名、大学院生3名、教員5名

事例検討：感染症により脳死状態となった子どもとその家族の支援

事例提供者：修了生

【第4回】

日 時：令和6年9月17日(火)18:30～20:30

参加者：修了生2名、大学院生1名、教員4名

テーマ：家族の変化と看護2 関係性の視点から

講 師：瓜生浩子

【第5回】

ケア検討会として開催

【第6回】

日 時：令和6年11月26日(火)18:30～20:30

参加者：修了生6名、大学院生2名、教員5名

テーマ：実践的に学ぼう！家族の思いを引き出すわざ

講 師：源田美香

【第7回】

参加者少数のため開催見送り

【第8回】

参加者少数のため開催見送り

【第9回】

日 時：令和7年3月4日（火）18:30～20:40

参加者：修了生6名、大学院生3名、教員5名

テーマ：実践的に学ぼう！家族の合意を促すわざ

講 師：長戸和子

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

家族看護学領域の教員それぞれが研究代表者として、また、共同研究者として科学研究費助成金を受けて引き続き研究活動に取り組んでいる。研究代表者として助成を受けている研究課題は、「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」（研究代表者：長戸和子、2020～2024年度）、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」（研究代表者：瓜生浩子、2020～2024年度）、「学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発」（研究代表者：源田美香、2020～2024年度）である。

このほか、研究成果として高知女子大学看護学会誌に原著論文1編、研究報告1編の論文投稿を行った。

3. 活動の評価

今年度は昨年度に引き続き、地域の専門職者を対象としたケア検討会を開催することができた。オンライン開催にすることで、県内外から多数の参加があった。今回は看護職以外の方もご参加いただき、事例提供者を中心に少人数グループでのディスカッションを取り入れて、全員が家族の生活など多角的な側面から積極的に意見交換を行うことができた。地域の専門職者にもこのような機会への参加ニーズがあることがわかった。

修了生対象のリカレント教育は、5回開催した。家族支援専門看護師の資格を有する修了生の参加は、事例の提供を通して自己の実践を振り返り、他施設の家族支援専門看護師と情報交換する機会となり、相互研鑽や情報交換の機会となっていた。また、家族支援専門看護師の資格取得を目指す修了生にとっては、高度実践看護師としての活動のビジョンや方向性を考える機会となっていた。そして、在学生にとっては、家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロールモデルを得る機会となった。昨年度と同様に、年度当初に年間計画を提示していたため、それぞれの予定や関心に合わせて参加することができたと考える。なお、12月と1月は参加申し込み者が少なく、開催を見送った。感染症の流行時期と重なっていたため、臨床にいる修了生は繁忙な状況から参加が難しかったものと考ええる。

研究活動に関しては、それぞれ、研究課題に個々で取り組んだが、互いの研究内容について共有

し意見交換する機会を持つことができなかった。

4. 次年度の課題

リカレント教育・ケア検討会は次年度も継続する。県外からの参加者や仕事終わりに駆けつけて参加する方が多かったため、今後も引き続き Web ミーティングツールを活用していく。開催時期については、経年の参加数を考慮しつつ次年度の年間計画を検討する。

研究活動に関しては、修了生の学会発表、論文投稿の支援に取り組むとともに、教員の研究力の向上を目指して、研究に関するディスカッションの機会を設けることや論文投稿の促進、修了生との共同研究などに取り組んでいく。

<在宅看護学領域>

1.社会貢献活動

1)ケア検討会

看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を2回実施した。看護職以外（言語聴覚士、ケアマネジャー）の参加もあり、テーマに沿って、職種を超えて意見交換を行うことができた。

①第1回

日時：令和6年7月11日(木) 18:30～20:30

開催方法：Web開催

参加者：14名

職種別：看護師13名(うち在宅看護専門看護師1名)、言語聴覚士1名

テーマ：神経難病を抱える壮年期在宅療養者の生活の変化に合わせた支援を考える

内容：

療養者さんの病状の進行や家族の会議状況の変化を見越しながら、在宅療養を継続するためのケアを検討した。病状の進行に合わせて、本人の望みが変わる場合もあるので、その時の選択肢を広げておけるような情報提供を行うことが求められていると再認識した。

また、ACPの必要性を支援者が意識していても、療養者本人は直面できないことがあるため、療養者本人のタイミングで意思決定できるよう関わる必要性を認識した。

②第2回

日時：令和7年2月19日(水) 18:30～20:30

開催方法：対面開催（本学共用棟D220教室）

参加者：21名

職種別：看護師11名(うち在宅看護専門看護師2名)、介護支援専門員7名、

メディカルソーシャルワーカー1名、社会福祉士1名、歯科医師1名、

テーマ：生活保護受給世帯において誤嚥性肺炎を繰り返す夫と妻の事例：

生活保護費の受給停止が招く課題

内容：

経済的な課題を抱えた療養者とその家族について、家族の歴史や現在の介護力をふまえながら生活の状況を整理し、安全や尊厳が守られない場合の対応方法や連絡先について共有した。家族員それぞれが望む生活を支えるために、まずはしっかりと信頼関係を形成し、行動の元になっている心理の理解の重要性を話し合った。また、多職種で療養者とその家族を支えるためのチーム形成について、それぞれの職種から意見交換をし、交流を深める場となった。

2)修了生交流会

日時：令和6年8月4日(日) 9:00～12:10

開催方法：高知県立大学大学院看護学研究科の在宅看護方法論Ⅲの授業に参加

参加者：修了生4名、教員3名

テーマ：「在宅看護における質改善にむけたCNSの役割と機能」

講師：平原優美先生（日本訪問看護財団常任理事）（在宅看護CNS）

内容：

大学院の授業ではあるが、修了生、教員が参加し学びを深めることができた。また、参加者間の交流の場となり、それぞれの活動の場での困りごとなどの相談の場ともなった。

2. 研究活動

1) 研究発表

①論文発表

日本看護シミュレーションラーニング学会誌に1件、Nursing Reportsに1件、JMA Journalに1件、Nutrition Research and Practiceに1件、BMC Cancerに1件、Social scienceに1件、Medicineに1件、PCN Reportsに1件、Psychiatry Internationalに1件の論文発表を行った。

②学会発表

第29回日本在宅ケア学会学術集会で3件、日本精神保健看護学会第34回学術集会で2件、第71回日本小児保健協会学術集会で1件、日本地域看護学会第27回学術集会で2件、第6回日本在宅医療連合学会大会で1件、第44回日本看護科学学会学術集会で3件、第39回日本がん看護学会学術集会で1件、日本家族看護第31回学術集会で1件、日本緩和医療学会第6回中国・四国支部学術大会で1件、日本家族看護第31回学術集会交流集会で1件の発表を行った。

日本在宅医療連合学会第6回地域フォーラム四国シンポジウムでシンポジストとして1件の発表を行った。

2) 活動中の研究

科学研究費助成事業(以下、科研)では、研究代表者として3件、研究分担者として6件に参画している。

また、金沢医科大学奨励研究1件、生命の基金より助成を受け1件の研究を行っている。その他、外部の大学と連携して1件の研究を行っている。

3. 評価

ケア検討会は2回開催することができた。1回目はWeb開催で、移動の負担が少なく参加しやすいメリットがあった。2回目はコロナ禍以降5年ぶりの対面開催であり、どちらの開催方法もメリットがあるため、参加者の意見も聞きながら、有意義な会となるような運営に努める必要がある。また、いずれの回も看護職以外の参加があり、職種の専門性をもとにした意見交換を行うことができた。

研究活動では、多くの研究発表を行うことができた。一方で遅れがちな研究もあるため、定期的な進捗状況の確認や、研究活動促進に向けた取り組みが必要である。

4. 次年度の課題

1) 社会貢献活動

令和7年度に引き続き(1)ケア検討会の開催:2回、(2)修了生交流会、(3)健康長寿研究センター事業の展開:①中山間地域等訪問看護師育成講座、②高知県介護職員喀痰吸引等研修、③入退院支援事業を実施していく。それぞれの活動においてまたは①、②においては、参加者人数を増やすことが次年度の課題である。活動に参加した方が、参加目的を達成し、自身の新たな知見・技術を獲得できるようなプログラム内容を検討する必要がある。

2) 研究活動

在宅看護領域教員が主担当・分担している科学研究費助成事業(以下、科研)を滞りなく進めていくことが課題である。また、終了している研究について、学会発表、論文投稿を進めていく。

＜地域看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 高知県保健師人材育成

詳細は、健康長寿センターにおける看護学部の活動、高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動を参照。

高知県保健師人材育成プログラムは、高知県健康政策部保健政策課と協働で取り組んでいる。集合研修は、新任期保健師、中堅期（前期）保健師を対象に行った。また、新任期保健師の人材育成に向け、プリセプター能力育成研修にも取り組んでいる。

管内市町村を対象とした新任期保健師研修会では、幡多福祉保健所で、新任期保健師 17 名を対象に、12 月 10 日に「保健師のプレゼンテーションスキルについて」、講義及び演習を行った。

また、人材育成関係事業計画と行政保健師確保対策、その他情報共有および次年度のガイドライン改定に向けた意見交換を、高知県、高知市及び各種団体、高知県内の教育機関と共に行った。

2) 地域保健福祉活動報告会

幡多福祉保健所で開催された地域保健福祉活動報告会にて、スーパーバイザーとして活動した。管内市町村の保健福祉活動について 9 題の発表と、質疑応答を通して互いに研鑽する場となるよう参画した。

3) 高知市いきいき健康チャレンジでの学生ボランティア活動

5 月の『高知市いきいき健康チャレンジ 2024 スタートイベント』には 8 名、2 月の『高知市いきいき健康チャレンジ 2024 結果報告会』には 7 名の学生が教員とともに参加した。保健師を志望している学生が参加し、スタッフの保健師とともに主体的に会場誘導など担った。学生が保健師の活動を身近に感じることでできる機会を今後も大切にしたいと考える。

4) 高知県保健師交流大会

高知県保健師交流大会の実行委員を担い、交流大会の企画、実施、運営を、高知県内大学 3 校、市町村衛生職員協議会、高知県看護協会、全国保健師長会高知県支部、高知市、高知県の各団体から選出された 16 名と共に取り組んだ。今年度は、1 月 25 日（土）に行い、本学の学生 4 名を含め 67 名の参加があった。

2. 研究活動

1) 県内の新任期保健師の人材育成プログラムの評価に関する調査

人材育成ガイドラインの新任期保健師支援プログラムの評価を行うために、研究的に取り組んだ。これまで高知県健康政策部保健政策課が実施した、新任期保健師が取り組んだ研修成果「行動目標及び評価シート」の記載内容をデータとして使用し、行動目標及び到達状況の把握を行った。平成 31 年度より運用している、専門能力の「行動目標及び評価シート」の行動目標立案と、到達度の実態から、求められる能力の獲得状況を明らかにし、高知県にとって、課題解決の方策を得る機会になるとともに、大学は高知県の地域保健における課題解決への貢献につながるよう研究に取り組んでいる。

3. 評価

昨年の課題としていた新任期保健師の目標管理の到達状況の評価を、今年度は研究調査として行うことが出来た。結果は、人材育成評価検討会で報告するとともに、令和 7 年度の保健師人材育成

ガイドライン作成に反映させていく予定である。また、中堅期（前期）保健師研修会も、研修方法を前年度の反省も踏まえ、工夫していくことで好評を得ることができた。

4. 次年度の課題

高知県の保健師人材育成は、今後も新任期及び中堅期保健師を対象に、ガイドラインの改定や、研修内容の洗練化を行い、効果を検証しながら取り組んでいく。また、学部生に各自治体の保健事業へのボランティア活動への参加を啓発していくことで、地域看護活動の理解と共に、県内の保健師への就職支援にもつながるよう働きかけていく予定である。

<看護管理学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

【第1回ケア検討会】テーマ「病棟再編における中間管理職のジレンマ～職務満足度、患者満足度の高い部署を目指した取り組み～」

日時：令和6年6月14日（金）18:00～20:30 場所：オンライン会議開催（ZOOM）

参加者：32名（病院看護職23名、本学大学院生6名、教員3名）

内容：令和6年度1回目のケア検討会は、コロナ禍を経た病棟再建に伴う中間管理者のジレンマをメインテーマとして事例検討を行った。

話題提供者は、スタッフから中間管理職に昇進と同時に現在の病棟へ異動し、その病棟はCOVID-19への対応を行った病棟であった。異動当初はCOVID-19専門病棟として未曾有の事態に向き合ったスタッフの話を、傾聴することに努めて、スタッフと丁寧に関わろうと意識してコミュニケーションを取るようしていた。今年度、病棟再編により、当該診療科に対応した部署作りが行われた。しかし、その過程で患者・家族を中心に考えるのではなく、看護師が動きやすいことを最優先にする傾向や関わりが難しい患者さんを避けようとするスタッフの発言が気になっていた。スタッフは以前の病棟と比較する発言が目立ち、環境の変化に気持ちがついていけないように感じていることが語られた。このような状況において、経験豊富なスタッフの強みを活かした看護が提供され、患者満足度の高い部署へ変革していくにはどのような対応をしたら良いのかについて検討した。

COVID-19という未曾有の事態の中、当該病棟に配属となった看護師が経験した心理状態や看護の特徴について共有した。スタッフはCOVID-19の最前線で働くことへのプライドや誇りを持って看護をしていたこと、そして管理者が前面に立って可能な範囲で配慮が行われていた一方で、COVID-19専門病棟へ行く、COVID-19専門病棟から離れることに衝撃を感じる看護師がいたことなどが共有された。COVID-19専門病棟における看護師の体験の理解は、看護師同士であっても簡単な事ではないことが共有された。現在は、病棟再編や診療科の再編により様々な変革が求められており、COVID-19専門病棟での未曾有の事態への対応から絶え間ない変革が続いているとも考えられる。また、ベテラン看護師のスキルを活かすことができるよう、どのように環境を整え支援することができるのかについても議論された。変化や変革に不安や抵抗感を持つのは当たり前のことであり、その不安や反論を受けとめつつ、誰のための変革なのかについて気づくことができるように関わる必要があるという意見がでた。

話題提供者からは、これまでの経験を前向きに捉え、今後のスタッフへの関わり方についてヒントを得ることができたという意見が聞かれた。参加者は、コロナ対応のため調整を行った経験、コロナ対応を行ったスタッフへの対応を行った経験、あるいは何らかの変革を推進した経験を振り返ることができたという意見が聞かれた。また、今後経験する病棟再編や変革について、スタッフ支援についていろいろな方の意見を聞くことができ、共通する意見や異なる意見から学ぶ経験になったという感想が聞かれた。

【第2回ケア検討会】テーマ「プラチナナースがイキイキと働き続けられるための体制づくり」

日時：令和6年10月18日（金）18:30～20:15 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：19名（外部参加者11名、本学大学院生5名、教員3名）

内容：本年度2回目のケア検討会は「プラチナナースがイキイキと働き続けられるための体制づくり」というテーマで、管理職で定年を迎えた後、一般職として継続勤務をすることの難しさについて事例提供者からの現状の報告から議論が始まった。

まず、管理職が定年後に一般職員として働き続ける中での役割葛藤やモチベーションの低下の原因について様々な質疑応答があった。本人の思いとは別のところで、組織や社会制度を基盤とした病院のルール（処遇や配置等）に従って、就業を継続していることと同時に、定年後に評価される機会が減少することも要因の一つではないかという意見が交わされた。

また、管理職のプラチナナースがスタッフとして働く場合には、患者対応には問題がなくとも技術面に不安があることも多く、個々のナースの資格やスキルを活かした部署に配属できる配慮やプラチナナースを支える周囲のスタッフの理解やお互いに協力し合える職場風土を育むことの重要性について意見が出された。その他、ディスカッションの中では、管理職としてのスキルを活かして、次世代の管理者の育成という役割を付与することやプラチナナースのメンタルケアの場としてプラチナナース同士が語り合い、研修する場を設けることが必要では？という意見もあった。そして、今後は更に労働力人口減少が見込まれる医療現場において、誰もがいずれプラチナナースになるという視点を持ち、早い段階から準備を進める必要性についても確認された。

最後に、事例提供者から、今回の検討会を通して、他施設でも同じような悩みを抱えていることが共有でき、個々のナースのモチベーションを保つためのヒントやこれからプラチナナースがイキイキと働き続けるための体制創りに向けた一助となったことが共有された。

【リカレント教育&修了生・在学生との交流会】

日時：令和7年2月9日（日）13:30～15:30 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：13名（修了生6名、大学院生4名 教員3名）

テーマ：「キャリア・プラトーって悪者？」

話題提供者は、看護管理領域の大学院院生で4日後に控えた EAFONS2025 (<http://eafons.org/>) で発表する一般演題「The Relationship Between Career Plateau and Career Self-Reliance Among Mid-Career Nurses（キャリア中期看護師のキャリア・プラトーとキャリア自律の関係）」を紹介することから議論が始まった。

この研究における看護職のキャリア・プラトーとは、「組織内において、現在以上の職業的発達が困難であると自覚している状態」と定義されているが、キャリア・プラトーには、ポジティブな側面もあるのではという問いを明らかにすることを目指した研究であった。

話題提供者からは「看護の魅力を見出すための具体的な支援はどのようなものがあるか？」、「キャリア・プラトーをきっかけに自律的に行動する可能性が実証されたが、実践現場でキャリア・プラトーに直面している看護師にどのような関わりをしたらよいか？」の2点について、修了生や先輩に助言が求められた。現場の看護管理者の立場にいる先輩からは、多様な働き方を支援、活用できる福利厚生等の支援制度を紹介、看護スタッフの将来を見据えた役割を付与、スタッフ一人ひとりの強みを引き出し信頼すること等、キャリア支援制度における透明性と公平性のバランスをとった運用について、具体的な示唆に富む議論が交わされた。参加者ひとり一人が自分自身の経験をふりかえり「キャリア・プラトー」と向かい合う貴重な機会となった。

2) 高知医療センターとの包括的連携事業

本年度は、看護管理学領域としての継続教育支援は、研修「グループマネジメント」の講師とマネジメントリフレクションを実施した。今年度より対象者を副科長以上とし、勤務時間内に変更して研修の回数も4回と増やした結果、延べ参加は138名となった。

高知医療センターの看護師への研究支援にも参加した。

3) 健康長寿研究センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネーター能力修得研修」「入退院支援コーディネーター継続研修」「多職種協働研修」の研修の企画運営に参画し、講師を務めた。また、看護管理領域の院生の参加もあった（延べ参加人数 20 名）詳細は、令和 6 年度健康長寿センター報告書にて報告している。

2. 研究活動について

看護管理学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

3. 抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、週に 1 回実施している。本年度は、4 月第 1 週より遠隔会議システムを活用して、精力的に実施し、夏季、冬季休業期間を除いて、2 月末まで毎週継続した。10 月以降は、次年度博士前期課程に入学予定の者も参加して、論文のクリティークの実際を学ぶ場となった。プレゼンター及び司会は領域の博士前期課程の院生が中心になり、学生ひとり一人の理解度に応じて、研究手法の妥当性、統計手法再確認、実践への活用についての質疑を通して学びを深めた。本年の対象論文は、33 本、延べ参加者数は、246 名であった。

4. 評価

社会貢献活動の中で特に重視しているケア検討会と医療センターでの包括連携事業や健康長寿研究センターでの入退院支援事業、高幡地区のトリアージ訓練や BCP 関連活動等への学生の参加機会は増加した。

また、抄読会やケア検討会の運営についても、博士前期課程の学生のみならず、修了生や入学予定者まで広がり、次年度以降は他領域の学生まで参加予定である。今年度の目標である領域活動に留まらず健康長寿研究センター事業を軸とした大学全体の活動への拡がりは概ね達成できた。

5. 次年度の課題

次年度以降も、健康長寿研究センター事業や地域共生機構における事業を活用し、看護管理領域での活動の成果にもつなげていく。

<共創看護学領域>

1. 本年度の活動総括

共創看護学領域は開設 5 年目をむかえ、博士前期課程 5 名、博士後期課程 2 名が修了し、現在は博士後期課程 6 名が在学し学んでいる。本年度は、カリキュラムの運営と共に、研究コースとしての学生の研究活動促進へのサポートを中心に行っていった。

博士前期課程修了生 5 名のうち、3 名が修了後、高知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程に進学し、さらに研究を発展させている。また、もうひとり、学際的な視点の強化をめざし、他大学の博士後期課程に進学し、情報学を専攻し研究活動を継続している。臨床にかえったひとは、臨床において Evidence を活用していくことや臨床の視点から研究を発信することを目指し活躍している。

博士後期課程については、令和 6 年度 1 名の修了者がでた。

また、学生には、在学中から積極的に国際学会や学際的な学会へ投稿し発表を行うようにサポートを行った。令和 6 年度は、博士前期課程と博士後期課程の学生 2 名が韓国で開催された East Asia Forum of Nursing Scholars に投稿、採択されている。また、博士後期課程学生 1 名は、ヘルスコミュニケーション学会に、もう 1 人は日本自殺予防学会に投稿、採択された。学術雑誌への投稿についても、3 名が投稿し採択されている。今後も研究コースとしての活動の一環として、学会発表や紙上発表を位置づけサポートしていきたい。

さらに、今年度から、公聴会前に共創看護学領域に所属する学生に対しプレゼンする機会を作った。博士後期課程に所属する 5 名の学生が参加し、質問や感想を話し合うことができた。プレゼンターには公聴会に向けてプレゼンを洗練化する機会となり、同時に、参加者にとっても興味深い研究にふれる機会が持てたと好評であった。今後も共創看護学領域の取り組みの一つとして継続していきたい。

1) 研究活動

(1) 博士前期課程・博士後期課程

〔博士前期課程〕1 名が修了

〔博士後期課程〕学生 6 名　うち 1 名が修了

2 名が研究計画書提出、3 名が中間報告を終え一時論文提出に向けて分析を進めている

(2) 教員の研究活動

テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究(C)2021 年－2024 年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援(good practice)の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、研究倫理審査申請を行い、承認を得て、データ収集を行った。

テーマ：ポータブルデバイスおよび A I アプリを用いたポストコロナにおける非対面型遠隔看護

科研基盤研究(C) 2021 年－2025 年

研究代表者：池田光徳

本年度は、感情認識 AI 解析による「腹痛」の感情値を中心に検討を進めた。詳細は今後公的に発表する予定である。ウェアラブルデバイスを用いた呼吸運動のデータが収集できないか現在検討中である。

2. 本年度の評価と次年度の課題

来年度博士後期課程は 2 名の学生が入学予定であるが、本年度も博士前期課程の入学者がなく、来年度は研究コースで学びたいという博士前期課程の学生の獲得が課題である。また、令和 6 年度は特筆すべき社会貢献がなく、今後は領域としての社会貢献についても検討していきたい。

<災害・国際看護学領域>

1) 令和6年度の活動

①教育活動

今年度は、在籍生 DNGL3 名、博士後期課程 1 名、博士前期課程 2 年次 1 名の合計 5 名に対し、教授、特任教授各 1 名の体制で研究指導にあたった。専任教授 1 名に対して DNGL 運営委員長、学部授業、学外委員等、業務が集中したが、DNGL 1 名および前期課程 1 名が無事修了した。

1 名が災害看護副専攻プログラムの認定を受けた（2 人目）。

②大学の災害対策活動

本学の災害対策プロジェクトは、これまで当領域が中心的な役割を果たしてきたが、今年度から事務局が中心となるように体制が変更となった。このため、今年度は、新入生オリエンテーションで講義を行った以降は、合同災害訓練には領域として具体的な役割をもたず、高知医療センターとの合同会議にも年間通して出席する機会を得なかった。

このため、今年度の合同災害訓練と並行して、看護学部特別企画「大規模災害時の学生保護」に焦点を当てたワークショップを同日開催した。ワークショップの詳細は p. 31「災害看護をリードする活動」を参照のこと。

(1) 社会貢献

① 防災に関する活動

今年度新たに加わった能登半島地震関連事業を含め、本領域教員が高知県および高知市の各種委員、委員長を多数拝命し、貢献した。

今年度第二回県大立志塾は木下教授がリクエストを受けて災害看護に関するワークショップを企画、実施した。「探究★災害時こころと身体の健康」と題したワークショップには、県内の高校から多数の参加希望者をあつめ、大きな反響があった。また、オープンキャンパスの災害看護体験ブースでは、感染防護衣(N95 マスク等)の着用体験や、災害時情報システム COACHES アプリのデモンストラーションを実施した。

② 国際支援活動

2021 年の軍事クーデターにより内戦状態が続いているミャンマーに対する国際人道支援に関して、木下教授が日本の国際 NGO に専門的助言等、協力を継続しているが、今年度は日本政府による NGO 連携無償資金プロジェクトが隣国タイで開始されたことに伴い、2024 年 8 月に木下教授が保健医療専門家として現地に赴き、ローカル NGO の母子プロジェクトに関して指導助言を行った。

(2) 研究活動

昨年度から参加している緊急人道支援学会には、総会および研究フォーラムに出席し、研究交流を行った。災害・国際看護学領域として賛助会員登録しており、5 名までの参加費免除枠があり、参加勧奨と情報提供を行っている。日本災害看護学会には DNGL 在籍生以外に、本学の学部生も参加し、拡大している。2024 年 WSDN（世界災害看護学会）が神戸で開催されるにあたっては、日本災害医学会国際委員である木下教授が JADM-WSDN 連携ワーキング・グループのリーダーとして協力の調整にあたった。また、DNGL として 5 大学共著演題を発表したほか、本学教授が座長として登壇するなどして協力した。

上述の国際支援活動でタイーミャンマー国境地帯に支援に赴いた際に、現地では妊産婦保健に関するニーズがあることを確認し、2024 年 10 月より、タイーミャンマー国境付近における妊婦健診 (Antenatal Care) の実施状況を調べるリサーチ・プロジェクトを、現地医療機関、ローカル NPO と共同で開始した。今後は、領域としてこの活動に取り組む予定である。

2) 次年度活動方針

災害や国際は実習が困難な分野であるため、学生の理解が表面的、断片的になりやすい。本来の災害看護、国際看護は、どの看護専門分野においてもその専門性を反映しつつ実施すべき横断的技術であるが、ともすると「災害看護はDMATがやるもの」「国際看護とは海外に行かなければできない」など、誤解がみられる場合もある。学生の災害看護に対する理解を深めるためには、学部科目においては演習を行う機会を増やしていきたい。また大学院については、進学希望者の面接を十分行い、適性を見極めたうえで受験をするように勧めたい。少子化や全国的な大学新設に対応するためにも、実際の災害などの危機に際して高度な専門性を発揮して社会貢献できる優秀な人材の育成を目指したい。

<専門基礎領域>

1. 社会貢献活動

高知市が行っている「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」のイベントである『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」スタートイベント』、『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」応援講座～栄養編～』、『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」応援講座～運動編～』、『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」結果報告会』にて健康に関する体験ブースを出展した。加えて『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」結果報告会』では、立木が講演を行った。これ以外にも「高知市老人クラブ連合会鴨田ブロック健康まつり」や「第 19 回いきいき百歳大交流大会」に健康に関する体験ブースを出展した。さらに立木は、「高知市地域包括支援センター担当者連絡会」での講演をはじめいくつかの講演を行った。これ以外に研究に関する相談やコンサルテーションを県外の研究者に対して行った。

2. 研究活動

1) 専門基礎領域としての研究活動

専門基礎領域の研究として「フレイル予防のための疫学研究」（研究責任者：立木）を実施している。今年度は、ベースライン調査の一環として高知市で 2 回の調査を行った。調査に参加した対象者は 199 人であった。今年度、本研究は他学部のみならず他大学、病院と協力して行う他施設共同研究へと発展した。

2) 学部生の研究支援

4 回生の看護研究にて「日本人女子大学生の子宮頸がん予防行動と子宮頸がんに対する知識や意識との関連」と題して卒業論文の指導を行った。疫学及び統計学の基礎の復習からはじまり、研究計画、調査実施、論文執筆、研究発表などを基礎から指導した。

3) 大学院生の研究支援

大学院博士前期課程の研究コースの副指導では、N of 1 試験というこれまで看護学ではほぼ用いられていない研究手法を用いた研究を指導し、研究を通して新境地の開拓に必要なリテラシーの獲得方法なども含め指導した。

4) 研究成果の公表

立木は、日本人女性の骨粗鬆症予防を目指して行われている大規模コホート研究 Japanese Population-based Osteoporosis Study (JPOS Study)の現場責任者として 1 地域の追跡調査を無事に完遂した。これとは別に木質住宅と健康の関連の解明を目的としたコホート研究の追跡調査を実施した。JPOS Study のデータを用いて共著で執筆した論文が J Clin Endocrinol Metab (IF=5.0) に掲載された。また、共著として国際学会 2 件、国内学会 8 件の発表を行った。詳細は第 2 部の看護教員の活動を参照。

3. 活動の評価

1) 社会貢献活動の評価

本領域で行っている社会貢献活動は研究活動と連動したものであり、研究活動を基盤とした社会貢献活動を実施できたことは高評価に当たると考える。大学は研究機関であり教育機関でもある。研究機関という側面から、研究で得られた新しい知見をはじめとした知的財産を社会に発信し活用することで社会貢献を成し遂げることが一つの理想といえる。今年度の本領域の社会貢献活動はこれに基づく活動といえる。一方で、教育機関という側面では、地域に貢献できる人材育成は必ずしも十分に行えていない。これは、今年度本領域が現行体制となった初年度であったことも影響していると考えられる。

2) 研究活動の評価

領域で取り組んでいる「フレイル予防のための疫学研究」は、今年度の目標調査対象者数に届かなかった。また、本研究を運用する事務局体制が必ずしも十分とはいえない。資金面でもより多くの研究費の獲得が必要とされる。これらの課題に取り組むために、本研究の人的・資金的問題なども含めた研究体制の見直しのみならず、本領域の構成メンバーの研究に対する意識改革が必要といえる。

各メンバーにおいては、蓄積しているデータの研究報告が十分に行えていない。各自で研究に費やす時間を作る努力はしているが、領域内で研究、教育、社会貢献活動のバランスを考え研究時間を確保する方法を十分に検討できていない点は問題といえる。

学部生の看護研究では ICT を活用したゼミナール運営を実施した。これにより、学生同士が協力し研究に取り組む機会を増やし、活発なアクティブラーニングの実施を可能にした。また、特定の学生のみが研究に取り組むのではなく、すべての学生が研究に取り組むような工夫をしたことも活発なアクティブラーニングの実施につながった。

4. 次年度の課題

1) 社会貢献活動の次年度の課題

次年度も研究活動を基盤とした社会貢献活動を行うことを目標とする。今年度の地域に対する社会貢献活動は高知市のみであった。次年度は、高知市に対する社会貢献活動を継続しながら、高知市以外の地域での社会貢献活動が行えるようにすることが課題となる。この課題に取り組むために、「地域と共にある研究」、「地域に開かれた研究」を目指すことが要求される。

また、地域に貢献できる人材育成を通しての社会貢献活動を行えるための基盤づくりも課題といえる。この課題に取り組むために、領域の研究力を高めこれを教育力に還元し、地域に貢献できる人材育成を行える領域としての総合力を付けることが求められる。

2) 研究活動の次年度の課題

本領域で取り組んでいる「フレイル予防のための疫学研究」の次年度の課題は、事務局体制の再編と強化、研究費の獲得である。この課題を解決するために、研究班の全体の組織体系の見直しと再編も必要となる。また各メンバーが当事者意識を持ち自ら進んで研究に取り組む必要がある。

また、各メンバーの研究報告が十分に行えていない現状の改善も課題である。領域内で研究、教育、社会貢献活動のバランスを再考し、各メンバーの研究が推進される領域内の環境づくりが求められる。

領域で担当する看護研究では、今年度用いた評価に値する運営方法を活用しながら、より深い学びの場を提供していくことが課題となる。科学的・論理的思考をどのように定着させるかなどが具体的な課題となる。

15. 高知県立大学看護学会

高知女子大学看護学会は、看護学の進歩発展と、地域の看護職者の研鑽および看護の質向上に貢献することを目的として、看護学会の開催、公開講座の開催、高知女子大学看護学会誌の発行、奨学金の貸与などの活動を行っている。令和6年8月からは、名称を高知県立大学看護学会に変更し、活動の充実に努めている。本学会の運営委員の約半数は、本学部の教員が引き受けており、学外のような現場で活躍している運営委員とともに活動に取り組んでいる。また、運営委員以外の学部の教員からも多くの協力を得て、これらの諸活動をスムーズに展開することができている。

1) 第50回高知女子大学看護学会の開催

「新たな看護実践知を『共』に『創』ろう」をメインテーマとして、令和6年7月20日（土）に開催した。遠方からも参加いただけるよう、今年度も高知県立大学池キャンパスの会場での対面とオンラインのハイブリッドで行った。卒業生や修了生をはじめとする県内外の施設の看護職者や学生など、会場に85名、オンラインで29名、計114名の参加があり、活気ある学会となった。

○講演

午前は、近畿大学医学部・病院運営本部 看護学部設置準備室 教授の小松浩子先生を講師に迎え、「共に創る健康生成：看護の視座から発展を考える」というテーマでご講演いただいた。「共創」という概念の考え方や保健医療分野における共創について国内外の知見を交えながら説明し、講師が実践・研究・教育を通してチャレンジしてこられた「共創」についてご紹介いただいた。開催後のアンケートでは、「共創という概念は公衆衛生看護の考え方、そのものであり、臨床系の方などの連携が深まり住民と共に地域課題に取り組めると良いと考えた。」「ケアが地域社会に根付いていくプロセスには看護プログラムが活かされることを学び、その中で目指すものへの価値の醸成となることを実感した。看護のもつ力が潜在性の発揮に貢献するような活動を行っていききたいと思う。」といった意見があった。参加者にとっては、講師の共創的な活動から刺激とエネルギーを得るとともに、共創の本質やあり方への理解を深め、様々な場でいかにして看護の強みを活かしつつ周囲の人たちと共に新たなケアを創成していくかを考える機会となっていた。

○リレートーク

午後は、新たな企画として、メインテーマの下に4名のスピーカー（野嶋佐由美氏、藤田佐和氏、小澤若菜氏、岩崎順子氏）によるリレートークを行った。参加者アンケートでは、「先生方からの発信にとっても刺激をいただいた。」「スピーカーの方の話が熱すぎて時間が足りなかった。もっと聞きたかった。」「実践知をいかに理論的な視点で概念化し、対策の取り組みに繋げるのか、大学と協働する意味を実感した。」といった感想があり、各スピーカーの考えや熱意、取り組みなどに触れることで、視野が広がるだけでなく、大学とのつながりを実感できる場となっていた。

○ワークショップ

メインテーマの下に5つのワークショップを開催し、話題提供と有意義な意見交換が行われた。

□ワークショップ1 病気や障がいのある子どもと家族を支える子どもホスピスの創造

話題提供者：濱田 裕子（下関市立大学 看護学部設置準備室／NPO 法人福岡子どもホスピスプロジェクト代表理事）

コーディネーター：笹山 睦美（高知医療センター 小児看護専門看護師）

□ワークショップ2 身体的な健康問題を抱える患者をチームで支えるためのシステム構築

話題提供者：井上 智恵（京都済生会病院 慢性疾患看護専門看護師）

コーディネーター：有田 直子（高知県立大学看護学部 准教授）

□ワークショップ3 当事者・家族の知恵を集めて高次脳機能障害と向き合う

話題提供者：瓜生 浩子（高知県立大学看護学部 教授）

コーディネーター：中平 洋子（聖カタリナ大学看護学部 教授）

□ワークショップ4 臨床と教育機関で取り組む新たな看護学実習

話題提供者：内田 雅子（高知県立大学看護学部 教授）

窪田 美穂（高知医療センター 慢性心不全看護認定看護師）

加藤 昭尚（高知県立大学看護学部 助教）

コーディネーター：原田 千枝（高知大学医学部附属病院 看護部長・副院長）

□ワークショップ5 卒業後に私が挑んでいる看護実践

話題提供者：高村 智絵（高知中央訪問看護ステーション 訪問看護師）

猪野 郁美（高知赤十字病院 助産師）

今西 清か（新居浜市立川東中学校 養護教諭）

コーディネーター：久保田 聡美（高知県立大学看護学部 教授）

2) 高知県立大学看護学会誌の発行について

学会誌を2巻発行した。詳細は以下の通りである。

- ・高知女子大学看護学会誌 第49巻2号：令和6年6月発行

総説2編、原著論文4編、研究報告4編

令和5年度高知女子大学看護学会公開講座報告

- ・高知県立大学看護学会誌 第50巻1号：令和6年12月発行

原著論文2編、研究報告2編、資料3編

第50回高知女子大学看護学会報告、令和6年度高知女子大学看護学会総会報告

3) 令和6年度 高知県立大学看護学会「公開講座」について

10年以上にわたり研究方法に関する公開講座を継続しているが、令和5年度よりテーマと内容を刷新し、2年目の開催となった。詳細は表1のとおりである。実施後アンケートでは、いずれの回も回答者の9割以上が「満足できた」または「やや満足できた」と回答した。また、研究に取り組む心理的ハードルを下げるのができた、今後研究を進めていく上で方法のガイドとなったといった感想があり、研究を進めていく上での知識の獲得と動機づけになっていた。しかし、参加者が少ないため、より多くの方に参加していただけるよう広報活動の充実などを図っていきたい。

表1 令和6年度 公開講座

	タイトル	講師	参加者数	日程
第1回	現場でいかせる！看護研究 研究計画の立案	瓜生 浩子	9名	8月25日（日） 9:30～12:30
第2回	現場でいかせる！看護研究 量的データの収集と分析結果の読み方	岩崎 順子	11名	13:30～16:30
第3回	現場でいかせる！看護研究 質的データの収集と分析方法	高谷 恭子	13名	9月28日（土） 9:30～12:30
第4回	現場でいかせる！看護研究 事例研究	田井 雅子	12名	13:30～16:30

4) 奨学金の貸与

奨学金貸与事業活性化のための対策として、令和5年度より奨学金返還期間を延長したこともあり、令和6年度高知女子大学看護学会奨学生に4名の応募があった。審議の結果、応募者2名への貸与が承認された。引き続き、奨学金について広く学会員に周知を図り、活用率の向上に努めたい。

16. 卒業生・修了生への支援活動

1) 再就職や進学・就職・国家試験への支援

卒業生に対しては、在学時の学年担当や、看護研究指導教員を中心に、メールや面談による相談を受けて、キャリアアップ支援を行っている。卒業後に、看護師から県内の保健師に職種を変更する場合は、地域看護学領域の教員が相談を受け、就職試験の対策を行った。また、ライン公式アカウントにおける情報発信に、県内自治体からの求人情報や、自治体保健師との懇談会開催内容を加え、卒業生にも広く周知できるよう努めた。

大学院への進学に向けて、「3 回生看護学部保健医療系就職ガイダンス」等で来校する卒業生に対して、大学院進学への相談を実施したり、大学で実施している教育研究活動・地域貢献活動・ケア検討会への参加を促したりして、卒業生のキャリアアップ支援を継続している。また、高知県立大学看護学会や、看護学部同窓会での交流をとおして、関心を持つ卒業生に、大学院の紹介を行った。

今年度は保健師、助産師の国家試験受験対象となる卒業生がいるため、次年度の国家試験合格に向けて継続した支援を卒業後も行っていく予定である。

2) 卒業生に対するキャリア支援

(1) 令和 6 年度の活動目標と評価

令和 6 年度は 2 つの目標掲げて活動した。

1 つ目の目標として「SNS を用いて、卒業生が高知県立大学への関心を持ち続け、繋がることができるように情報発信を継続する」をあげた。令和 5 年度からこのプロジェクトのライン公式アカウントの案内を行い、友だち登録者数は 121 名（2025 年 2 月現在）となった。またこのアカウントを通じて、月に 1 回前後、大学の様子や高知県立大学看護学会（旧：高知女子大学看護学会）の案内、大学院への入試案内などを配信し、卒業生に本学への関心を持ち続けてもらうことに繋がった。

2 つ目の目標として「SNS を用いて卒業生のキャリア支援を行う」をあげた。当初のライン公式アカウント契約内容は発信数が月 1 回であり、発信する情報も限定されることが課題であった。また県外に就職した卒業生が高知県内での再就職の情報を求めているという意見もあったため、大学院進学の案内だけでなく再就職等に関する情報をタイムリーに発信できないか検討した。検討の結果、ライン公式アカウントのサービス内容を見直し配信数を増やすこと、情報発信の内容を広げる（表 1 参照）ことで、キャリア支援に関する情報をタイムリーに発信できるよう整備した。また卒業生とチャット機能を用いて双方向のやり取りができる体制を整えた。その結果、高知県内の病院や自治体からの求人情報をタイムリーに発信し再就職した事例があり、キャリア支援としての実績につなげることができた。

表 1. ライン公式アカウントにおける情報発信の内容（下線は今年度から追加したもの）

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・高知県立大学看護学会（旧：高知女子大学看護学会）の案内・高知県立大学同窓会の案内・高知県立大学看護学部各領域看護相談室、リカレント、研修会等の案内・大学の動きや在校生の様子・<u>既卒者も対象とした高知県内・その他卒業生が活躍されている病院や施設、自治体等からの求人情報等</u> |
|---|

(2) 次年度の課題

チャット機能を用いた双方向のやり取りを充実させ、卒業生の大学院進学、キャリア転換の相談に応じていく。また、卒業生が進学や就職について相談しやすい体制になっているかモニタリングしていく。

3) CNS 認定等の支援

看護学研究科博士前期課程では、平成 12 年 3 月に 1 期生が修了して以来、専門看護師の認定試験に向けて支援を行っている。大学院修了前に主指導教員は、大学院生の背景や個性を尊重し、修了後の資格認定までの計画を学生とともに立案している。修了後は、その計画に沿って定期的に事例検討会や勉強会の開催、コンサルテーション、大学院の特別講義の連絡や講師依頼、共同研究、先輩 CNS の紹介などを行い、CNS 認定及び認定更新への支援をしている。

令和 6 年度までに専門看護師コースを修了し、認定試験に合格した専門看護師は、9 領域 165 名であり、研究コース、実践リーダーコースにおいては修了後、27 名が認定看護管理者の資格を得て、活躍している。令和 6 年度は、がん看護 CNS 3 名、急性・重症患者看護 CNS 2 名、精神看護 CNS 2 名、在宅看護 CNS 1 名、老人看護 CNS 1 名の計 9 名の修了生が CNS 認定試験に合格し高度実践看護師として活動している(表 1)。

表 1 修了生の専門看護師・認定看護管理者認定数

領 域	がん看護	慢性疾患看護	急性・重症患者看護	小児看護	精神看護	家族看護	地域看護	在宅看護	老人看護	看護管理	合 計
令和 6 年度	3		2		2			1	1		9
総計	50	5	13	27	26	22	2	13	7	27	CNS:165 名 認定看護管理者:27 名

4) 看護学部同窓会活動

令和 6 年度、看護学部同窓会役員一覧は、表 2 の通りである。

表 2 令和 6 年度同窓会役員

役員名	氏 名	卒業・修了期	所 属
会長	中山洋子	16 期生	文教学院大学大学院
副会長	大川宣容※1	35 期生・博士 7 期	高知県立大学看護学部
	中野綾美	27 期生	高知県立大学看護学部
書記	田鍋雅子	38 期生・修士 13 期生・博士 18 期生	高知医療センター看護局
	山中福子	修士 7 期生	高知県立大学看護学部
会計	川上理子	35 期生・博士 9 期生	高知県立大学看護学部
	西内舞里	46 期生・修士 12 期	高知県立大学看護学部
会計監査	野田真由美	34 期生	高知市保健所
	矢野智恵	38 期生・修士 1 期生・博士 17 期生	高知学園短期大学
庶務	角谷広子	25 期生・修士 5 期生	芸西病院看護部

	池添志乃	34 期生・修士 2 期生・博士 1 期生	高知県立大学看護学部
	池内香※2	51 期生・12 期生	高知県立大学看護学部

但し、※1：看護学部長、※2：看護学会役員は当て職である

(1) 令和 6 年度の活動

- ① 令和 6 年度同窓会総会の開催
- ② 役員会の開催
- ③ 講演会(高知女子大学看護学会との共催)
- ④ 会報(第 29 号・第 30 号)の発行
- ⑤ 学生及び同窓生活動への支援
- ⑥ 高知女子大学看護学会への支援
- ⑦ 緊急奨学金貸与および給付型特別奨学金

(2) 活動の実際

① 令和 6 年度同窓会総会の開催

COVID-19 感染拡大防止と会員皆様の健康と安全面への配慮から、令和 6 年度の同窓会総会の対面での開催を中止し、文書(議決権)送付による総会とし、議案賛否の回答をいただく形とした。議事として、(1)令和 5 年度活動報告、(2)令和 5 年度決算報告、(3)令和 5 年度会計監査報告があった。また、審議事項として、(1)令和 6 年度活動計画案、(2)令和 6 年度予算案、(3)令和 6 年度同窓会役員について審議し、承認された。

② 役員会の開催

役員会は、3 回開催した。第 1 回役員会は、本年度の活動、会報、総会および懇親会の企画、給付型特別奨学金等について審議し、役割別年間スケジュールが確認された。第 2 回役員会は、同窓会総会の企画、会報第 29 号、同窓生への活動支援について審議された。第 3 回役員会は、会報第 30 号、令和 7 年度活動案、同窓生への活動支援等について審議された。

③ 講演会の開催(高知女子大学看護学会との共催)

講演会は、7 月 20 日高知女子大学看護学会との共催で対面とオンラインのハイブリッドで開催された。今回のメインテーマは「新たな看護実践知を『共』に『創』ろう」であり、学会員と一般参加者合わせて多くの参加があった。

テーマ：共に創る健康生成：看護の視座から発展を考える

講師：小松浩子先生(近畿大学医学部・病院運営本部 看護学部設置準備室 教授)

④ 会報の発行：令和 6 年度は、第 29 号・第 30 号の 2 回の会報を発刊した。

a. 第 29 号の発行

第 29 号は、令和 6 年度同窓会総会の報告に合わせて令和 6 年 12 月 20 日に発行した。本号では、令和 6 年度同窓会総会報告、同窓会役員紹介、令和 5 年度活動・会計報告・令和 6 年度予算案、第 50 回高知女子大学看護学会報告、7 月 21 日に開催された看護開発研究会報告を掲載した。また、南裕子先生の「瑞宝中綬章」受章のお祝い、卒業生活動支援として実施した日本老年看護学会第 29 回学術集会の開催報告等を掲載した。

b. 第 30 号の発行

会報第 30 号は令和 7 年 3 月に発行した。本号では、山崎智子先生、岸田佐智先生の追悼文、卒業生・修了生による報告・メッセージ等で構成した。

⑤ 学生及び同窓生活動への支援

- ・日本老年看護学会第 29 回学術集会（2024 年 6 月開催 学術集会長 岡本充子）支援
- ・高知女子大学家政学部看護学科/衛生看護学科および高知県立大学看護学部関係の資料の保存・整理（代表者 中山洋子）支援
- ・看護開発研究会シンポジウムへの支援
- ・卒業生への記念品

⑥ 高知県立大学看護学会との共催

平成 25 年度より、高知女子大学看護学会（現 高知県立大学看護学会）へ毎年資金支援を行っており、令和 6 年度は、30 万円の支援であった。同窓会発足当時より、高知女子大学看護学会との共催で講演会を開催しており、今後も、両者の連携を図りながら、学術の進化、ネットワークの拡大に努めていく方針である。

⑦ 緊急奨学金貸与および給付型特別奨学金

令和 6 年度の給付型特別奨学金の貸与について、0 件であった。

第2部

看護学部教員の活動

池田 光徳(教授)

■審議会や活動報告

- 日本皮膚科学会高知地方会幹事
 - 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム臨床治験推進委員会委員
 - 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムファカルティ・ディベロプメント委員会委員
 - 四国病院経営プログラム評価委員会委員
 - 相模女子大学・相模女子短期大学部の研究活動に係る不正防止規程及びヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会規程に定める外部委員
 - 高知県健康づくり推進協議会委員
 - 高知県地方薬事審議会委員
 - 高知県産業振興センター委員
 - 高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会委員
 - 高知医療センター・高知県立大学包括的連携協議会健康長寿・地域連携部会委員
- 所属学会等：日本皮膚科学会、日本研究皮膚科学会、日本乾癬学会、日本臨床皮膚科医会、日本皮膚科学会西部支部、日本皮膚科学会高知地方会、Society for Investigative Dermatology（米国研究皮膚科学会）

■大学・看護学部企画活動

- 副学長
- 高知県立大学教育研究審議会委員
- 高知県立大学研究倫理委員会委員長
- 高知県立大学健康管理センター長
- 高知県立大学大学院看護学研究科委員会委員

■領域活動

- 人体のしくみの乱れⅠ（学部）
- 人体のしくみの乱れⅡ（学部）
- 治療学総論（学部生）
- 医学と看護の統合（集中、学部）
- 病態生理学（大学院博士前期）
- がん病態生理学（大学院博士前期）
- 皮膚疾患と褥瘡治療（訪問看護スタートアップ研修）

■非常勤講師等

- 高知大学医学部非常勤講師
- 高知学園短期大学非常勤講師

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 小原(武島)弘子, 辻 真美, 廣内智子, 島田郁子, 池田光徳: 非都市部在住高齢者の熱中症予防行動の実施状況. 四国公衆衛生学会雑誌 69: 121-128,2024
- 2) Natsuko Nakamura, Mitsunori Ikeda: Correlation Between Skin Physiological Parameters and Edema Severity in Elderly Individuals: Insights from Mosby's Edema Grading. 高知女子大学看護学会誌 (印刷中)

大川 宣容(教授)

■審議会や学会活動

- 日本がん看護学会代議員
- 日本看護科学学会代議員
- 日本看護シミュレーションラーニング学会理事 総務担当、編集委員
- 日本医療教授システム学会 編集委員
- 日本看護学教育評価機構理事 評価委員会委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本がん看護学会、日本家族看護学会、日本クリティカルケア看護学会、日本救急看護学会、日本看護シミュレーションラーニング学会、日本災害看護学会、日本医療教授システム学会、日本集中治療医学会、高知県立大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部長として看護学部運営
- 教育研究審議会・大学運営会議委員としての活動
- 総務・危機管理本部委員としての活動
- 自己点検・評価運営委員会委員としての活動
- 看護学部総務委員長としての活動
- 高知医療センター包括的連携・看護部会長としての活動

■領域活動

- クリティカルケア看護学領域修了生の支援
 - 専門看護師資格認定
 - 修士論文の投稿支援
 - 学習会の企画運営に関する支援
- 事例検討会の企画運営

■非常勤講師等

- 川崎医療福祉大学看護学研究科 クリティカルケア看護学特論 4ce コマ担当
- 岡山県看護協会 新人看護職員育成研修講師「看護技術の指導と評価」
- 高知県看護協会 高知県専任教員養成講習会「看護学実習における教授活動」

■研究論文

【学会発表】

- 1) 齋坂美賀子、大川宣容、池畠真由美、伊藤真理、大江理英、神家ひとみ、花山昌浩、内田雅子：治療が奏功せず極限状態にある患者の生きる時間を支えるケアリング，第20回日本クリティカルケア看護学会学術集会，那覇市 2024年6月

- 2) 大川宣容、佐藤まゆみ、平尾明美、緒方久美子、森本紗磨美、神家ひとみ：クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー，第44回日本看護科学学会学術集会，熊本市、2024年12月
- 3) 石津舞桜、徳永旭、新村美友、澤田晴菜、萩間耶月、塚北真優子、村川由加理、大川宣容：腹腔鏡下胃切除術患者の術後早期における苦痛体験，第44回日本看護科学学会学術集会，熊本市、2024年12月
- 4) FUJITA F., OKAWAN., ITSUBO M. : Shortened Family Caregiver Enhancement Program with E-Learning for Older Adults, the 28th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Seoul, 2025 Feb.

哇地 博子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本看護科学学会代議員
- 日本看護科学学会和文誌専任査読委員
- 日本精神保健看護学会代議員
- 日本精神保健看護学会表彰委員会副委員長
- 日本精神保健看護学会査読委員
- 日本精神科看護協会教育認定委員
- 日本精神科看護学術集会査読委員
- 高知女子大学看護学会査読委員
- 徳島大学医学雑誌学外編集委員
- 社会福祉法人ファミリーユ評議員
- 海辺の杜ホスピタル院外倫理委員
- 大学設置・学校法人審議会専門委員

所属学会等：日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、
日本災害看護学会、日本家族看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学研究科長として研究科全般の運営
- 教育研究審議会・部局長会議委員としての活動
- 高知県立大学研究倫理委員会委員としての活動
- 高知県立大学教員評価部会委員としての活動
- 看護研究倫理審査委員会委員長としての活動
- 学部・研究科自己点検評価委員としての活動
- 看護学部総務委員としての活動
- 国際交流委員としてのエルムズ大学大学院と交流促進の活動

■非常勤講師等

- 愛媛県立医療技術大学大学院非常勤講師「精神看護学特論Ⅱ」
- 高知県看護協会 臨床看護研究基礎研修 看護研究の基礎知識
- 土佐清水市地域生活支援拠点等整備事業 人材育成研修講師
- 土佐清水市地域生活支援拠点等整備事業 当事者の社会活動促進研修講師
- 土佐清水市地域生活支援拠点等整備事業 広報啓発研修講師
- ケース検討会ファシリテーター 土佐病院
- ケース検討会ファシリテーター 芸西病院
- 研究指導および講評 渭南病院
- 学館メディカルサポート 「当事者の思いに寄り添う服薬支援」e-ラーニング講師

- 精神科看護協会研修 メンタルステイタスイグザミネーション e-ラーニング講師
- 第 49 回日本精神科看護学会 シンポジウム「精神科をめぐる変化に着目した人的資源の開発ー各領域における現在・過去・未来」司会
- 第 49 回日本精神科看護学会 講師「日精看が行う研究倫理審査の仕組み」

■著書及び研究論文

【学術論文】

- 1) 池添志乃, 畦地博子, 中野綾美, 野嶋佐由美, 高谷恭子: 家族との協働型エンドオブライフケアの看護介入 に関する総説, 高知女子大学看護学会誌, 49(2), 1-15, 2024
- 2) 岩崎順子, 中村由美子, 嶋岡暢希, 高谷恭子, 田村恵美, 源田美香, 三浦由紀子, 有田直子, 佐東美緒, 田之頭恵里, 池添志乃, 畦地博子, 森下安子, 中野綾美: 小児のエンド・オブ・ライフに関わる看護師のコミュニケーションスキル, 高知女子大学看護学会誌, 49(2), 79-90, 2024
- 3) 畦地博子: 【アカウントビリティ-看護の説明と責任】アカウントビリティとは何か 看護における現状と課題 (解説), 精神科看護, 52(1), pp.4-8, 2024
- 4) 小松原大典, 立木隆広, 畦地博子: ビデオ通話による社会的相互作用の特徴と評価方法に関する文献検討: 精神科看護の実践・研究への示唆, 高知県立大学看護学会誌, 50(1), pp.64-73, 2024

【学会発表】

- 1) 加藤 郁子, 大川 貴子, 佐藤 充, 明間 正人, 中山 洋子, 畦地 博子, 塩見 理香, 田井 雅子: 重度・慢性精神障害者のためのセルフケア・アセスメント・ツールを用いた看護介入モデルの検討, 日本精神保健看護学会学術集会・総会プログラム・抄録集 34 回, p75, 2024.06
- 2) 柱谷久美子, 畦地博子: 救急医療機関での自殺未遂者ケアにおける看護師の関心の構造とプロセスのパターン, 日本自殺予防学会総会・日本臨床死生学会総会合同大会プログラム・抄録集 48 回・29 回 p12 2024.08
- 3) Hashiratani,Kumiko, Azechi,Hiroko: Structure of Nurses' Interests in the Care of Suicide Attempters in Emergency Medical Services: Focus on “Own inner being of being swayed” and “Welling up emotions”, East Asian Forum of Nursing Scholars 2025
- 4) Komatsu,Daisuke, Tachiki,Takahiro, Azechi,Hiroko: Session Evaluation and Emotional State in Nursing for Patients with Schizophrenia: A Comparison between Video-Mediated and Face-to-Face Communication —An N-of-1 Trial—, East Asian Forum of Nursing Scholars 2025

長戸 和子(教授)

■審議会や活動報告

- 日本看護系大学協議会高度実践看護師教育課程認定委員会（家族看護）委員
 - 一般社団法人日本家族看護学会理事
 - 公益社団法人高知県看護協会 第一副会長
 - 高知県看護協会新人看護職員研修事業運営委員会委員長
 - 高知県の看護を考える検討委員会 委員
 - 査読委員 高知女子大学看護学会
- 所属学会等：日本家族看護学会、日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、
日本がん看護学会、日本災害看護学会、日本看護管理学会、
高知看護教育研究会

■大学・看護学部企画活動

- 学生部長
- 教育研究審議会・大学運営会議メンバー
- 全学キャリア支援専門委員会委員長
- 全学健康管理センター運営委員会委員
- アドミッションセンター委員
- 看護学部総務委員
- 看護学部カリキュラム検討プロジェクトメンバー
- 看護学研究科博士後期課程教務委員
- 看護学研究科博士後期課程入試実施委員
- 看護学研究科広報委員

■領域活動

- 家族看護学領域
家族看護学領域修了生・在学生対象のリカレント教育を7回開催した
地域の看護専門職者を対象としたケア検討会を1回開催した
- 基礎看護学領域
「基本的な看護技術チェックリスト」の習得度調査、改訂版の作成に取り組んだ

■非常勤講師等

- 順天堂大学大学院
- 愛知県立大学大学院
- 高知県看護協会 専任教員養成講習会講師

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 上村奈緒子,瓜生浩子,長戸和子 (2024) : 医療的ケア児を迎える家族の在宅への移行の見極め
に至る看護師の臨床判断,高知女子大学看護学会誌,49 巻 2 号,56-67

【学会発表】

- 1) 長戸和子,池添志乃,瓜生浩子,源田美香ほか：「家族看護エンパワーメントモデル」の活用－実践を裏づけるナースの思考のプロセスを可視化する－,第31回日本家族看護学会学術集会,鎌倉,令和6年9月
- 2) 長戸和子,瓜生浩子,服部淳子,関根光枝,山村江美子,浅岡裕子,相墨生恵：教育と臨床の視点から考える看護基礎教育における家族看護の基盤づくり,第31回日本家族看護学会学術集会,鎌倉,令和6年9月

久保田 聰美(教授)

■審議会や学会活動

- 日本看護科学学会 代議員
 - 日本看護管理学会 専任査読委員
 - 日本クリニカルパス学会 第 25 回学術集会プログラム委員、評議員、査読委員、学術・出版委員、医療の質検証準備委員会委員
 - 日本禁煙学会 特任理事、査読委員、資格制度委員会委員
 - れんけいこうち広域都市圏ビジョン推進懇談会委員
 - 高知県立大学看護学会誌 査読委員
 - 高知県健康づくり推進協議会 たばこ対策専門部会委員
- 所属学会：日本看護科学学会、日本看護管理学会、日本災害看護学会、日本クリニカルパス学会、日本禁煙学会、日本コンフリクトマネジメント学会
日本公衆衛生学会、日本キャリアデザイン学会、高知県立大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿研究センター長としてのセンター運営及び大学運営会、教育研究審議会、総務・危機管理対策、地域共生学研究機構運営会議、研究費検討 WG 委員としての活動
- 健康長寿研究センター事業：基金事業「入退院支援体制推進事業」プロジェクトメンバー、看護管理者研修、管理者研修、CD 能力修得研修および CD 継続研修 主担当としての活動
- 看護学部学生委員会 委員長としての活動
- 看護学部総務委員としての活動

■領域活動

<看護管理学領域>

- 看護相談室の活動として、看護管理ケア検討会を 2 回開催
- 看護管理学領域修了生対象のリカレント教育及び交流会を 1 回開催
- 看護管理学領域教員と博士課程前期および後期の大学院生対象の抄読会を毎週木曜日に定期開催し、計 33 文献、述べ参加者 246 名
- 修士課程：研究計画書 主指導教員 2 名、修士論文 主査 2 名、副査 1 名
- 博士課程：博士論文 主査 3 名（うち 2 名休学）、副査 1 名

■非常勤講師等

- 愛媛県立医療技術大学 大学院 非常勤講師「看護管理特論」
- 四国大学 大学院 非常勤講師「看護管理特論」
- 京都大学大学院医学研究科医学部非常勤講師「慢性看護学特論Ⅵ・大学院」
- 高知大学医学部非常勤講師「医療安全学-クリニカルパス」

- 高知セカンドライフ友の会リフレッシュ講座 講師 医療とケアの仕組みを深掘する～「ほぼ在宅 ときどき入院」を実現するために～
- 禁煙サポーターズフォローアップ研修会講師、特定保健指導従事者育成研修会、高知県 健康政策部 健康長寿政策課事業

■その他 社会貢献

- 公益社団法人 日本医療機能評価機構 評価調査者（看護サーベイヤー）
- 全日本病院協会 機能評価受審支援相談事業 アドバイザー
- 高幡地区 BCP 連携会議（くぼかわ病院、土佐市民病院、香川県保健所）会議運営、コンサルテーション
- 高知県健康づくり推進協議会たばこ対策専門部会委員（タバコフリー高知 代表世話人）
- 高知県立高知小津高等学校 学校運営協議会委員
- 社会福祉法人 筆山保育園 理事（外部理事）

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 佐野みずほ, 久保田聡美：目標管理における看護スタッフの主体性とその影響要因、高知女子大学看護学会誌, Vol.49, 44-45, 2024
- 2) 池田恵美子, 久保田聡美：スタッフナースのセルフリーダーシップ測定尺度の開発—予備調査による信頼性と妥当性の検証—、高知女子大学看護学会誌, Vol.49, 91-100, 2024

【学会発表】

- 1) 久保田聡美：パスを活用したジョブクラフティングでエンゲージメントを高める、第 24 回日本クリニカルパス学会学術集会、2024 年 10 月

藤田 佐和(教授)

■審議会や学会活動

- 大学改革支援・学位授与機構大学機関別認証評価委員会評価委員、専門委員
- 日本看護系大学協議会専門看護師教育課程認定委員会分科会副委員長
- 日本看護系大学協議会APNグランドデザイン委員会委員
- 日本がん看護学会 専任査読委員 第39日本がん看護学会学術集会演題査読委員
- 日本看護科学学会看護学学術用語検討会委員 学術集会演題査読
- 日本緩和医療学会代議員 中国・四国支部運営委員会(WPG)委員
- 日本慢性看護学会代議員 学術集会演題査読
- 日本看護倫理学会評議員 学術学会演題査読
- 聖路加看護学会 査読委員
- 日本家族看護学会、高知女子大学看護学会 専任査読委員
- 高知県ヘルスケアイノベーション推進協議会委員
- 高知県がん教育推進協議会委員 高知がん診療連携協議会委員
- 高知県国民健康保険運営協議会委員
- 高知県後期高齢者医療懇話会委員
- 高知県ナースセンター運営協議会委員
- 高知医療センター治験審査委員会委員
- 高知医療センター地域医療支援病院運営委員会委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本がん看護学会、日本緩和医療学会、日本臨床腫瘍学会、
日本癌治療学会、日本慢性看護学会、日本看護倫理学会、日本生命倫理学会、
日本災害看護学会、日本家族看護学会、高知女子大学看護学会、聖路加看護学
会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部総務委員会委員
- 学生委員会委員、4回生学年担当
- カリキュラム検討チーム委員
- がんプロプロジェクトリーダー

■領域活動

- 修士論文の投稿支援
- 博士論文指導、博士論文投支援
- がん高度実践看護師APNセミナー（7回シリーズ）、がん看護学特別講義の企画・運営
- 修了生のCNS認定及び更新審査への支援
- 修了生の会（アストラル）の支援
- 看護相談室「質の高いがん看護実践を検討する会（2回/年）」の企画・運営

- 文部科学省がんプロ4期「次世代のがんプロフェッショナル養成プランの活動」
 - ① 中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム理事、がん高度実践看護師コース幹事校、カリキュラム企画運営委員
 - ② リカレント教育：がん高度実践看護WG講演会「がんゲノム医療における意思決定支援」の企画・運営、
がん高度実践看護師コース「Extended&Permanent Stageにあるがんサバイバーへの支援」教育プログラムの開発・実施
- 高知県におけるがん教育推進事業の活動

■非常勤講師等

- 静岡県立大学大学院看護学研究科研修会講師「看護における概念分析」

■著書及び研究論文

【雑誌】

- 1) 藤田佐和編集：特集「がん看護キーワード15～がん看護実践の基本～」，がん看護，29(3)，南江堂，2024.5

【論文】

- 2) 青木早苗，藤田佐和：BRCA1/2遺伝学的検査陰性である乳がん女性のセルフ・トランセンデンス，高知女子大学看護学会誌，49(21)，33-43
- 3) 藤田佐和，廣瀬未央，豊田邦江，山西亜紀子：サテライト型「質の高いがん看護実践を堅牢する会」の取り組みと評価，高知県立大学紀要看護学部編，74巻，1-12

【学会発表】

- 1) 岡西幸恵，藤田佐和：再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和のプロセス，第44回日本看護科学学会学術集会，2024.12
- 2) 田代真理，藤田佐和，廣瀬未央，森本悦子，豊田邦江，中村麻美，門田麻里：認知症を併せもつ高齢がん患者へのがん看護専門看護師の看護支援，第39回日本がん看護学会学術集会，2025.2
- 3) 阪本祐子，藤田佐和：アドバンスケアプランニングにおけるがん患者の対処，第39回日本がん看護学会学術集会，2025.2
- 4) 三賀山美紀子，藤田佐和：がん患者の高次脳機能障害への看護師の気づきと実践，第39回日本がん看護学会学術集会，2025.2
- 5) 藤田佐和：高齢がん患者の尊厳ある治療・療養生活過程への支援，第22回日本臨床腫瘍学会学術集会シンポジウム，2025.3.

池添 志乃(教授)

■審議会や学会活動

- 日本養護教諭養成大学協議会副会長
- 日本学校保健学会理事
- 日本学校保健学会編集委員会委員
- 日本家族看護学会評議員
- 日本家族看護学会編集委員会委員
- 日本養護教諭教育学会評議員
- 中国・四国学校保健学会理事
- 高知県公立学校教員採用候補者選考審査筆記審査問題調査研究員
- 高知県スクールヘルスリーダー連絡協議会委員
- 高知県衛生環境研究倫理審査委員会委員
- 十津小学校 学校運営協議会委員
- 日本家族看護学会学会誌専任査読員
- 高知女子大学看護学会査読員

所属学会等：日本看護科学学会、日本家族看護学会、日本学校保健学会、日本健康教育学会、日本小児看護学会、日本看護倫理学会、日本地域看護学会、日本公衆衛生学会、日本災害看護学会、日本医学看護学教育学会、全国養護教諭連絡協議会、日本養護教諭養成大学協議会、日本養護教諭教育学会、中国・四国学校保健学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 教務委員（学部・教職）
- 看護学部研究環境促進委員会委員長
- 学部国際交流プロジェクト委員
- 教職試験対策委員
- 高知県立大学看護学部同窓会庶務
- 教職課程専門委員
- 令和6年度臨床看護研究基礎研修（高知県看護協会）講師：「研究計画の進め方」

■領域活動

- 修士課程の教育活動 修士論文指導：主査（1名）、副査（1名）
- 博士後期課程の教育活動 博士論文指導：主査（3名）、副査（4名）

■研究論文

【著書】

- 1) 池添志乃編著/編集代表（津島ひろ江，荒木田美香子，岡本啓子編集）：学校における養

護活動の展開改訂 11 版，ふくろう出版，岡山，2024

【論文】

- 1) 池添志乃，畦地博子，中野綾美，野嶋佐由美，高谷恭子：家族との協働型エンドオブライフケアの看護介入に関する総説，高知女子大学看護学会誌，49(2)，1-15，2024
- 2) 岩崎順子，中村由美子，嶋岡暢希，高谷恭子，田村恵美，源田美香，三浦由紀子，有田直子，佐東美緒，田之頭恵里，池添志乃，畦地博子，森下安子，中野綾美：小児のエンド・オブ・ライフに関わる看護師のコミュニケーションスキル，高知女子大学看護学会誌，49(2)，79-90，2024

【学会発表】

- 1) 森下 幸子 ，池添 志乃，佐東 美緒，藤代 知美：ヤングケアラーとその家族の家族レジリエンスを高める支援，日本家族看護学会第 31 回学術集会，2024. 9. 14

内田 雅子(教授)

■審議会や学会活動

- 令和 6 年度日本慢性看護学会「慢性看護学の知の発展推進事業」推進メンバー
- 高知県糖尿病医療体制検討会議委員
- 所属学会等：日本慢性看護学会、日本看護科学学会、日本看護管理学会、
高知女子大学看護学会、日本赤十字看護学会、日本透析医学会

■大学・看護学部企画活動

- 高知県立大学 FD 委員会（大学院委員）
- 高知県立大学学生委員会（大学院委員）
- 高知県立大学地域教育研究センター委員会（大学院委員）
- 高知県立大学共通教育専門委員会委員
- 看護学部教授会委員
- 看護学部総務委員会委員
- 看護学研究科委員会委員
- 看護学研究科 FD 委員
- 看護学研究科学生委員
- 高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業（血管病調整看護師フォローアップ事業）責任者

■領域活動

- 大学院博士後期課程研究指導（1 名）
- 大学院慢性看護領域博士前期課程研究指導（1 名）
- 令和 6 年度高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業（血管病調整看護師フォローアップ事業）において、モデル基幹病院 8 施設の血管病調整看護師、ならびに当該地域の福祉保健所と市町村の保健師を対象に、合同連絡会議 5 回、ブロック事例検討会 3 回を開催した。

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 内田雅子、加藤昭尚、窪田美穂、原田千枝（2024）、ワークショップ 4. 臨床と教育機関で取り組む新たな看護学実習、第 50 回高知女子大学看護学会。
- 東めぐみ、伊波早苗、木下幸代、森田夏実、小長谷百絵、内田雅子、黒江ゆり子、本庄恵子、河口てる子（2024）、慢性看護実践における事例研究法の進展 2024－実践事象をどのように解析し、事例研究論文の誕生に繋げるか－、第 18 回日本慢性看護学会学術集会。

瓜生 浩子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本家族看護学会 評議員
 - 日本家族看護学会 教育促進委員会委員
 - 日本家族看護学会 学会誌専任査読者
 - 高知県立大学看護学会 企画委員長
 - 高知県立大学看護学会 学会誌査読委員
 - 高次脳機能障害リハビリテーション講習会2024高知 実行委員
- 所属学会等：日本家族看護学会、日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、
日本災害看護学会、日本看護シミュレーションラーニング学会、
日本医療教授システム学会、日本在宅ケア学会、高知看護教育研究会、
NPO法人脳損傷友の会高知 青い空

■大学・看護学部企画活動

- 研究倫理検討本部 審査委員
- 看護研究倫理審査委員会 副委員長・専門委員会委員長
- 看護学部学生委員会委員 1回生学年担当
- 看護学部臨床実習委員会委員
- 看護学部カリキュラム検討チームメンバー
- 看護学研究科博士前期課程入学試験実施専門部会委員
- 高知医療センターと高知県立大学との包括的連携 看護・社会福祉連携部会委員
- 高知県立安芸高等学校出前講座「看護の仕事の仕組みを考える」講師

■領域活動

<家族看護学領域>

- 修了生を対象としたリカレント教育を Web にて 7 回開催
- 地域の看護専門職者を対象としたケア検討会を Web にて 1 回開催
- 修士論文の論文投稿の支援
- 修了生の家族支援専門看護師資格認定更新への支援

<基礎看護学領域>

- 「基本的な看護技術」の習得状況調査の実施
- 「基本的な看護技術」チェックリスト改訂版の作成

■非常勤講師等

- 関西医科大学大学院看護学研究科 「家族看護学」非常勤講師
- 愛知県立大学大学院看護学研究科 「家族看護援助論」非常勤講師
- 高知県立大学看護学会 公開講座「現場でいかせる！看護研究 第 1 回 研究計画の立案」

講師

- 高知県看護協会 臨床看護研究基礎研修「看護研究における倫理的配慮」講師
- 熊本大学医学部附属病院 看護部研修「家族看護」講師
- 第 50 回高知女子大学看護学会 ワークショップ 3「当事者・家族の知恵を集めて高次脳機能障害と向き合う」話題提供者
- 高次脳機能障害リハビリテーション講習会 2024 高知「あらためて高次脳機能障害者への地域支援を勉強しなします」シンポジスト

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 上村奈緒子, 瓜生浩子, 長戸和子: 医療的ケア児を迎える家族の在宅への移行の見極めに至る看護師の臨床判断, 高知女子大学看護学会誌, 49(2), pp56-67, 2024

【学会発表】

- 1) 長戸和子, 池添志乃, 瓜生浩子, 源田美香, 岩井弓香里, 上村奈緒子, 田中陽子, 永井真寿美, 仁科有紀子, 西村洋子, 野町磨意, 松下由香: 「家族看護エンパワーメントモデル」の活用ー実践を裏づけるナースの思考のプロセスを可視化するー, 日本家族看護学会第 31 回学術集会, 鎌倉, 2024 年 9 月
- 2) 長戸和子, 浅岡裕子, 瓜生浩子, 関根光枝, 服部淳子, 山村江美子: 教育と臨床の視点から考える看護基礎教育における家族看護の基盤づくり, 日本家族看護学会第 31 回学術集会, 鎌倉, 2024 年 9 月

木下 真里(教授)

■審議会や学会活動

- 高知県南海トラフ地震被害想定見直し検討会委員
- 高知県消防広域化基本計画あり方検討会委員
- 高知県防災会議委員
- 高知市水防協議会委員
- 高知県南海トラフ地震高知市長期浸水対策連絡会議アドバイザー
- 高知県南海トラフ地震対策啓発推進事業委託業務プロポーザル審査委員会審査委員長
- 高知県防災啓発動画制作委託業務プロポーザル審査委員会審査委員長
- 高知県南海トラフ地震対策広報番組制作委託業務プロポーザル審査委員会審査委員
- 高知市防災会議委員
- 高知市防災会議幹事
- 共同教育課程運営委員会委員長
- 共同教育課程教務委員・教務部会
- DNGL 部会 学位授与判定部会
- DNGL 部会 教育環境・自己点検評価部会・部会長
- 国際交流センター運営委員（全学大学院）
- 学部国際交流プロジェクトメンバー
- 学部国際交流プロジェクト：ガジヤマダ大学等との協働研究チームリーダー
- 名古屋市立大学進化型実務家教員養成プロジェクト（TEEP）実施委員
- 公立大学防災研究教育センター連携会議メンバー
- WADEN 2025 Tokyo プログラム委員
- WSDN board member
- HEDN Editorial board
- Reviewer, Journal of Primary Care and Community Health
- Reviewer, Journal of preventive medicine
- 高知女子大学査読委員
- 日本国際保健医療学会西日本地方会世話人
- 日本災害医学会国際委員(WSDN 連携ワーキンググループ・リーダー)
- 日本公衆衛生学会認定専門家
- 日本公衆衛生学会モニタリング・レポート委員会（健康危機管理）メンバー
- 日本エイズ学会認定 HIV 感染症看護師
- 国際緊急援助隊感染症対策チーム（疫学班、公衆衛生班）
- GOARN ロスター登録
- 高知医療センター包括連携災害対策連携部会（主）
- 学内災害対策プロジェクト

■大学・看護学部企画活動

- 新入生オリエンテーション南海トラフ地震災害講師
- 2024 第二回県大立志塾「探究★災害時ところと身体の健康」講師
- オープンキャンパス：災害看護ブース主催
- 高知高校訪問
- 進学説明会（土佐塾高校）
- イタリア短期研修引率
- 看護学部独自企画・大規模災害時 BCP「学生の」に関するワークショップ主催

■領域活動

- 高知県総合防災訓練参加
- 緊急人道支援学会への参加

■非常勤講師等

- 貧困と病気の関係 令和 6 年度追手前ゼミナール講師, 高知県立追手前高校

■著書及び研究発表

【記事】

- 1) 木下真里, 未知の出来事に対応する, TEEP Monthly コラム 6 月 25 日, (2024)
<https://teep-consortium.jp/column/20240625/>
- 2) 木下真里, 根拠に基づいた看護ケア～大学教育での取り組み～, TEEP Monthly コラム 10 月 22 日 (2024) <https://teep-consortium.jp/column/20241022/>
- 3) 木下真里, 自然に身につく国際性～高知県立大学 看護学部～, 国際保健を学べる大学・大学院 2, 目で見える WHO, 2025 冬号, No91, pp18-19, (2025)

【学会発表】

- 1) 木下 真里, 後藤 智己, 岩野友里, 柿沼章子, 武田飛呂城, 看護学を専攻する大学生の薬害エイズ事件に関する理解の課題, P-S2-1, 日本エイズ学会, (2024)

嶋岡 暢希(教授)

■審議会や学会活動

- 日本災害看護学会編集委員・査読委員
- 日本助産学会査読委員
- 日本看護シミュレーションラーニング学会査読委員
- 高知県立大学看護学会編集委員長・査読委員
- 高知県母性衛生学会理事
- 高知県看護協会 助産師職能理事
- 高知県周産期医療協議会委員
- 高知県周産期医療あり方検討会委員
- 高知県不妊治療への支援等の在り方に関する検討会委員長

所属学会：日本母性衛生学会、日本助産学会、日本看護科学学会、日本災害看護学会、
高知県立大学看護学会、日本母性看護学会、日本家族看護学会、
日本看護シミュレーションラーニング学会、日本小児看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部臨床実習委員長
- 看護学部カリキュラム検討チームリーダー
- 卒業生繋がり・キャリア支援リーダー
- 高知医療センター包括連携看護部会委員
- 研究費検討ワーキング委員

■領域活動

- 母性助産看護学領域交流会・ケア検討会運営
- 高知 BLSO プロバイダーコース アシスタント

■非常勤講師等

- 高知県看護協会 看護フェア 進学相談会担当
- 高知県看護協会 3 職能合同集会「災害に備えて 3 職能が今できることを考える」企画・運営
- 高知県看護協会 新人助産師合同研修「職業倫理」講師
- 高知県看護協会・高知県助産師会共催 助産師交流会 助産師が実践する「いのちの教育」企画・運営
- 高知県看護協会 外来における在宅療養支援能力向上のための研修 ファシリテーター
- 高知県専任教員養成講習会「看護学教育方法論 看護学実習に向けた準備」講師
- 高知県令和 6 年度子育て応援事業 父親育児支援コンテンツ監修
- 高知県令和 6 年度子育て応援事業 プッシュ型配信メッセージ（妊娠期）監修

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 岩崎順子,中村由美子,嶋岡暢希,高谷恭子,田村恵美,源田美香,三浦由紀子,有田直子,佐東美緒,田之頭恵里,池添志乃,畦地博子,森下安子,中野綾美：小児のエンドオブライフに関わる看護師のコミュニケーションスキル.高知女子大学看護学会誌,49(2),79-90,2024

【学会発表】

- 2) 岩崎順子,嶋岡暢希：With コロナ時代における学士課程助産学生の看護実践力を高める工夫～臨地実習後の沐浴演習を通して～,第42回日本国際保健医療学会西日本地方会,高知,2024

田井 雅子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本精神保健看護学会代議員
 - 日本精神保健看護学会編集委員会委員
 - 日本精神保健看護学会学術連携委員会副委員長
 - 大学設置・学校法人審議会専門委員
 - 高知女子大学看護学会査読委員
 - 日本精神科看護学術集会誌査読委員
- 所属学会：日本精神保健看護学会、日本看護科学学会、日本家族看護学会、
高知女子大学看護学会、日本災害看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 教務委員会委員
- 看護学部総務委員会委員
- 看護学研究科委員会委員
- 看護学部人権委員会委員
- 学部自己点検評価委員・認証評価委員
- 訪問看護スタートアップ研修講師

■領域活動

- 看護相談室の企画・運営（精神看護専門看護師の会との共催）
- 修了生の学会発表支援、論文投稿支援
- 修了生の精神看護専門看護師資格認定への支援

■非常勤講師等

- 高知県看護協会 臨床看護研究基礎研修講師「看護研究論文の書き方と発表」
- 高知県看護協会 高知県専任教員養成講習会講師「看護教育方法論 看護学実習カンファレンス」
- 高知女子大学看護学会 公開講座講師「現場でいかせる！看護研究：事例研究」

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) Hiromi Toki1, Masako Tai, Sayumi Nojima :The Narrowing of Self as Perceived by People in the Early Stages of Dementia—The Second Report. Florence Nightingale Journal of Nursing32(3),p303-311,2024

高谷 恭子(教授)

■審議会や活動報告

- 令和6年度 高知県小児保健協会理事
 - 令和6年度 日本小児看護学会誌専任査読員
 - 令和6年度 高知女子大学看護学会査読員
 - 令和6年度 日本看護学会誌査読委員
 - 令和6年度 高知県看護協会 高知県小児救急電話相談事業運営協議会委員
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本家族看護学会、日本看護協会、日本小児循環器学会、日本小児保健学会、日本小児がん看護学会、日本災害看護学会、日本小児集中治療研究会、日本小児腎不全学会、日本学校保健学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 令和6年度 教務委員（サブ）
- 令和6年度 2回生学年担当（主）
- 令和6年度 臨床実習委員
- 令和6年度 看護開発研究会委員（主）
- 令和6年度 看護研究指導教員
- 令和6年度 学部国際交流プロジェクト：エルムズ大学大学院との交流チームメンバー
- 令和6年度 高知医療センター包括的連携事業 看護学部会委員（主）

■領域活動

- 「小児看護学総論」「小児の健康と看護」「小児看護援助論」の講義を担当。
- 「看護セミナーⅣ（質的研究）」の講義を担当。
- 「総合看護実習（小児）」の実習責任者を担当。
- 「人間と看護」「看護研究方法論」「看護と政策」の一部の講義を担当。
- 「看護研究」（小児グループ）を担当。
- 「小児看護論」「小児看護対象論」「小児看護方法論Ⅰ」「小児看護方法論Ⅱ」「看護研究と実践」「こころの発達」の一部の講義を担当。
- 「小児看護学実践演習Ⅰ」「小児看護学実践演習Ⅱ」の主担当。

■非常勤講師等

- 令和6年度 高知県看護協会「看護研究基礎研修」における「看護研究の基礎知識」の一部講義を担当。
- 令和6年度 高知県看護協会「看護教育方法論Ⅲ」を担当。
- 令和6年度 四国こどもとおとなの医療センター 非常勤講師として5グループの「看護研究指導」を担当。

- 令和 6 年度 高知女子大学看護学会公開講座（質的研究）講義を担当。

■著書及び研究論文

【著書】

- 1) 中野綾美(編著),田中克枝,益守かづき,上野昌江,高谷恭子,佐東美緒,幸松美智子,勝田仁美,二宮啓子,平林優子,川島美保,岡田洋子,染谷奈々子,日沼千尋,宗村弥生,鈴木千衣,三宅一代,品川陽子,萩原綾子,濱田裕子,濱田米紀,有田直子,石浦光世,加藤依子,長谷部貴子,三浦由紀子：ナーシング・グラフィカ小児看護学,1 章 5 節(p.62-81),3 章 2 節 2-7(p.214-236) 3 章 8 節(p.297-309),4 章 1 節(p.334-342),資料 3(p.442-443),2024
- 2) 中野綾美(編著),石浦光世,佐東美緒,萩原綾子,染谷奈々子,濱田米紀,有田直子,幸松美智子,高谷恭子:ナーシング・グラフィカ小児看護学 小児看護技術,10 章(p.250-263),メディカ出版,2024

【論文,報告書】

- 1) 池添志乃,畦地博子,中野綾美,野嶋佐由美,高谷恭子,高谷恭子：家族との協働型エンドオブライフケアの看護介入に関する総説,高知女子大学看護学会誌,49(2),p.1-15,2024
- 2) 岩崎順子,中村由美子,嶋岡暢希,高谷恭子,田村恵美,源田美香,三浦由紀子,有田直子,佐東美緒,田之頭恵里,池添志乃,畦地博子,森下安子,中野綾美：小児のエンドオブライフに関わる看護師コミュニケーションスキル, 高知女子大学看護学会誌,49(2),p.79-90,2024

【学会発表：示説】

- 1) 佃勇輝,高谷恭子,中野綾美：医療的ケア児を育てる親の南海トラフ地震に向けた準備性,日本小児看護学会第 34 回学術集会,大阪,2024 年 7 月

竹崎 久美子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本老年看護学会 災害支援検討委員会（令和6年度～）
所属学会等：日本看護科学学会、日本老年看護学会、日本老年医学学会、日本老年社会科学学会、日本災害看護学会、日本災害医学会、
- 日本老年看護学会第29回学術集会 企画委員

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部総務委員会（平成 28 年度～）
- 看護学部入試実施専門部会委員（平成 28 年度～）
- 入試実施センター部会委員（平成 28 年度～）
- 高知県立大学健康長寿センター「訪問看護スタートアップ研修」、認知症を持つ人の在宅看護、（令和 6 年 5 月 23 日・11 月 6 日）
- 高知県看護協会主催継続教育活動支援
 - ① 『地域災害支援ナース育成研修』（平成25年度～）
 - ② 『災害支援ナース「受援ガイドライン」』研修（令和元年度～）
 - ③ 災害看護委員会、委員（平成24-29年度、令和元年度～）
- 文科省職業実践力育成プログラム（BP）『多職種連携による保健福祉医療従事者の力量アップのための講座』（本学履修証明プログラム）プログラム責任者・講師
(R2 年度以降未開講)

■領域活動

- 「老人看護ケア検討会」：令和 6 年 6 月 11 日、
- 老人看護学領域リカレント教育：令和 6 年 6 月 1 日・8 月 4 日

■非常勤講師・講演等

- 九州大学大学院 医学系学府保健学専攻看護学分野、「質的研究 Grounded Theory Approach」令和 6 年 7 月 18 日・19 日
- 高知学園短期大学（学部クラス 4 コマ）（令和 6 年 10 月）：災害看護について
- 令和 6 年度高知県防災士養成講座：「地域防災と多様性への配慮」（令和 6 年 9 月 29 日安芸市、10 月 14 日香南市、12 月 1 日四万十市、12 月 15 日高知市）

■著書及び研究論文

【調査報告】

- 1) 吉岡 佐知子, 河西 恵美, 四垂 美保, 高梨 早苗, 竹崎 久美子, 西田 珠貴, 山下 いずみ
(2025) : 2022 年度老人看護専門看護師の活動実態調査報告(その 1) 活動の内容と成果について, 老年看護学 29(2), 90-97, 2025.

立木 隆広(教授)

■審議会や活動報告

- 日本衛生学会代議員

所属学会等：日本骨粗鬆症学会，日本骨代謝学会，日本公衆衛生学会，日本衛生学会，
日本疫学会，日本体力医学会，日本運動疫学会，日本公衆衛生看護学会，
American Society for Bone and Mineral Research，日本理学療法士協会

■大学・看護学部企画活動

- 図書館運営本部（大学院）
- 学部入学試験監査専門部
- 情報処理委員会（学部・大学院）
- 予算執行係（大学院）
- 学部国際交流プロジェクト（ガジヤマダ大学等との共同研究チーム）

■領域活動

- 「フレイル予防のための疫学研究」研究代表者・事務局長
- 研究計画の相談及びコンサルテーション
- 学部科目「公衆衛生学」を担当
- 学部科目「健康管理論」を担当
- 学部科目「疫学」を担当
- 学部科目「保健行動論」を担当
- 学部科目「看護研究」を担当
- 大学院前期博士課程科目「疫学研究方法論」を担当

■非常勤講師等

- 「高知市地域包括支援センター担当者連絡会」での講演
- 「高知市いきいき健康チャレンジ 2024 結果報告会」での講演
- 「高知県鍼灸師会生涯研修学術講習会」での講演

■著書及び研究論文

【著書】

- 1) 立木隆広：改訂 疫学・保健統計—看護師・保健師・管理栄養士を目指す— 対象集団の選定政策疫学, p33-37 p135-139, 建帛社, 東京, 2025

【論文】

- 1) Junko Tamaki, Takahiro Tachiki, Myadagmaa Jaalkhorol, Namiraa Dongmei, Misa Komastu, Kouji Tsuda, Asako Kudo, Kuniyasu Kamiya, Katsuyasu Kouda, Etsuko Kajita, Sadanobu Kagamimori, Masayuki Iki. Association of lower serum sclerostin levels with

elevated risk for increased arterial stiffness: The JPOS Cohort Study. J Clin Endocrinol Metab, 2024, dgae795 doi: 10.1210/clinem/dgae795.

【学会発表】

- 1) Yoshiki Shinoda, U Yanagi, Kenichi Azuma, Naoki Kagi, Ikuko Bamba, Takahiro Tachiki. Fungal Flora on Floor Surfaces in 13 Newly Constructed Wooden Houses in Summer. Indoor Air 2024, ハワイ, 令和 6 年 7 月
- 2) Junko Tamaki, Takahiro Tachiki, Kouji Tsuda, Asako Kudo, Kuniyasu Kamiya, Mayumi Uesaka, Katsuyasu Kouda, Naoyuki Takashima, Etsuko Kajita, Masayuki Iki, Sadanobu Kagamimori. Circulating Irisin levels are associated with Insulin Resistance: a Longitudinal Analysis in the Japanese population-based osteoporosis cohort study. 2024 ASBMR Annual Meeting, トロント, 令和 6 年 9 月
- 3) 篠田佳希、柳宇、東賢一、鍵直樹、萬羽郁子、立木隆広、新築木質内装住宅へ転居前後の室内環境の変化, 2024 年度日本建築学会大会〔関東〕. 千代田区, 令和 6 年 8 月
- 4) 玉置淳子、立木隆広、津田晃司、久藤麻子、神谷訓康、今井菜美、上坂真弓、小原久未子、田中美帆、甲田勝康、高嶋直敬、上西一弘、梶田悦子、鏡森定信、伊木雅之. 骨格筋量と脆弱性骨折リスク発生の関連—JPOS コホート研究による縦断的検討. 第 83 回日本公衆衛生学会総会, 札幌市, 令和 6 年 10 月
- 5) 篠田佳希、柳宇、土屋将大、東賢一、鍵直樹、萬羽郁子、立木隆広. 木質住宅における床面付着微生物の経年変化 第 1 報: 4 件の住宅夏期の真菌叢. 2024 年室内環境学会学術大会, 札幌市, 令和 6 年 11 月
- 6) 土屋将大、柳宇、篠田佳希、東賢一、鍵直樹、萬羽郁子、立木隆広. 木質住宅における床面付着微生物叢の経年変化 第 2 報: 4 件の住宅夏季の細菌叢. 2024 年室内環境学会学術大会, 札幌市, 令和 6 年 11 月
- 7) 平澤匠、鍵直樹、海塩渉、東賢一、柳宇、立木隆広、萬羽郁子. 木質住宅内における空気中の Ethanol が Acetaldehyde 濃度に与える影響. 2024 年室内環境学会学術大会, 札幌市, 令和 6 年 11 月
- 8) 上坂真弓、濱田昌実、立木隆広、田中美帆、津田晃司、神谷訓康、玉置淳子. 無症候性椎体骨折発生は地域在住中高年女性の健康関連 QOL (HRQOL) を下げるか Japanese Population-based Osteoporosis (JPOS) コホート研究. 第 13 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 名古屋, 令和 7 年 1 月
- 9) 玉置淳子、立木隆広、濱田昌実、佐藤裕保、今井菜美、久藤麻子、津田晃司、神谷訓康、小原久未子、秦明子、田中美帆、甲田勝康、高嶋直敬、北川淳、上西一弘、梶田悦子、鏡森定信、伊木雅之. 椎体骨折発生に対するカルシウム摂取の影響評価—JPOS コホート研究による検討. 第 35 回日本疫学会学術総会, 高知市, 令和 7 年 2 月
- 10) 藤田裕規、甲田勝康、玉置淳子、佐藤裕保、立木隆広、梶田悦子、文鐘聲、岡本希、伊木雅之. 低骨密度の高齢男性において循環器疾患既往は脆弱性骨折リスクを高める: 藤原京スタディ男性骨粗鬆症研究. 第 35 回日本疫学会学術総会, 高知市, 令和 7 年 2 月

中野 綾美(特任教授)

■審議会や学会活動

- 一般在団法人日本看護学教育評価機構評価基準検討委員会委員
 - 日本看護科学学会代議員
 - 日本看護倫理委員会評議員
 - 高知県立大学看護学会運営委員長
- 所属学会等：日本看護科学学会,日本小児看護学会,日本家族看護学会,日本小児保健学会,
日本災害看護学会,日本看護倫理学会,高知県立大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学研究科委員会委員としての活動

■領域活動

- 博士論文の副論文の投稿(研究)支援
- 修士論文の投稿(口頭発表・原著)支援
- 修了生の CNS 認定申請への支援

■著書及び研究論文

【著書】

- 1) 中野綾美(編著),田中克枝,益守かづき,上野昌江,高谷恭子,佐東美緒,幸松美智子,勝田仁美,二宮啓子,平林優子,宗村弥生,川島美保,岡田洋子,染谷奈々子,鈴木千衣,三宅一代,品川陽子,萩原綾子,濱田裕子,濱田米紀,有田直子,石浦光世:ナーシング・グラフィカ小児看護学 1 章 1 節(p.16-22),3 章 3 節(p.237-251) 3 章 8 節(p.297-310), 大阪, 2024.
- 2) 中野綾美(編著), 石浦光世, 佐東美緒, 萩原綾子, 染谷奈々子, 濱田米紀, 有田直子, 幸松美智子, 高谷恭子, 加藤依子, 三浦由紀子: ナーシング・グラフィカ小児看護学 小児看護技術, 1 章(p.16-30), メディカ出版, 大阪, 2024.

【論文】

- 1) 山崎麗子,畦地博子,中野綾美:在宅療養している子どもの経管栄養導入に対する親の意思決定, 高知女子大学看護学会誌 49(1),pp.38-46,2024.
- 2) 池添志乃,畦地博子,中野綾美,野嶋佐由美,高谷恭子:家族との協働型エンドオブライフケアの看護介入に関する総説,高知女子大学看護学会誌 49(2),pp.1-15,2024.
- 3) 岩崎順子,中村由美子,嶋岡暢希,高谷恭子,田村恵美,源田美香,三浦由紀子,有田直子,佐東美緒,田之頭恵里,池添志乃,畦地博子,森下安子,中野綾美:小児のエンドオブライフに関わる看護師のコミュニケーションスキル,高知女子大学看護学会誌 49(2),pp.1-15,2024.
- 4) 石橋かず代,中野綾美:青年期小児慢性疾患患者のセルフマネジメントにおける自立過程と影響する要因に関する文献検討, 高知女子大学看護学会誌 49(2),pp.16-32,2024.

【学会発表】

- 1) 佃勇輝、高谷恭子、中野綾美：医療的ケア児を育てる親の南海トラフ地震に向けた準備性、日本小児看護学会第34回学術集会, 2024.

有田 直子(准教授)

■審議会や学会活動

- 日本小児看護学会編集委員会委員
 - 高知女子大学看護学会査読委員
 - 日本小児看護学会評議員
 - 「医療的ケア児および重度の障がいのある子どもの支援検討会」委員(高知市)
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本小児看護学会、日本家族看護学会、
日本小児がん看護学会、日本緩和医療学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部広報委員長
- 4 回生学年担当
- 令和 6 年度訪問看護スタートアップ研修講師(「医療的ケアを必要とする小児の在宅看護」)

■領域活動

- 修了生の CNS 認定申請への支援
- 高知医療センター包括連携事業(小児領域)

■非常勤講師等

- 徳島文理大学大学院看護学研究科非常勤講師(「コンサルテーション論」)

■著書及び研究論文

- 1) 染谷奈々子,平田美佳編集：こどもまんなか小児看護技術(第Ⅲ章療養・生活の支援①痛みのアセスメント：有田直子)，48-56，へるす出版，東京，2024
- 2) 有田直子(2024)：こどもの shared decision making こどもとの対話を通じたアプローチを考える，小児看護，47(12)，1432-1437
- 3) 有田直子(2025)：こどもまんなか小児看護専門看護師としての実践力を培う大学院における教育，小児看護，48(4)，457-461
- 4) 岩崎順子,中村由美子,嶋岡暢希,高谷恭子,田村恵美,源田美香,三浦由紀子,有田直子，佐東美緒，田之頭恵里，池添志乃，畦地博子，森下安子，中野綾美(2024)：小児のエンドオブライフにかかわる看護師のコミュニケーションスキル，高知女子大学看護学会誌，49(2)，79-90

内川 洋子(准教授)

■審議会や活動報告

- 日本看護管理学会評議員、専任査読委員
- 日本看護研究学会中国・四国地方会 運営委員、学術委員会委員
- 日本看護学会 日本看護学会誌 論文査読委員
- 高知県看護協会 認定看護管理者教育運営委員会
- 高知県看護教育研究会副会長

所属学会等：日本看護科学学会、日本看護学教育学会、日本看護管理学会、
日本看護研究学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学研究科人権委員
- 看護研究倫理審査委員会委員
- 高知医療センター包括連携看護部会委員
- 高知医療センター包括連携災害対策連携部会委員
- カリキュラム検討チーム（サブリーダー）

■領域活動

- 看護管理学領域ケア検討会、リカレント教育
- 看護管理学領域抄読会
- 博士前期課程修士論文指導（主査1名、副査2名）
- 基礎看護学領域の学部研究指導（5名）

■非常勤講師等

- 日本看護協会神戸研修センター「主任のための/師長のための組織管理入門—自部署の問題を組織管理の視点で考える—」研修講師
- 高知県看護協会認定看護管理者教育ファーストレベル「人材管理Ⅰ」研修講師
- 高知県専任教育養成講習会「専門領域別看護論演習」研修講師
- 高知医療センター包括連携事業「グループマネジメント」研修講師
- 高知医療センター包括連携事業「マネジメント・リフレクション」講師、演習支援
- 高知医療センター包括連携事業「看護研究4」研究指導
- 岡山医療センター「看護実践とリフレクション—看護場面の意味付け—」研修講師
- 日本医療福祉生活協同組合連合会「マネジメント・リフレクション」研修講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 1) 内川洋子、山田覚、久保田聡美：看護管理実習におけるグループ活動に関する学生のまなび—

- 学生の評価と振り返りを基に-、第31回日本看護教育学会学術集会、令和3年8月
- 2) 藤本真紀、内川洋子：新人看護教員教育担当者が用いるメタ認知、第31回日本看護教育学会学術集会、令和3年8月

【研究論文】

- 1) 藤本真紀、内川洋子、長戸和子：新人看護職員教育担当者が用いるメタ認知と影響要因、高知女子大学看護学会誌、48（2）、23-35、2023
- 2) 森本紗磨美、井東恵、内川洋子、中尾裕子、木下真理：大学に併設される救護所運営における課題の明確化；基幹災害拠点病院から派遣される医療従事者の視点から、高知県立大学紀要 看護学部編、第73巻、1-9、2024

小澤 若菜(准教授)

■審議会や学会活動

- 高知県人材育成ガイドライン評価検討会委員
 - 国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員
 - 高知市地域保健推進協議会委員
 - 高知市地域密着型サービスの運営に関する委員会委員
 - 高知市保健師人材育成評価検討会委員
 - 土佐市災害時要配慮者支援体制連絡協議会委員
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本地域看護学会、日本公衆衛生看護学会、
日本災害看護学会、日本公衆衛生学会、日本産業衛生学会、
高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 学部学生委員会（3回生担当）
- 学部保健師国家試験対策委員担当
- 学部臨床実習委員会
- 学部カリキュラム検討委員チーム

■領域活動

- 高知県新任期・中堅期保健師支援プログラムの企画実施への支援
- 高知県新任期・中堅期保健師研修会 講師
- 高知県幡多福祉保健所新任研修、地域保健福祉活動報告会 講師
- 高知県国保連合会保健事業支援・評価の助言、ヘルスアップ推進員研修会 講師
- 高知県保健師交流大会実行委員として交流大会の運営
- 高知産業保健推進センターの相談業務及び研修会 講師
- 高知産業保健推進センター「高知県における衛生管理者の職務実態調査」の実施
- 高知県「高知県人材育成ガイドラインの評価における調査研究」の実施

■非常勤講師等

- 高知産業保健総合支援センター相談員
- 群馬大学大学院保健学研究科「地域看護学方法論演習1」担当

■著書及び研究論文

【論文】

渡邊 聡子, 大川 宣容, 小澤 若菜, 高谷 恭子, 藤代 知美, 山中 福子：3回生領域別看護実習における課題レポートの成果と課題 レポートのテーマおよびループリックを用いた教員評価の分析から, 高知県立大学紀要(看護学部編)73,p11-20,2024

【学会発表】

小澤 若菜, 川本 美香, 高橋 真紀子, 池知 亜弥, 酒井 美枝：中堅期保健師の人材育成に関する
文献検討，令和 6 年度四国公衆衛生研究発表会，2025 年 2 月，松山市

川上 理子(准教授)

■審議会や学会活動

日本看護科学学会会員
日本在宅ケア学会 監事
日本医療マネジメント学会会員
日本家族看護学会会員
高知女子大学看護学会会員、論文査読委員

■大学・看護学部企画活動

- ・ 高知県立大学国際交流センター運営委員会委員
- ・ 看護学部国際交流プロジェクトリーダー
- ・ 保健師国家試験対策委員
- ・ 高知県立大学看護学部同窓会会計
- ・ 健康長寿センター事業（高知県からの受託）「退院支援体制推進事業」企画、運営
- ・ 健康長寿センター事業（高知県障害保健福祉課からの受託）
「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修（特定の者）」運営、研修講師
- ・ 健康長寿センター事業—中山間地域訪問看護師養成講座
「在宅人工呼吸器装着者のケア」「難病患者の家族ケア」研修講師

■領域活動

- ・ 在宅看護領域修了生の会の企画・運営
- ・ 在宅看護領域ケア検討会の企画・運営

■非常勤講師等

- ・ 高知リハビリテーション専門職大学 非常勤講師「地域包括ケア論」担当
- ・ 土佐市民病院卒後3年目研修 研究指導
- ・ インドネシア西ジャワ州看護協会主催 国際セミナー「看護実践における遠隔医療：コストとケアの質」ゲストスピーカー

■著書及び研究論文

【学会発表】

- ・ 扇谷静香、川上理子，治療抵抗性心不全をもつ後期高齢者への訪問看護師による緩和ケア，第29回日本在宅ケア学会学術集会，（2024. 8. 25）
- ・ 乾由美、川上理子，医療処置が必要な高齢者への訪問看護師による在宅移行支援，第29回日本在宅ケア学会学術集会，（2024. 8. 25）
- ・ 竹中英利子、川上理子、森下幸子，慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント—看護介入の必要性の高い患者を捉える—，第29回日本在宅ケア学会学術集会，（2024. 8. 25）

田代 真理(准教授)

■審議会や活動報告

- 日本ホスピス緩和ケア協会 教育支援委員会看護支援教育支援部会員
 - 第 29 回日本緩和医療学会学術大会 一般演題ポスター座長
 - 日本緩和医療学会学術大会支援メンバーWG WG 員
 - EOL 研究会 リフレクションマッププログラムの企画・運営
 - 高知県立大学看護学会誌査読委員
- 所属学会等：日本がん看護学会、日本緩和医療学会、高知女子大学看護学会、
日本看護科学学会、日本看護管理学会、聖路加看護学会
日本在宅医療連合学会、

■大学・看護学部企画活動

- 高知医療センターとの包括的連携事業
- FD 委員会
- 看護開発研究会担当（サブ）
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座 「訪問看護スタートアップ研修」講師 2 回

■領域活動

- がん高度実践看護師 APN コース（運営サポート、がんサバイバー看護展開論）
- 看護相談室「質の高いがん看護実践を検討する会」（第 2 回事例展開案）
- 令和 6 年度がん教育外部講師派遣事業：高知県立山田特別支援学校高等部、高知県立日高特別支援学校高等部高知しんほんまち分校

■非常勤講師等

- 聖路加国際大学
リカレント教育部認定看護師教育課程（訪問看護）における講義 2 回
大学院（在宅看護領域） 講義 1 回
- ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム 講師
- 北海道医療大学次世代のがんプロフェッショナル養成プラン 講師

■著書及び研究論文

【著書】

- 1) 宇野さつき, 柏谷裕子, 倉持雅代, 田代真理, 浜本千春編：アプローチのヒントがみえる 病院と地域をつなぐ在宅がん看護事例集, へるす出版, 2025
- 2) 田代真理: 在宅ケアでどのように ACP を進めていけばよいのか, 緩和ケア, 34 (3), 226-230, 2024
- 3) 田代真理: がん看護キーワード 15～がん看護実践の基本～グリーフケア, がん看護, 29 (3), 297 - 299, 2024

【学会発表】

- 1) 飯岡由紀子,渡辺直美,高山裕子,田代真理,廣田千穂,木原円子,遠藤まりえ：「看護職を対象としたリフレクションマッププログラム（RMP：答えは自分の体験の中にある）を臨床で活用するメリット」，第 28 回日本看護管理学会学術集会，名古屋，令和 6 年 8 月
- 2) 田代真理，藤田佐和，廣瀬未央他：認知症を併せもつ高齢がん患者へのがん看護専門看護師の看護支援，第 39 回日本がん看護学会学術集会，札幌，令和 7 年 2 月

中井 寿雄(准教授)

■審議会や学会活動

所属学会：日本ケアマネジメント学会，日本看護科学学会，日本災害看護学会，日本精神保健看護学会，日本公衆衛生学会，日本災害医学会，日本在宅医療連合学会，日本小児保健協会，高知女子大看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 高知県立大学図書館運営本部委員
- 高知県立大学学部入試監査委員
- 高知県立大学大学院入試監査委員長
- 高知県立大学大学院広報委員
- 高知県立大学健康長寿研究センター委員

■領域活動

- 在宅看護学領域事例検討会コーディネーター

■非常勤講師等

- 奈良県オストメイト災害対策訓練講師「K-DiPS を用いた備蓄計画、安否確認」
- 奈良県看護協会；多職種連携会議講師：K-DiPS の紹介・BCP について
- 高知大学& 高知県立大学&高知工科大学医工連携交流会講師：災害時要支援者からの SOS 受信と支援者からの安否確認機能を実装した K-DiPS® BCP
- 令和 6 年度夏期 県民大学公開講座講師：地域防災の未来へ！K-DiPS Solo でつくる自助・共助の新たなカタチ
- 一社高知在宅ケア支援センター職員研修講師：K-DiPS を用いた災害訓練
- 損害保険ジャパン株式会社 高知支店「自治体の課題解決に関する勉強会」講師：K-DiPS でつくる地域防災の新たなカタチ
- 第 27 期室戸健康大学講師：認知症と地域防災
- 高知県訪問看護ステーション連絡協議会，訪問看護管理者研修（机上訓練）講師
- 日本在宅医療連合学会地域フォーラム香川大会シンポジスト，療的ケア児の防災・災害支援：医療的ケア児からの SOS 受信と支援者からの安否確認機能を実装した K-DiPS BCP
- 第 1 回発達障がい児を対象とした防災研修会 in げいせい講師，災害対策支援-K-DiPS の紹介
- 2024 年奈良県東和中和南和医療圏防災会議講師，K-DiPS の紹介
- 高知市居宅介護支援事業所協議会防災研修会講師，能登半島地震でケアマネジャーはどう動いたか

【メディア出演：有識者コメント】

- NHK 青森放送局, 医療的ケア児の災害対策について, 2024 年 7 月放送
- NHK 大阪, 医療的ケア児の災害対策について, 2024 年 8 月放送
- NHK 徳島放送局, 医療的ケア児の避難訓練について, 2025 年 2 月放送

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 中井寿雄, 中井有里, 堀池諒, 板谷智也 (2024), 高知県の訪問看護ステーションにおける空間アクセシビリティの評価. 日本看護科学学会誌, 43: 52-760.
- 2) Masato Oe, Hisao Nakai, Yutaka Nagayama (2024), Factors Related to the Willingness of People with Mental Health Illnesses Living in Group Homes to Disclose Their Illness to Supporters during Disaster Evacuation: Cross-sectional Study. Nursing Reports, 14(2), 1014-1025.
- 3) Ryo Horiike, Tomoya Itatani, Hisao Nakai, Daisuke Nishioka, Aoi Kataoka, Yuri Ito (2024), Using Spatial Scan Statistics and Geographic Information Systems to Detect Monthly Human Mobility Clusters and Analyze Cluster Area Characteristics. JMA Journal, 7(3), 319-327.
- 4) Tomoya Itatani, Hisao Nakai, Yutaro Takahashi, Chika Togami (2024), Factors associated with behavioral and weight changes across adult to elderly age groups during the COVID-19 pandemic. Nutrition Research and Practice. 18, 4, 544-553.
- 5) Yoshiko Kitamura, Hisao Nakai, Ikumo Naruse, Miku Yazaki, Yukie Maekawa, Kazuo Yasumoto (2024), Effect of the 2024 Noto Peninsula earthquake on outpatient chemotherapy among cancer survivors in Japan: a retrospective study. MC Cancer. 24(1), 990.
- 6) Hisao Nakai, Kuniko Ishii, Takako Sagino (2024), Turnover Intention among Staff Who Support Older Adults Living Alone in Japan: A Cross-Sectional Study. Social science, 13(9). 463.
- 7) Hisao Nakai, Masato Oe, Yutaka Nagayama (2024), Factors related to evacuation intention when a Level 4 evacuation order was issued among people with mental health illnesses using group homes in Japan: A cross-sectional study. Medicine, 103(36), e39428.
- 8) Yusuke Nitta, Reiko Hashimoto, Yoshihito Shimizu, Yuri Nakai, Hisao Nakai (2025), Adherence to Outpatient Care among Individuals with Pre-existing Psychiatric Disorders Following the 2024 Noto Peninsula Earthquake: A Retrospective Study. PCN Reports, 4(1), e70059.
- 9) Shingo Oe, Hisao Nakai, Yutaka Nagayama, Masato Oe, Chinatsu Yamaguchi(2025), Factors Associated with Worsening Post-Earthquake Psychiatric Symptoms in Patients Receiving Psychiatric Visiting Nurse Services during the 2024 Noto Peninsula Earthquake: A Retrospective Study. Psychiatry International, 6(1), 14.

【学会発表】

- 1) 大江真人, 中井寿雄, 長山豊(2024), グループホームに入居している障害者の災害への備えと避難意思, 日本精神保健看護学会第 34 回学術集会・総会, 2024 年 6 月
- 2) 中井寿雄, 中井有里(2024), 高知県の津波及び河川氾濫想定における精神科医療機関の地上階別浸水率の推計, 日本精神保健看護学会第 34 回学術集会・総会, 2024 年 6 月
- 3) 中井寿雄, 中井有里, 松本祐佳里 (2024), 医療的ケア児の自助・共助に資するスマホアプリと安否確認や SOS 受信が可能なウェブアプリの評価, 第 71 回日本小児保健協会学術集会, 2024 年 6 月
- 4) 板谷 智也, 小島 路生, 田中 純一, 堀池 諒, 佐々木 亮平, 柴田 邦臣, 野口 晃, 平子 紘平, 佐無田 光, 中井 寿雄, 田中 健太郎, 高橋 裕太郎 (2024), 令和 6 年能登半島地震の現地状況と活動報告, 日本地域看護学会第 27 回学術集会, 2024 年 6 月
- 5) 堀池 諒, 青崎聖花, 小松 清か, 二宮遥, 川井ゆう, 松本若菜, 板谷智也, 佐々木亮平, 中井寿雄, 田中健太郎, 高橋裕太郎(2024), WebGIS を用いた能登半島地震における保健師活動支援マップの作成, 日本地域看護学会第 27 回学術集会, 2024 年 6 月
- 6) 中井寿雄, 中井有里, 板谷智也, 堀池諒 (2024), 個別避難計画の立案が可能なスマートフォンアプリの開発, 第 6 回日本在宅医療連合学会大会, 2024 年 7 月
- 7) 中井寿雄, 北村佳子, 成瀬生萌, 矢崎未来, 前川幸江 (2024), 令和 6 年能登半島地震で被災したがんサバイバーにおける受診経路の可視化, 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 2024 年 12 月
- 8) 北村佳子, 中井寿雄, 成瀬生萌, 矢崎未来, 前川幸江 (2024), 令和 6 年能登半島地震における外来化学療法を受けるがんサバイバーの被災状況, 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 2024 年 12 月
- 9) 成瀬生萌, 北村佳子, 中井寿雄, 矢崎未来, 前川幸江 (2024), 令和 6 年能登半島地震によって予約受診ができなかったがんサバイバーの特徴, 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 2024 年 12 月
- 10) 北村佳子, 中井寿雄, 成瀬生萌, 矢崎未来, 前川幸江 (2024), 別居家族介護者における外来化学療法を受けているがんサバイバーの通院支援の負担, 第 39 回日本がん看護学会学術集会, 2025 年 2 月

畠山 卓也(准教授)

■審議会や学会活動

- 日本精神保健看護学会 理事
- 日本精神保健看護学会 代議員
- 日本精神保健看護学会 学術連携委員会委員長
- 日本精神保健看護学会 査読委員
- 日本家族看護学会 災害対策委員会委員
- 日本家族看護学会 査読委員
- 日本精神科看護協会 認定制度部会委員
- 日本精神科看護協会 査読委員
- 日本精神神経学会 多職種協働委員会委員
- 日本看護協会 日本看護学会誌査読委員
- 高知女子大学看護学会 査読委員
- 東京女子医科大学看護学会 査読委員

所属学会等：日本看護科学学会、高知女子大看護学会、日本精神保健看護学会、
日本家族看護学会、日本災害看護学会、日本精神神経学会、
東京女子医科大学看護学会、日本看護協会、日本精神科看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 大学院博士前期課程 教務委員（サブ）
- 看護研究倫理審査委員会 委員
- 看護学部実習委員会 委員
- 看護学部FD委員会 委員
- 地域教育研究センター運営委員（看護学部）

■領域活動

- 看護相談室の企画・運営（精神看護専門看護師の会との共催）
- 修了生の精神看護専門看護師資格認定への支援

■非常勤講師等

- 大学院非常勤講師
 - 1) 東京女子医科大学大学院看護学研究科博士前期課程
「精神看護学特論（精神看護と倫理）」4 コマ
 - 2) 奈良県立医科大学大学院看護学研究科博士前期課程
「家族看護学（精神疾患をもつ人とその家族の看護支援）」4 コマ
- 講演会・研修会講師
 - 1) 日本精神科看護協会精神科認定看護師コース研修会「看護研究（2 日）」「精神科急性期看護（1 日）」
 - 2) 日本精神科看護協会「認定看護師ブラッシュアップセミナー（1 日）」「東京都支部研修会

(精神科における行動制限と倫理・半日)」「新潟県支部研修会(精神科看護における倫理；虐待防止と行動制限・1日)」

- 3) 全国訪問看護事業協会「精神科訪問看護研修会 (GAF 評価と実際)」年間 5 回
- 4) 仁明会精神衛生研究所 (西宮市) 研修会講師 (1 日)
- 5) 日本精神科病院協会北海道支部講演会講師 (半日)
- 6) 東京都精神科病院協会講演会講師 (半日)
- 精神看護専門看護師としての外部コンサルテーション活動
 - 1) 医療法人社団恵友会三恵病院 (東村山市) : 看護師を対象としたコンサルテーションおよび虐待防止委員会委員 (外部委員)
 - 2) 医療法人須藤会土佐病院 (高知市) : 事例検討会アドバイザー (年間 2 回)

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 畠山卓也、西池絵衣子、竹林令子、岡京子 : 「在宅療養を支える精神科外来看護についての実態調査(第 1 報) 看護管理者を対象とした調査結果」、『日本精神科看護学術集会誌』、66(2)、pp8-12、2024 年
- 2) 畠山卓也、西池絵衣子、竹林令子、岡京子 : 「在宅療養を支える精神科外来看護についての実態調査(第 2 報) 「療養生活継続支援加算」の支援担当者を対象とした調査結果」『日本精神科看護学術集会誌』、66(2)、pp13-17、2024 年
- 3) 岡京子、畠山卓也、松尾真規子 : 「精神科病院に入院する患者のおむつ使用に至る経緯とおむつ離脱に向けた看護のかかわり」、『駒沢女子大学看護学部研究紀要』、2、pp1-12、2024 年
- 4) 畠山卓也、岡京子、茅根寛子、小倉圭介、長谷川陽子、関川薫、渡辺純一 : 「精神看護専門看護師による対話を通じた 3 年間の継続支援を受けた精神科新卒看護師の体験」、『駒沢女子大学看護学部研究紀要』、2、pp13-24、2024 年

【学会発表等】

- 1) 畠山卓也 : 今、求められる精神看護外来の専門性-精神科高度実践看護師の行う看護外来の実践状況とその課題、第34回日本精神保健看護学会学術集会・シンポジウム、2024年5月
- 2) 則村良、西池絵衣子、浅沼瞳、三井督子、岡京子、小山達也、竹林令子、辻脇邦彦、渡辺純一、田井雅子、畠山卓也 : 精神科臨床の看護外来における実践の共有と洗練化、第34回日本精神保健看護学会学術集会・交流集会、2024年5月
- 3) 池添志乃、田井雅子、森下幸子、藤代知美、畠山卓也、中野綾美、野嶋佐由美 : 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援のあり方ー7つの看護アプローチの臨床への活用ー、日本家族看護第31回学術集会交流集会15、神奈川、2024年9月

村川 由加理(准教授)

■審議会や学会活動

所属学会等：日本看護医療学会、日本看護科学学会、日本救急看護学会、日本がん看護学会、日本クリティカルケア看護学会、日本自然災害学会、日本集中治療医学会、高知県立大学看護学会、なごや看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 1 回生学年担当としての活動
- 看護研究倫理審査委員会委員としての活動
- 学部内災害対応整備関係としての活動
- オープンキャンパスの急性期看護学ブース企画・監修

■領域活動

- ケア検討会の企画・運営（2 回/年）
- 学部学生の研究・教育活動
- 卒業生の看護研究の学会発表支援、論文投稿支援

■著書及び研究論文

- 村川由加理, 薊隆文, 加古英介, 船越登, 内田宗志. 看護介入が可能な術後せん妄に対する術前の影響要因の検討—全身麻酔で股関節手術を受けた高齢者の調査から—, 高知県立大学看護学会誌, 0(1), pp42-51, 2024.
- 石津舞桜, 徳永旭, 新村美友, 澤田晴菜, 萩間耶月, 塚北真優子, 村川由加理, 大川宣容. 腹腔鏡下胃切除術患者の術後早期における苦痛体験, 日本看護科学学会学術集会講演集, 44th-suppl, p508, 2024.

【学会発表】

- 石津舞桜, 徳永旭, 新村美友, 澤田晴菜, 萩間耶月, 塚北真優子, 村川由加理, 大川宣容. 腹腔鏡下胃切除術患者の術後早期における苦痛体験, 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 熊本, 2024 年 12 月.

森下 幸子(准教授)

■審議会や学会活動

- 高知県訪問看護推進協議会 委員長
 - 高知県人生の最終段階における医療・ケア検討会議 委員
 - 高知県重症心身障害者等支援体制整備協議会 委員
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本在宅ケア学会、高知女子大看護学会
日本家族看護学会、日本地域看護学会、日本医療マネジメント学会
日本訪問看護財団 全国訪問看護事業協会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿研究センター運営委員
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座 責任者「訪問看護スタートアップ研修」兼担

■領域活動

- 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修 修了生フォローアップ研修
- 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修 修了生継続コンサルテーション
- 新卒訪問看護師育成のための就職ガイダンス（高知県内大学・看護専門学校）
- 在宅看護領域ケア検討会

■非常勤講師等

- 高知リハビリテーション専門職大学「地域包括ケア論」非常勤講師
- 国立病院機構高知病院附属看護学校「地域で暮らす人々を支える看護」非常勤講師
- 高知開成専門学校「地域・在宅看護論」非常勤講師
- 社会福祉法人ファミリーユ高知 評議員
- 医療法人長生会大井田病院 研究倫理審査会 外部委員
- 高知県看護協会訪問看護ステーション運営委員会 委員
- 高知県訪問看護連絡協議会アドバイザー 年6回
- 高知県訪問看護相談支援センター 監事 年6回
- 高知県地域医療連携ネットワーク会 ACP 研修 アドバイザー
- 高知県 ACP 市町村担当者等情報交換会 講師
- 第34回高知市西部地域医療カンファレンス「ACP」 講師
- 中芸広域連合 中芸 de 生きたいを応援する会 アドバイザー 年3回
- 高知県中央西福祉保健所令和6年度 ACP 研修会 講師 年3回
- 高知県中央西福祉保健所令和6年度 退院支援体制強化研修アドバイザー 年4回
- 高知県安芸市介護教室・ケアカフェ ACP 研修 講師
- 高知県在宅医療推進フォーラム実行委員・シンポジウム座長「意思決定支援」
- 社会医療法人近森会近森病院 ACP 講演会 講師
- 令和6年度高知県中山間地域等訪問看護師育成研修「フィジカルアセスメント」ファシリテ

ーター

- 高知県子ども・福祉政策部障害福祉課「医療ケア実技研修」運営サポート 年2回

■著書及び研究論文

- 1) 山本かよ, 小原弘子, 森下幸子 : 新人訪問看護師対象フィジカルアセスメント学習で活用するシミュレーショントレーニングシナリオの開発 : 発熱している高齢在宅療養者の対応, 日本看護シミュレーションラーニング学会誌, 2(0), 30-38, 2024

【学会発表等】

- 1) 森下幸子, 池添志乃, 佐東美緒, 藤代知美 : ヤングケアラーとその家族の家族レジリエンスを高める看護, 日本家族看護第31回学術集会, 神奈川, 2024年9月
- 2) 竹中英利子, 森下幸子, 川上理子 : 慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメントー看護介入の必要性の高い患者を捉えるー, 第29回日本在宅ケア学会学術集会, 神奈川, 2024年8月
- 3) 三本芳, 中村真菜, 濱田純, 福永一郎, 小松倫子, 川村尚美, 森下幸子 : 中山間地域のACP(アドバンスケアプランニング)研修, 日本緩和医療学会第6回中国・四国支部学術大会(ポスター), 鳥取, 2024年8月
- 4) 池添志乃, 田井雅子, 森下幸子, 藤代知美, 畠山卓也, 中野綾美, 野嶋佐由美 : 災害後における家族レジリエンスを促す看護支援のあり方ー7つの看護アプローチの臨床への活用ー, 日本家族看護第31回学術集会交流集会15, 神奈川, 2024年9月
- 5) 森下幸子 : 地域で展開するACP - 四国各県からの報告、高知家のACP実践と展開, 日本在宅医療連合学会第6回地域フォーラム四国シンポジウム, 香川, 2024年10月

岩崎 順子(講師)

■審議会や学会活動

- 高知県立大学看護学会 書記
- 高知県立大学看護学会 査読委員
- 高知県看護協会 看護研究倫理審査委員会

所属学会等：日本看護科学学会、高知県立大看護学会、日本母性看護学会、日本母性衛生学会、日本助産学会、家族看護学会、思春期学会、日本周産期・新生児医学会、人工知能学会、日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部学生委員会（2回生学年担当）
- 看護学部助産師国家試験対策委員

■領域活動

- 母性・助産ケア検討会の企画・運営
- 母性・助産Study・Meetingの企画・運営

■非常勤講師等

- 高知女子大学看護学会公開講座「量的データの収集と分析結果の読み方」講師
- 第50回高知女子大学看護学会 リレートーク『新たな看護実践知を「共」に「創」ろう』スピーカー

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 岩崎順子：家族への遠隔看護に関する文献検討，日本看護科学学会誌，44，578-589，2024.
- 2) 岩崎順子：乳幼児家族へのハイブリッド看護に関する認識とヘルスリテラシーとの関連 ～乳幼児家族と看護職者との比較～，日本母性看護学会誌，25(1)，17-25，2024.
- 3) 岩崎順子：低出生体重児を抱える家族の Family Confidence を育む看護介入，日本母性看護学会誌，24(2)，25-31，2024.
- 4) 岩崎順子，中村由美子，嶋岡暢希，高谷恭子，田村恵美，源田美香，三浦由紀子，有田直子，佐東美緒，田之頭恵里，池添志乃，畦地博子，森下安子，中野綾美：小児のエンドオブライフに関わる看護師のコミュニケーションスキル，高知女子大学看護学会誌，49(2)，79-90，2024.
- 5) 横田莉穂子，武井琉宇，大田穂佐菜，田中妃奈，中山莉那，林姫菜子，岩崎順子：With/After コロナにおける幼児期の子どもを持つ家族の適応，高知女子大学看護学会誌，49(2)，101-109，2024.

【学会発表】

- 1) 岩崎順子：乳幼児を抱える家族へのハイブリッド型看護に関する看護職者の意識及びヘルスリテラシー，第 26 回 日本母性看護学会学術集会，兵庫，2024. 5.
- 2) 岩崎順子，嶋岡暢希：With コロナ時代における学士課程助産学生の看護実践力を高める工夫 ～臨地実習後の沐浴演習を通して～，第 42 回日本国際保健医療学会西日本地方会，高知，2024. 3.
- 3) 武井琉宇，横田莉穂子，大田穂佐菜，田中妃奈，中山莉那，林姫菜子，岩崎順子：With/After コロナにおける幼児期の子どもを持つ家族の適応の実態 ～Roy の適応看護モデルに基づく家族の適応様式に注目して～，第 42 回日本国際保健医療学会西日本地方会，高知，2024. 3.

山中 福子(講師)

■審議会や学会活動

所属学会等：日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本看護学教育学会、日本慢性看護学会、日本循環器看護学会、日本心臓リハビリテーション学会、高知女子大学看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 学生委員会（3 回生学年担当）
- 学部自己点検評価委員・認証評価
- 総務事務
- 健康長寿：糖尿病保健指導連携体制構築事業
- 高知県立大学看護学部同窓会書記

■領域活動

- 専門職人材育成事業として、委託事業の運営活動などを行う。
糖尿病保健指導連携体制構築事業（健康長寿センター）においてモデル基幹病院に対して血管病調整看護師の育成に向けた合同連絡会、ブロック会議、公開講座参加
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の「慢性疾患をもつ在宅療養者の看護」の科目において、講義および演習での学習支援を 2 回（7 月、12 月）実施

■非常勤講師等

- 令和 6 年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル（公益社団法人高知県看護協会）において「レポートの書き方」について実施

飯田 悠花(助教)

■審議会や学会活動

所属学会：高知県立大学看護学会、日本国際保健医療学会

所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 卒業生繋がり・キャリア支援プロジェクト（メンバー）
- 学部自己点検評価委員・認証評価
- 自己学習教育環境整備・管理

■領域活動

- 母性・助産看護領域リカレント教育運営
- 高知BLSOアシスタント

池内 香(助教)

■審議会や学会活動

- 高知女子大学看護学会 査読委員
- 日本精神科看護協会 査読委員

所属学会等：高知女子大学看護学会,日本看護科学学会,日本精神保健看護学会,日本精神科救急学会,日本家族看護学会,日本看護シミュレーションラーニング学会

所属協会：日本看護協会,日本精神科看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 総務事務
- 高知県立大学看護学部同窓会 庶務・名簿係

■領域活動

- 看護相談室（CNS の会）の企画・運営

■非常勤講師等

- 高知県看護協会令和6年度継続教育研修「会議・カンファレンスでの発信力を高める研修」講師
- 高知県看護協会令和6年度一般病院における精神疾患対応力向上研修 講師
- 高知医療センター研修「話を聴く技術」講師
- 徳島文理大学大学院「コンサルテーション論」講師
- 高知県立あき総合病院「新人看護師をサポートするためのコミュニケーション技術」講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 1) 藤村眞紀,池内香,池添志乃,辻真美,福田敏秀：特別養護老人ホームにおける入居者の自分らしさを支えるケア,日本老年看護学会第29回学術集会抄録集,p136,2024.

加藤 昭尚(助教)

■審議会や活動報告

- 高知県立大学看護学会査読委員
 - 高知看護教育研究会企画委員
- 所属学会等：日本看護科学学会、日本看護管理学会、高知県立大学看護学会、
日本手術看護学会、高知看護教育研究会
- 所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部情報処理委員
- 看護学部カリキュラム検討プロジェクト書記
- 看護師国家試験対策委員
- 健康長寿センター看護学部公開講座「フィジカルアセスメント研修」講師
- 立志社中プロジェクト「健援隊」担当

■非常勤講師等

- 広島市立広島市民病院研究指導

上村 明咲(助教)

■審議会や活動報告

所属学会：日本クリティカルケア看護学会、高知女子大学看護学会

所属協会：日本看護協会、高知県看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 総務事務
- 臨床実習委員（事務担当）
- 広報委員学部担当（学部広報&ホームページ&オープンキャンパス他）
- 高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業

■領域活動

- 糖尿病保健指導連携体制構築事業（血管病調整看護師フォローアップ）において、基幹病院の血管病調整看護師による糖尿病重症化予防を推進するための地域連携体制構築を支援。
- 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座の「慢性疾患をもつ在宅療養者の看護」の科目において、演習での学習支援を2回（7月、12月）実施。

源田 美香(助教)

■審議会や学会活動

所属学会：日本看護科学学会、日本家族看護学会、高知県立看護学会、
日本在宅ケア学会、日本小児看護学会
所属協会：日本看護協会、日本専門看護師協議会

■看護学部企画活動

- ・ 高知女子大学看護学会 企画委員
- ・ 学部自己点検評価委員・認証評価委員
- ・ 看護学部学生委員会委員
- ・ 基金事業：入退院支援事業プロジェクトメンバー
- ・ 地域ケア会議推進プロジェクトメンバー
- ・ 高知県介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修担当

■領域活動

- ・ 家族看護学領域リカレント教育の企画・運営（計 7 回）

■非常勤講師等

- ・ 聖カタリナ大学看護学科「家族看護」非常勤講師
- ・ 高知学園短期大学看護学科「家族看護論」非常勤講師
- ・ 愛媛県がん看護実践能力向上研修会「家族看護」研修講師

■研究論文

【論文】

- ・ 岩崎順子,中村由美子,嶋岡暢希,高谷恭子,田村恵美,源田美香,三浦由紀子,有田直子,
佐東美緒,田之頭恵理,池添志乃,畦地博子,森下安子,中野綾美：小児のエンドオブライフに関わ
る看護師のコミュニケーションスキル, 高知女子大学看護学会誌,Vol.42(2),79-90,2025

【学会発表】

- 1) 長戸和子, 池添志乃, 瓜生浩子, 源田美香ほか：「家族看護エンパワーメントモデル」の活用－
実践を裏づけるナースの思考のプロセスを可視化する－, 第 31 回日本家族看護学会学術集会,
鎌倉, 令和 6 年 9 月
- 2) 小林秀行, 源田美香：中山間地域高齢者における社会とのケア関係とウェル・ビーイング向上
との関連、公共選択学会第 28 回大会、令和 6 年 12 月

塩見 理香(助教)

■審議会や活動報告

- 日本精神科看護協会高知県支部 査読委員
所属学会：日本看護科学学会、日本精神保健看護学会、高知県立大学看護学会、
日本デイケア学会、日本在宅ケア学会、日本災害看護学会、
日本看護シミュレーションラーニング学会
所属協会：日本看護協会、日本精神科看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部学生委員会（2回生学年担当）
- 教務委員
- 入学試験実施委員会（学部サブ）
- 親交会

■領域活動

- 老人看護学領域ケア検討会（6月）企画・運営サポート
- 老人看護学領域リカレント（2月）企画・運営サポート

■非常勤講師等

- 令和6年度高知県介護支援専門員更新（専門）研修【研修課程ⅠおよびⅡ】
「ケアマネジメントの演習～認知症のある方および家族等を支えるケアマネジメント」
- 令和6年度介護支援専門員更新研修（実務未経験）／再研修
「ケアマネジメントの演習～認知症のある方および家族等を支えるケアマネジメント」
- 令和6年度主任介護支援専門員更新研修
「認知症のある方および家族等を支えるケアマネジメント」
- 龍馬看護ふくし専門学校 非常勤講師
- 杜のホスピタル統計研修会講師

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 高橋真紀子, 藤代知美, 塩見理香, 稲垣佳代：精神保健医療福祉上のニーズを有する人が専門職や地域とつながる支援, 高知女子大学看護学会誌 49（2）, p68-78, 2024

【学会発表】

- 1) 加藤郁子, 大川貴子, 佐藤充, 明間正人, 中山洋子, 畦地博子, 塩見理香, 田井雅子：重度・慢性精神障害者のためのセルフケア・アセスメント・ツールを用いた看護介入モデルの検討, 第34回日本精神保健看護学会学術集会, 2024年6月

高橋 真紀子(助教)

■審議会や学会活動

- 高知女子大学看護学会会計
所属学会等：日本看護科学学会、日本地域看護学会、日本公衆衛生看護学会、
高知女子大学看護学会、日本精神保健看護学会
- 高知県保健師人材育成ガイドライン評価検討会委員

■大学・看護学部企画活動

- 保健委員
- 健康管理センター運営委員

■領域活動

- 高知県新任期保健師人材育成プログラムの企画実施、研修会実施への支援
- 高知県新任保健師人材育成評価検討会への支援
- 高知県中堅期保健師研修会への支援
- 高知県看護協会学会委員として学会の企画運営・査読委員として参画
- 高知県保健師交流大会実行委員

■著書及び研究論文

- 1) 高橋真紀子, 藤代知美, 塩見理香, 稲垣佳代: 精神保健医療福祉上のニーズを有する人が専門職や地域とつながる支援, 高知女子大学看護学会誌49 (2) , p68-78, 2024

【学会発表】

- 1) 小澤若菜, 川本美香, 高橋真紀子: 中堅期保健師の人材育成に関する文献検討. 第 70 回四国公衆衛生学会, 愛媛県, 令和 7 年 2 月

竹中 英利子(助教)

■審議会や活動報告

所属学会等：高知女子大学護学会

日本在宅ケア学会

日本看護シミュレーションラーニング学会

■大学・看護学部企画活動

- ・ 看護学部学生委員(4 回生学年担当)
- ・ 教務委員
- ・ 卒業生繋がり・キャリア支援プロジェクト (メンバー)
- ・ 入退院支援事業
- ・ 地域ケア会議推進プロジェクト
- ・ 健康長寿センター：

「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修(特定のものの)」運営、研修講師

■領域活動

- ・ 在宅看護学領域ケア検討会の企画・運営

■非常勤講師等

- ・ 令和 6 年度高知県介護支援専門員更新研修/実務研修 講師
 - ＜更新研修：研修課程Ⅰ＞
「ケアマネジメントの演習：生活の継続及び家族等を支える基本的なケアマネジメント」
 - ＜更新研修：研修課程Ⅱ＞
「ケアマネジメントにおける実践事例の研究および発表：生活の継続及び家族等を支える基本的なケアマネジメント」
 - ＜更新研修：実務未経験者/再研修＞
「ケアマネジメントの展開：生活の継続及び家族等を支える基本的なケアマネジメント」
 - ＜実務研修＞
「ケアマネジメントの展開：生活の継続及び家族等を支える基本的なケアマネジメント」
- ・ 令和 6 年度高知県主任介護支援専門員更新研修 講師
 - 「生活の継続及び家族等を支える基本的なケアマネジメント」

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 1) 竹中英利子,川上理子,森下幸子：慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント—看護介入の必要性の高い患者を捉える—,第 29 回日本在宅ケア学会学術集会,神奈川,令和 6 年 8 月.

田之頭 恵里(助教)

■審議会や学会活動

- 日本小児看護学会 査読委員
 - 高知女子大学看護学会 査読委員
- 所属学会等：日本小児看護学会、日本小児がん看護学会、日本家族看護学会、
日本看護科学学会、高知県立大学看護学会、日本公衆衛生学会、
日本移植・再生医療看護学会

■大学・看護学部企画活動

- 看護学部学生委員会委員
- 看護学部国際交流プロジェクトメンバー
- 土佐市プロジェクト(とさっ子健診)メンバー
- しらさぎ会役員

■非常勤講師等

- 令和6年度 がん教育講師派遣事業 黒岩小学校、吾北小学校
- 令和6年度 子育て支援員研修(専門研修 地域保育コース) 講師
- 令和6年度 高知県医療的ケア児等コーディネーター養成研修 講師
- 令和6年度 高知県医療的ケア児等看護技術研修 講師

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 岩崎順子, 中村由美, 嶋岡暢希, 高谷恭子, 田村恵美, 源田美香, 三浦由紀子, 有田直子, 佐東美緒, 田之頭恵里, 池添志乃, 畦地博子, 森下安子, 中野綾美: 小児のエンドオブライフに関わる看護師のコミュニケーションスキル, 高知女子大学看護学会誌, 49(2), 79-90, 2024.
- 2) 小林秀行, 田之頭恵里, 徳岡麻由, 佐東美緒: 子どもの社会経済状況が発育不良や不健康リスクに及ぼす影響～健診データと健康行動国際指標との関連の検討, 生協総研賞・第21回助成事業研究論文集, 77-89, 2025.

【学会発表】

- 1) 田之頭恵里, 徳岡麻由, 小林秀行: 小学生の夜更かしと生活習慣予防健診の健診データの関連, 第83回日本公衆衛生学会総会抄録集, p432, 2024.
- 2) 徳岡麻由, 田之頭恵里, 佐東美緒, 小林秀行: 小中学生の生活習慣病予防健診データと幸福度の関連, 第44回日本看護科学学会学術集会プログラム集, p55, 2024.

徳岡 麻由(助教)

■審議会や学会活動

- 所属学会：日本看護科学学会、日本家族看護学会、高知県立大学看護学会
日本母性衛生学会、日本母性看護学会、日本助産学会、日本公衆衛生学会
- 所属協会：日本看護協会
- ・ 高知県看護協会 3 職能生きるいのちの教育検討委員会委員
 - ・ 高知県性教育推進協議会委員

■大学・看護学部企画活動

- ・ 健康長寿研究センター運営会議委員
- ・ 大学院学務委員（修士・博士）
- ・ 看護学部学生委員（4 回生学年担当）
- ・ 土佐市プロジェクト（メンバー）とさっ子&母親学級
- ・ 地域共生学研究機構 リ・デザインプロジェクト担当

■領域活動

- ・ 母性・助産看護領域ケア検討会の企画・運営
- ・ 母性・助産看護領域卒業生交流集会の企画・運営
- ・ 母性・助産 Study・Meeting の企画・運営

■非常勤講師等

- ・ 高知学園短期大学「家族看護学」非常勤講師
- ・ 高知県看護協会助産師職能委員会 思春期教育講師

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) 小林秀行, 田之頭恵里, 徳岡麻由, 佐東美緒：子どもの社会経済状況が発育不良や不健康リスクに及ぼす影響～健診データと健康行動国際指標との関連の検討, 生協総研賞・第 21 回助成事業研究論文集, 77-89, 2025.

【学会発表】

- 1) 田之頭恵里, 徳岡麻由, 小林秀行, 小学生の夜更かしと生活習慣予防健診の健診データの関連, 第 83 回日本公衆衛生学会総会抄録集 p432, 2024.
- 2) 徳岡麻由, 田之頭恵里, 佐東美緒, 小林秀行：小中学生の生活習慣病予防健診データと幸福度の関連, 第 44 回日本看護科学学会学術集会プログラム集, p55, 2024.

中井 あい(助教)

■審議会や学会活動

所属学会等：高知女子大学看護学会，日本衛生学会，日本看護科学学会，日本看護研究学会，
日本老年看護学会，日本災害看護学会，日本地域看護学会，日本国際保健医療学
会，日本看護シミュレーションラーニング学会

- ・ 高知県立大学看護学会会計

■大学・看護学部企画活動

- ・ 大学院/学部図書委員
- ・ ボランティア委員

■領域活動

- ・ ケア検討会・リカレント教育の企画，運営
- ・ その他：老人看護学領域活動報告参照

■著書及び研究論文

【論文】

- 1) Nakai A., Morioka I.: Strengths within the Community Perceived by Older Adults Living Alone in a Semi-Mountainous Rural Region: A Qualitative Study. Nursing reports, 2024 ; 14(2), 829-837.
- 2) 中井あい，森岡郁晴：中山間地域の独居高齢者における食環境アクセシビリティの関連要因を用いた低栄養のリスク予測モデルおよび簡易評価シートの作成．日本衛生学雑誌．2024；79, 24008.

【学会発表】

- 1) Kawamura K., Tanino T., Ueno M., Kawamura S., Nakai A., Morioka I.: A comprehensive review of the health effects of shift work among nurses. 15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars. 2025.2.

西内 舞里(助教)

■審議会や活動報告

所属学会：日本看護科学学会、高知女子大学看護学会、日本助産学会

所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 母性看護・助産看護科目に関する授業・演習への取り組み
- 母性看護実習・助産看護実習担当
- 母性看護実習、助産看護実習Ⅰ・Ⅱ・総合看護実習の実習担当
- 母性・助産看護領域卒業生交流会運営
- 母性・助産看護領域リカレント教育運営

前田 愛友香(助教)

■審議会や活動報告

所属学会：高知県立大学看護学会、日本母性衛生学会、日本母性看護学会

所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- FD 委員会
- ボランティア委員

■領域活動

- 母性・助産看護領域ケア検討会の企画・運営
- 母性・助産 Study・Meeting の企画・運営

宮地 佐和子(助教)

■審議会や活動報告

所属学会：高知県立大学看護学会、日本クリニカルパス学会、日本看護管理学会

所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 自己学習教育環境整備・管理
- 大学院学務委員
- 健康長寿センター看護学部公開講座「フィジカルアセスメント研修」運営
- 高幡地区連携 BCP 委員会

■領域活動

家族看護領域

- 家族看護学領域リカレント教育、ケア検討会運営補助

基礎看護領域

- ナーシングスキルトレーニングルーム整備・管理
- 「基本的な看護技術チェックリスト」の改訂版の作成

看護管理領域

- 看護管理領域リカレント教育、ケア検討会参加

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 1) 宮地佐和子：入院前の看護師の働きかけと部署、説明時間、パスの関係,第 24 回日本クリニカルパス学会学術集会,愛媛,令和 6 年 10 月

森本 紗磨美(助教)

■審議会や学会活動

所属学会：日本看護科学学会、日本がん看護学会、日本クリティカルケア看護学会
高知県立大学看護学会編集委員

■大学・看護学部企画活動

- 高知医療センターとの包括的連携事業
- 大学院学生委員(副)
- FD委員会

■領域活動

- クリティカルケア看護学領域ケア検討会の運営補助

■非常勤講師

- 龍馬看護ふくし専門学校 非常勤講師

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 1) 大川宣容、佐藤まゆみ、平尾明美、緒方久美子、森本紗磨美、神家ひとみ：クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー、第44回日本看護科学学会学術集会

依岡 美里(助教)

■審議会や活動報告

高知県立大学看護学会 編集委員、学会誌査読委員

所属学会：日本看護科学学会、日本ヘルスコミュニケーション学会、日本離床学会、
高知県立大学看護学会

所属協会：日本看護協会

■大学・看護学部企画活動

- 教務委員
- 看護師国家試験対策委員
- 健康長寿センター看護学部公開講座「フィジカルアセスメント研修」運営
- 高知医療センター包括連携事業「看護研究」研究指導
- 高知県公立大学生生活協同組合理事

■領域活動

- 家族看護学領域リカレント教育運営補助
- ナーシングスキルトレーニングルーム整備・管理

■著書及び研究論文

【学会発表】

- 1) 依岡美里：看護師の専門的コミュニケーションスキルとしての沈黙の質問紙作成,第 16 回ヘルスコミュニケーション学会,神奈川,令和 6 年 8 月.

森下 安子(教授)

■審議会や学会活動

- 日本看護科学学会代議員
- 日本在宅看護学会代議員
- 日本在宅ケア学会広報委員会委員
- 日本在宅看護学会査読委員
- 日本看護系学会協議会専門看護師教育課程認定委員会・在宅看護専門部会委員
- 高知県教育委員
- 高知県高齢者保健福祉推進委員会委員
- 高知県訪問看護推進協議会委員
- 高知県介護支援専門員研修等向上委員会会長
- 高知市地域高齢者支援センター運営協議会委員
- 高知市地域密着型サービス運営委員会委員
- いの町地域包括支援センター運営協議会委員
- いの町地域密着型サービス運営委員会委員
- 日高村地域包括支援センター運営協議会委員長
- 日高村地域密着型サービス運営委員会委員
- 日高村障害程度区分認定審査委員

所属学会等：日本看護科学学会、日本在宅ケア学会、日本在宅看護学会、
日本災害看護学会、高知女子大学看護学会、

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿センター事業：高知県中山間地域等訪問看護師育成講座教員としての活動
- 健康長寿センター事業：基金事業「入退院支援体制推進事業」（高知県医療政策課からの受託）責任者としての活動
- 健康長寿センター：土佐市連携プロジェクトメンバーとしての活動

■非常勤講師

- 高知学園大学非常勤講師 「地域包括ケアシステム論」

■著書及び研究論文

【著書】

- 1) 森下安子（鈴木志津枝・藤田佐和編集）：成人看護学 慢性期看護論第3版－療養生活を支える社会資源の活用、ヌーベルヒロカワ、p138-147,
- 2) 森下安子（上野昌江・和泉京子編集）：公衆衛生学 第4版 第4章療養生活に焦点をあてた活動、中央法規出版、p537-558
- 3) 森下安子（白澤政和、内田洋子、岡田進一、小沢温、服部万里子、福富昌城他編集）：ケアマネジメント辞典、内科疾患の人の特徴とケアマネジメント③腎不全、中央法規出版、p202, 203

井上 加奈子(特任助教)

■審議会や学会活動

所属学会：高知女子大看護学会

■大学・看護学部企画活動

- ・ 健康長寿研究センター運営委員
- ・ 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座「訪問看護スタートアップ研修」専任教員

■領域活動

- ・ 新卒訪問看護スタートアップ研修 修了生フォローアップ研修
- ・ 新卒1年目フィジカルアセスメント研修（4回/年）
- ・ 新任・新卒訪問看護スタートアップ研修 修了生継続コンサルテーション
- ・ 就職ガイダンス（看護養成校）

■非常勤講師等

- ・ 公益社団法人高知県看護協会 在宅領域看護検討会委員
- ・ 国立大学法人高知大学医学部看護学科「在宅看護援助論」「在宅看護概論」非常勤講師
- ・ 独立行政法人国立病院機構高知病院附属看護学校「地域の暮らしを支える看護実践プロセス」非常勤講師
- ・ 学校法人日翔学園高知開成専門学校看護学科「地域・在宅看護総論」非常勤講師
- ・ 学校法人龍馬看護ふくし専門学校看護学科「在宅看護を支える看護Ⅰ」非常勤講師
- ・ 公益社団法人高知県看護協会 令和6年度施設・在宅を支援する看護師育成研修 講師・ファシリテーター
- ・ 公益社団法人介護労働安定センター ケア・サポート講習 講師
- ・ 公益社団法人介護労働安定センター 短期専門講習 講師
- ・ 公益社団法人介護労働安定センター 令和6年度介護労働講習 講師
- ・ 令和6年度中間地域等訪問看護師育成研修（フィジカルアセスメント） ファシリテーター
- ・ 社会医療法人仁生会細木病院在宅部研修会「在宅における倫理」「ACP」講師

上岡 千夏(助教)

■審議会や活動報告

所属学会：日本老年看護学会、日本認知症ケア学会、高知女子大学看護学会

所属協会：日本看護協会

■領域活動

ふれあい看護実習、看護基盤実習、領域看護実習（慢性期）、チーム医療実習、総合看護実習（慢性期）

横川 奈知(特任助手)

■審議会や学会活動

所属学会等：高知女子大看護学会
日本農村医学会
日本医療マネジメント学会

■大学・看護学部企画活動

- 健康長寿研究センター運営委員
- 入退院支援事業プロジェクトメンバー

■領域活動

- 入退院支援事業

■非常勤講師等

- 介護支援専門員研修 非常勤講師
- 高知県立幡多看護専門学校「地域・在宅看護方法論Ⅱ」非常勤講師



高知県立大学看護学部

〒781-8515 高知県高知市池 2751-1

Tel 088-847-8700 Fax 088-847-8670

HP <http://www.u-kochi.ac.jp/site/kango/>